

はじめに

「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学 ～成熟社会に向けての不断前進～」を大会テーマとする日本体育・スポーツ・健康学会第 72 回大会が、2022（令和 4）年 8 月 31 日から 9 月 2 日までの 3 日間、千葉県印西市にある順天堂大学さくらキャンパスにて開催されました。

昨年度の第 71 回大会（筑波大学）から、学会の名称と目的が改称・改正され、さらに、年次学会大会は、学会本部がプログラム構成や運営の基本方針を主導する方式へと大きく様変わりをしましたが、今回はその大きな変革期の中で新たな学会大会の在り方を模索し、特に境界線を引くことが難しかった主管校としての役割や関わり方を一つ一つ確認しながら臨んだ大会でした。

さらに、現実的にもっとも苦慮した点は、やはり、このコロナ禍において学会大会をいかに運営するのか、すなわち、オンライン方式、対面方式、あるいはハイブリッドのどの方式で行うのか、という点に集約されます。参加者の安全の確保は何にも代えがたい前提であり、そのためにオンライン学会のメリットを存分に引き出すことに成功した筑波大学での第 71 回大会の方式に倣うのか、それとも、慶応大学での第 70 回大会から東京オリンピック・パラリンピックを挟み実に 3 年間、直接対面で議論する機会を失っている会員のもどかしさや違和感、また講演・発表プログラム以外に会員同士が時間と場を共有する学会大会本来の魅力を特に若い会員にいかに伝えるのかを考えれば、対面方式での開催に向けてできる限りの努力をしたい。この開催方式のジレンマに対して、感染状況が刻々と変化する中で意思決定をしていくことは極めて難しいことでした。

最終的には、新型コロナウイルス感染の第 7 波が収まらぬ状況ではありましたが、社会はすでにウィズコロナへと確実に舵を切り始めた状況であることに背中を押され、「～成熟社会に向けての不断前進～」というサブテーマに勇気づけられながら、新型コロナウイルス感染症対策を徹底すれば対面での実施が可能であることを執行部の皆様にご理解いただき、一部にオンライン方式の要素を取り入れながら大学キャンパスにて対面方式で開催することができました。

初日のオープニングセレモニー・総会を皮切りに、大会 1～2 日目には、体育・スポーツ・健康科学の社会的課題への貢献を強く意識した 2 つの本部企画シンポジウムと、また学際的な総合学会を実現することを目指して学会内に設置されている 5 つの応用（領域横断）研究部会が企画する 15 題の「テーマ別シンポジウム」及びそれに関連する 118 題の「テーマ別研究発表」が講義室等で行われました。大会 3 日目には、従来通りの専門領域別研究発表 215（口頭 64、ポスター 151）題と 14 題の専門領域企画キーノートレクチャー、ならびに専門領域の総会・連絡会等の諸会議が行われました。

なお、感染症防止の対策は、社会一般での基本的な対応に準じたものであることをあらかじめ周知し、当日も入構時の検温やマスク着用をはじめとする基本的な事柄を徹底しました。さらに、全体のプログラム進行との兼ね合いから、できる限り人の流れが分散するように、6つのランチョンセミナーを1日目と2日目に配置し、また20社を超える協賛企業の展示を2つの体育館に分散させました。と同時に151題の発表ポスターを、2つの体育館に初日より掲示できるようにしました。さらに、一部のシンポジウムやキーノートレクチャー等は、オンラインでのリアルタイム、または後日オンデマンドでの配信ができるように設定しました。なお、体調に不安があり止むを得ず会場での口頭発表に参加できない発表者に対しては、オンライン発表ツールを用いて外部より発表できるように特例的な対応を行いました。一方、名誉会員懇談会と情報交換会は、残念ながら感染拡大防止の観点から中止としました。これらの取り組みによって、感染防止の観点において一定の成果をあげることができたのではないかと考えております。

最後になりますが、コロナ禍における大変難しい状況下での学会運営にご尽力、ご支援、ご協力いただきました学会理事会・事務局、後援組織・団体、協賛企業・団体の関係者、組織委員会／実行委員会委員の皆様、そして大会運営業務をサポートいただきました株式会社ソウブン・ドットコム（旧社名：創文印刷工業株式会社）の皆様にも心より感謝申し上げます。また、当日の大会運営をお手伝いいただいた順天堂大学教職員・学生の皆様にも御礼申し上げます。そしてなんといっても、感染防止に最大限の協力をしながら参加して下さった約1,600名の皆様、第72回大会を盛り上げていただき本当にありがとうございました。

日本体育・スポーツ・健康学会
第72回組織委員会／実行委員会
委員長 内藤 久士

日本体育・スポーツ・健康学会第 72 回大会

期 間

2022 年 8 月 31 日（水）、9 月 1 日（木）、2 日（金）

開催形式

対面式（一部オンライン配信）

主 催

一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会
日本体育・スポーツ・健康学会第 72 回大会組織委員会

主 管

順天堂大学

後 援

公益社団法人 全国大学体育連合
公益財団法人 日本オリンピック委員会
公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会
公益財団法人 日本スポーツ協会
スポーツ庁
独立行政法人 日本スポーツ振興センター
(50 音順)

大会本部

〒 160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE
一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局内
日本体育・スポーツ・健康学会第 72 回大会事務局
大会ホームページ <https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss72/top>

目次

はじめに	1
大会概要	3
大会日程	5
大会役員・大会組織委員会	8
大会実行委員会	9
全体概要	
1. 大会の準備	10
2. 大会の運営概要	19
学会本部企画	
本部企画シンポジウム 1	27
本部企画シンポジウム 2	29
テーマ別研究発表・シンポジウム	
テーマ別研究発表・シンポジウムについて（まとめ）	31
テーマ別研究発表・シンポジウムについて（テーマ一覧表）	32
スポーツ文化研究部会	34
学校保健体育研究部	40
競技スポーツ研究部	46
生涯スポーツ研究部会	53
健康福祉研究部会	61
専門領域企画・専門領域別研究発表	
体育哲学.....	68
体育史.....	69
体育社会学.....	70
体育心理学.....	71
運動生理学.....	72
バイオメカニクス.....	73
体育経営管理.....	74
発育発達.....	75
測定評価.....	76
体育方法.....	77
保健.....	78
体育科教育学.....	79
スポーツ人類学.....	80
アダプテッド・スポーツ科学.....	81
介護予防・健康づくり.....	82
体育・スポーツ政策.....	83

大会日程 1日目 8月31日(水)

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
3号館3階 [301]		オープニング セレモニー・総会 9:30-10:40	競技スポーツ 【課題A-1】 (口頭3演題) 11:00-11:50			[LIVE]競技スポーツ 【課題Aシンポジウム】 トップアスリート養成の拠点と しての大学の意義と問題点Ⅱ 14:00-15:50		[LIVE]本部企画シンポジウム① 「総合知を支える学会」を 目指して 16:20-18:10			
3号館4階 [401]			競技スポーツ 【課題A-2】 (口頭3演題) 11:00-11:50			[LIVE&VOD]スポーツ文化 【課題Aシンポジウム】 スポーツを通じた開発支援 と持続可能性 14:00-15:50		[LIVE]本部企画シンポジウム② 持続可能な成熟社会と 体育・スポーツ科学 16:20-18:10			
3号館4階 [402]			学校保健体育 【課題A-1】 (口頭3演題) 11:00-12:20			学校保健体育 【課題Aシンポジウム】 共生社会の創造に向けた 大学体育授業の可能性 14:00-15:50		(本部企画シンポジウム② サテライト会場)			
3号館8階 [801]					ラフォーレ① 順天堂大学ス ポーツ健康医科 学推進機構① 12:40-13:40					情報交換会 中止	
2号館4階 [4E]			学校保健体育 【課題A-2】 (口頭5演題) 11:00-12:20		名誉会員懇談会 中止						
2号館1階 [11]			生涯スポーツ 【課題A-1】 (口頭4演題) 11:00-12:10			生涯スポーツ 【課題Aシンポジウム】 協働システムの現状と課題から 今後を考える 14:00-15:50					
2号館1階 [12]			生涯スポーツ 【課題A-2】 (口頭3演題) 11:00-11:50		ラフォーレ② 株式会社SPLYZA 12:40-13:40						
2号館2階 [21]			健康福祉 【課題A-1】 (口頭3演題) 11:00-11:50			[VOD]健康福祉 【課題Aシンポジウム】 ライフスタイルに応じた 健康増進・体力向上の捉え方 14:00-15:50					
2号館2階 [22]			健康福祉 【課題A-2】 (口頭3演題) 11:00-11:50				9/1・9/2 口頭発表者用 発表データ事前受付 (希望者)				
2号館4階 [45]			スポーツ文化 【課題A-1】 (口頭3演題) 11:00-11:50								
2号館4階 [46]											
3号館5階 [501]											
3号館5階 [502]											
第1 体育館		←	企業展示(バスケットボール館・バレーボール館)						→		
3号館1階		←	書籍展示						→		
	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
ポスター 発表		←	ポスター掲示(バスケットボール館・バレーボール館)						→		

LIVE：リアルタイムオンライン配信
VOD：オンデマンド動画配信

大会日程 2日目 9月1日(木)

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
3号館3階 【301】	学校保健体育 【課題B-1】 (口頭3演題) 9:00-9:50		[LIVE] 学校保健体育 【課題Bシンポジウム】 より良質な保健体育授業と その学習内容を考える 10:30-12:20			健康福祉 【課題C-1】 (口頭4演題) 14:00-15:10		健康福祉 【課題C-2】 (口頭4演題) 15:30-16:40		[LIVE] 健康福祉 【課題Cシンポジウム】 オンライン化で得られる健康、 失う健康 17:00-18:50	
3号館4階 【401】	学校保健体育 【課題B-2】 (口頭3演題) 9:00-9:50		[LIVE] 生涯スポーツ 【課題Bシンポジウム】 子どもたちのWell-Beingと スポーツ 10:30-12:20					競技スポーツ 【課題C-2】 (口頭4演題) 15:30-16:40			
3号館4階 【402】	競技スポーツ 【課題B-1】 (口頭5演題) 9:00-10:20		競技スポーツ 【課題Bシンポジウム】 競技スポーツの女性コーチ養成 10:30-12:20			競技スポーツ 【課題C-1】 (口頭4演題) 14:00-15:10		競技スポーツ 【課題C-3】 (口頭4演題) 15:30-16:40		競技スポーツ 【課題Cシンポジウム】 ハイパフォーマンススポーツに おける性差に応じたトレーニング 17:00-18:50	
3号館8階 【801】					ランチョン③ アーカイブティッ プス株式会社 12:40-13:40						
2号館4階 【4E】					ランチョン④ 順天堂大学 スポーツ健康医 科学推進機構② 12:40-13:40	学校保健体育 【課題C-1】 (口頭4演題) 14:00-15:10		学校保健体育 【課題C-2】 (口頭4演題) 15:30-16:40		学校保健体育 【課題Cシンポジウム】 子どもの心身機能の現状から考える これからの保健体育とその科学的背景 17:00-18:50	
2号館1階 【11】	生涯スポーツ 【課題B-1】 (口頭3演題) 9:00-9:50				ランチョン⑤ 日本トレーニング 指導者協会 12:40-13:40			生涯スポーツ 【課題C-1】 (口頭5演題) 15:20-16:40		生涯スポーツ 【課題Cシンポジウム】 国民の運動・スポーツ参加の現状 および問題点(その2) 17:00-18:50	
2号館1階 【12】	生涯スポーツ 【課題B-2】 (口頭3演題) 9:00-9:50				ランチョン⑥ 順天堂大学 スポーツ健康医 科学推進機構③ 12:40-13:40			生涯スポーツ 【課題C-2】 (口頭5演題) 15:20-16:40			
2号館2階 【21】	健康福祉 【課題B-1】 (口頭3演題) 9:00-9:50		健康福祉 【課題Bシンポジウム】 運動から認知へ、認知から運動へ 10:30-12:20					スポーツ文化 【課題C-1】 (口頭4演題) 15:30-16:40		[VOD] スポーツ文化 【課題Cシンポジウム】 スポーツ文化の浸透戦略(2) 17:00-18:50	
2号館2階 【22】	スポーツ文化 【課題B-1】 (口頭3演題) 9:00-9:50				地域協力学会 連絡会議 12:40-13:40			9/2 口頭発表者用 発表データ事前受付 (希望者)			
2号館4階 【45】	スポーツ文化 【課題B-2】 (口頭3演題) 9:00-9:50		[VOD] スポーツ文化 【課題Bシンポジウム】 スポーツにおける/をとおした 「多様性と調和」はいかにして可能か 10:30-12:20			学校保健体育 【課題C-2】 (口頭4演題) 14:00-15:10		学校保健体育 【課題C-5】 (口頭4演題) 15:30-16:40			
2号館4階 【46】	スポーツ文化 【課題B-3】 (口頭3演題) 9:00-9:50					学校保健体育 【課題C-3】 (口頭4演題) 14:00-15:10		学校保健体育 【課題C-6】 (口頭3演題) 15:30-16:20			
3号館5階 【501】											
3号館5階 【502】											
第1 体育館	企業展示(バスケットボール館・バレーボール館)										
3号館1階	書籍展示										
	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
ポスター 発表	ポスター掲示(バスケットボール館・バレーボール館)										

LIVE：リアルタイムオンライン配信
VOD：オンデマンド動画配信

大会日程 3日目 9月2日(金)

		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
3号館3階 [301]	体育心理学 (心)	(心) 総会 9:00-9:50				(心) キーノート レクチャー① 13:00-13:50	(心) キーノート レクチャー② 14:00-14:50	(心) 口頭 20分×9演題 15:00-18:10			
3号館4階 [401]	体育科教育学 (教)	(教) 理事会 9:00-10:00		(教) 口頭 15分×4演題 10:20-11:30		(教) 総会 13:20-14:20	(教) 口頭 15分×4演題 14:40-15:50				
3号館4階 [402]	体育経営管理 (経)			(経) 口頭 20分×3演題 10:20-11:30		(経) 総会 13:30-14:30					
3号館8階 [801]	バイオメカニクス (バ)	(バ) 理事会 9:00-10:00		(バ) キーノート レクチャー 10:20-11:20	専門領域連絡 会議 12:00-13:00	(バ) 口頭 14分×4演題 13:20-14:20					
2号館4階 [4E]	発達発達(発) 体育・スポーツ 政策(政)	(発) 理事会 9:00-10:00		(発) キーノート レクチャー 10:50-11:50	(政) キーノート レクチャー 12:15-13:10	(政) 総会 13:20-14:20	(政) 口頭 25分×7演題 14:40-17:50				
2号館1階 [11]	体育方法 (方)	(方) 理事会 9:00-10:00		【VOD】 (方) キーノートレクチャー 11:00-12:30							
2号館1階 [12]	体育社会学 (社)	(社) 評議員会 9:00-9:50	(社) 口頭 25分×2演題 10:00-10:50	(社) キーノート レクチャー 11:00-11:50	(社) 総会 12:00-13:00	(社) 口頭 25分×3演題 13:10-14:30	(社) 口頭 25分×3演題 14:35-16:00				
2号館2階 [21]	測定評価 (測)	(測) 理事会 9:00-10:00	(測) 口頭 12分×6演題 10:20-11:40			(測) 総会 13:00-14:00	(測) キーノート レクチャー 14:10-15:10	(測) 口頭 12分×6演題 15:20-16:40			
2号館2階 [22]	体育史 (史)		(史) キーノートレクチャー 10:00-11:20			(史) 口頭 35分×4演題 13:00-15:40					
2号館4階 [45]	アダプテッド・ スポーツ科学 (ア)	(ア) 評議員会 9:00-9:50	(ア) キーノートレクチャー 10:00-11:30	(ア) 総会 11:40- 12:20							
2号館4階 [46]	介護予防・健康 づくり(介) 体育哲学(哲)	(介) 理事会 9:00-10:00	(介) キーノート レクチャー 10:00-11:00	(介) 口頭 10分× 2演題 11:20- 11:40	(哲) 浅田学術奨励賞 受賞記念講演 12:00-13:00	(哲) 総会 13:20-14:20	(哲) 口頭 30分×3演題 14:40-16:20				
3号館5階 [501]	スポーツ人類学 (人)	(人) 世話人会 9:00-10:00	(人) キーノート レクチャー① 10:00- 10:40	(人) キーノート レクチャー② 11:00- 11:40		(人) 総会 13:30-14:30	(人) 口頭 20分×3演題 14:40-15:50				
3号館5階 [502]	保健 (保)	(保) 理事会 9:00-9:50	(保) 総会 10:00- 10:50	(保) キーノート レクチャー 11:00-11:50		(保) 口頭 15分×2演題 13:15- 13:50					
第1 体育館		← 企業展示(バスケットボール館・バレーボール館) →									
3号館1階		← 書籍展示 →									
		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
ポスター 発表	バスケット	発達発達(奇数) 9:00-10:00	発達発達(偶数) 10:00-11:00	運動生理学 11:00-12:00		体育方法(偶数) 13:00-14:00					
			体育方法(奇数) 10:00-11:00		バイオメカニクス 11:30-13:00						
				測定評価 11:40-12:20							
	バレー		体育心理学(奇数) 10:00-11:00	体育心理学(偶数) 11:00-12:00	体育経営管理 12:00-13:00	アダプテッド・スポーツ科学 13:00-14:30					
				体育科教育学 11:30-13:00		保健 14:00-15:00					

VOD: オンデマンド動画配信

大会役員・大会組織委員会

大会名誉会長	順天堂大学長 新井 一					
顧問	鈴木 大地					
大会会長	一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会会長 菊 幸一					
組織委員長	内藤 久士					
副委員長	吉村 雅文					
事務局長	長登 健					
副事務局長	鈴木 宏哉 河村 剛光					
事務局	宮川 山水 [†] 山野 陽子 [†] 齋藤 うい [†]					
総務委員会	深澤 浩洋* 渡邊 貴裕 尾高 邦生 宮本 恵里					
企画委員会	鈴木 宏哉* 伊坂 忠夫* 沢井 史穂* 水野 基樹 涌井佐和子					
	工藤 康宏 木藤 友規 渡 正 荻原 朋子 川田裕次郎					
	村上 祐介 河村 剛光* 門屋 悠香 島崎 佑					
渉外委員会	鈴木 宏哉* 河村 剛光* 山崎 一彦 原田 睦巳 中嶽 誠					
	福 典之 堀池 巧 窪田 敦之 高峰 修* 小笠原悦子					
	野口 亜弥 村瀬 智彦* 室伏 由佳 山田 泰行					
経理委員会	佐々木玲子* 吉田 和人 中田 学					
監事	岡出 美則* 青木 和浩					

* 日本体育・スポーツ・健康学会理事会選出委員

† 日本体育・スポーツ・健康学会事務局選出委員

大会実行委員会

委員長	内藤 久士									
副委員長	吉村 雅文									
事務局長	長登 健									
副事務局長	鈴木 宏哉	河村 剛光								
運営委員長	和氣 秀文									
運営委員	小笠原悦子	黒須 充	久保原 禅	廣瀬 伸良	吉田 和人					
	鈴木 良雄	大野 早苗	廣津 信義	中村 充	町田 修一					
	青木 和浩	高澤 祐治	黄田 常嘉	水野 基樹	山崎 一彦					
	鯉川なつえ	原田 睦巳	飯嶋 正博	中村 恭子	中嶽 誠					
	堀 智子	涌井佐和子	牛尾 直行	工藤 康宏	松山 毅					
	柳谷登志雄	福 典之	渡邊 貴裕	深尾 宏祐	宮本 直和					
	杉林 孝法	谷本 道哉	堀池 巧	長岡 知	庄子ひとみ					
	佐々木 啓	大久保菜穂子	尾高 邦生	室伏 由佳	木藤 友規					
	荻原 朋子	窪田 敦之	坂本 彰宏	渡 正	冨田 洋之					
	武田 剛	山田 泰行	中西 唯公	村上 達也	コザチェンコ オルガ					
	門屋 悠香	塩田 有規	山中 航	高梨 雄太	川田裕次郎					
	中田 学	竹澤 稔裕	杉山 和也	長門 俊介	染谷 由希					
	村上 祐介	島寄 佑	吉原 利典	宮本 恵里	鄧 鵬宇					
	大田 穂	野口 亜弥	廣瀬 絵美	佐藤 皓也	山口 慎史					
	野呂 啓晃	黒坂 裕香	川井 航	スポーツ健康医科学研究所スタッフ						
	順天堂大学さくらキャンパス職員									

実行委員会主管校事務局 大竹 淳雅 順天堂大学さくらキャンパス事務局

(学会選出委員)

本部企画担当	伊坂 忠夫	高峰 修	一階 千絵
テーマ別企画担当	沢井 史穂	近藤 智靖 (スポーツ文化)	
	高橋 浩二 (学校保健体育)	広瀬 統一 (競技スポーツ)	
	中野 貴博 (生涯スポーツ)	岩井 浩一 (健康福祉)	
専門領域別企画担当	荒牧 亜衣 (体育哲学)	木村 華織 (体育史)	
	石澤 伸弘 (体育社会学)	兄井 彰 (体育心理学)	
	福本 寛之 (運動生理学)	橋詰 賢 (バイオメカニクス)	
	関根 正敏 (体育経営管理)	中西 純 (発育発達)	
	大藏 倫博 (測定評価)	野口 智博 (体育方法)	
	岩田 英樹 (保健)	細越 淳二 (体育科教育学)	
	小木曾航平 (スポーツ人類学)	曾根 裕二 (アダプテッド・スポーツ科学)	
	館 俊樹 (介護予防・健康づくり)	村本宗太郎 (体育・スポーツ政策)	
実行委員会学会事務局	宮川 山水	山野 陽子	齋藤 うい

全体概要

1. 大会の準備

(1) 広報

○大会ウェブサイト

前回大会同様に Confit 機能の大会ウェブサイトを利用した。ウェブサイトの構築及び更新作業は、学会事務局において担当した。トップ画像については株式会社ソウブン・ドットコム（旧社名：創文印刷工業株式会社）に委託した。大会ウェブサイトの制作過程は表 1 の通り。

表 1 ウェブサイトの制作過程

作業月	内容等
2021 年 12 月	大会ウェブサイトの提供・掲載内容の検討・ヘッダー画像の作成
2022 年 1 月	トップページ、ご挨拶、開催概要、重要なお知らせ、参加登録の申し込み、研究発表の申し込み、広告・協賛等の公開
4 月	早期参加申込・研究発表申込の開始
5 月	早期参加申込（早期参加費）、研究発表申込を〆切 事前参加申込（事前参加費）開始 大会日程・企画の公開
6 月	託児所のご利用案内の公開
7 月	タイムテーブル、プログラム、大学・大学院紹介の公開
8 月	口頭発表者の皆様へ、ポスター発表者の皆様へ、コーディネーター・座長の皆様へ、Zoom 利用の手引き、オンライン視聴の手引きの公開
9 月	オンライン視聴用の Zoom ボタンの公開 オンデマンド配信の開始

○ポスター

前回大会同様に、参加登録促進のためにポスターを作成した。ポスターのデザインについては、ウェブサイトのデザインをもとには株式会社ソウブン・ドットコム（旧社名：創文印刷工業株式会社）に依頼した。

印刷数：500 部

ポスターの発送先：学会役員と代議員 84 名 各 2 枚

2019 年の年次大会案内ポスター配布先 112 箇所 各 2 枚

後援団体 6 箇所 各 1 枚

順天堂大学 30 枚

○プレスリリース

7 月末に「JSPO 記者クラブ・JOC 記者会」にプレスリリースの投げ込みをした。内容は広報と本部企画委員会で作成した。

（２）協賛・後援

- ① これまでに協賛実績のある企業・大学・団体に対して、大会事務局から２回（2022年１月中旬と３月下旬）にわたり協賛依頼（趣意書）を送付した。同時に実行委員、学会理事がつながりのある企業・大学・団体に対して協賛依頼を行った。
- ② 協賛企業、大学・団体、後援団体を招待した。原則３名とし、事前に参加予定人数の申込を受け付けた。現地参加 63 名、オンライン視聴 5 名の申込があった。

＜協賛メニュー＞

- ・プログラム冊子広告（カラー・白黒、面積により 1 件あたり 3 万円～20 万円）
 - ・企業展示（1 小間 12 万円）
 - ・大学・団体展示（1 小間 5 万円）
 - ・バナー広告（1 件 5 万円）
 - ・Web 大学・大学院紹介（1 件 5 万円）
 - ・CM動画（10 秒 5 万円～45 秒 10 万円）
 - ・提供品
 - ・寄付金
- ③ 大会プログラムが完成次第、協賛企業、団体・大学に大会長名の送付状と共に大会事務局より送付した。大会後、大会長名でお礼状と報告書を送付した。
 - ④ 以下の団体に後援名義使用許可申請を行い許可された。
申請には１～2 か月を要した。後援名義はポスター、大会Webサイトに掲載した。

公益社団法人 全国大学体育連合
公益財団法人 日本オリンピック委員会
公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会
公益財団法人 日本スポーツ協会
スポーツ庁
独立行政法人 日本スポーツ振興センター

- ⑤ ランチョンセミナー
協賛と同時に企業・団体に企画を募集した。企業 2 件、団体 4 件の計 6 件の応募があり催行した。弁当は株式会社ソウブン・ドットコム（旧社名：創文印刷工業株式会社）が注文の取り纏め、弁当業者の手配、ゴミ回収を行った。

○協賛一覧（50 音順・敬称略）

プログラム広告	
企業・団体	
アーカイブティップス株式会社	株式会社大修館書店
株式会社アイ・ケイ コーポレーション	竹井機器工業株式会社
アイエムエフ株式会社	中央法規出版株式会社
有限会社市村出版	筑波大学出版会
医療法人社団 順福会 えこだ駅前 山田整形外科	株式会社東洋館出版社
株式会社インディバ・ジャパン	東洋メディック株式会社
有限会社エスアンドエムイー	株式会社道和書院
大塚ターフテック株式会社	日本アプライドスポーツ科学会
株式会社学研教育みらい	公益社団法人日本柔道整復師会
北関東体育学会	日本体操学会
株式会社Q'sfix	特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会
株式会社杏林書院	公益社団法人日本フィットネス協会（JAFA）
株式会社溪水社	パナソニック株式会社
株式会社 光文書院	株式会社フィットネスアポロ社
公益財団法人笹川スポーツ財団	株式会社フォーアシスト
医療法人社団 淳英会 Jメディカルおゆみの	福村出版株式会社
順天堂大学啓友会	富士医科産業株式会社
株式会社小学館集英社プロダクション	株式会社Rapsodo Japan
セノー株式会社	
大学関係	
鹿屋体育大学	八戸学院大学
近畿大学	びわこ成蹊スポーツ大学
国土舘大学大学院スポーツ・システム研究科	福岡大学
順天堂大学スポーツ健康科学部大学院スポーツ健康科学研究科	北翔大学大学院
東京女子体育大学	山梨学院大学
日本女子体育大学	立教大学
日本体育大学	

大会Webサイト バナー掲載	
株式会社アンドセンス	医療法人社団 順福会 えこだ駅前 山田整形外科
有限会社エスアンドエムイー	中京大学 スポーツ科学研究科
株式会社オンサイドワールド	株式会社テキスト
医療法人社団 淳英会 Jメディカルおゆみの	株式会社ノビテック
順天堂大学啓友会	

企業展示	
アーカイブティップス株式会社	株式会社テクノリンク
株式会社アボワテック	東洋メディック株式会社
インデックス有限会社	株式会社トリニティー
有限会社エスアンドエムイー	株式会社ナックイメージテクノロジー
株式会社OCL	株式会社ノビテック
株式会社Q'sfix	株式会社フィットネスアポロ社
コナミスポーツ株式会社	株式会社フォーアシスト
酒井医療株式会社	富士医科産業株式会社
株式会社SPLYZA	フットボールギア株式会社
セントラルスポーツ株式会社	ラッキーベル株式会社
株式会社 ダートフィッシュ・ジャパン	

大学・団体展示	
公益財団法人健康・体力づくり事業団 NPO法人健康運動指導士会	順天堂大学
特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会	

Web大学・大学院紹介	
順天堂大学・大学院	筑波大学大学院 スポーツ・オリンピック学学位プログラム
中京大学	

CM動画
株式会社千葉ロッテマリーンズ

提供品
大塚製薬株式会社

寄 付
株式会社大林組
清水建設株式会社
株式会社ナカノフドー建設
三建設備工業株式会社

(3) 経理

経理委員会の役割の確認
 予算書の作成方法の確認
 参加者と参加費の試算
 委託費見積依頼
 予算書（案）の作成・修正
 第 72 回大会における臨時雇いに関する申し合わせの作成

(4) 企画

学会大会委員会、企画委員会を中心とし、関係各所に確認をとりながら、プログラム案を作成し、調整、準備を進めた。プログラムは、1) 学会本部企画、2) 応用研究部会企画テーマ別シンポジウム、3) 応用研究部会企画テーマ別研究発表、4) 専門領域企画に大別される。

○学会本部企画

- ① オープニングセレモニー・総会（1 日目）：大会組織委員長として、順天堂大学内藤久士先生にご挨拶をいただけるように準備した。総会の実施については、学会事務局が担当した。
- ② 本部企画シンポジウム 1・2（1 日目）：本部企画シンポジウムの企画運営については、企画委員会が担当した。
- ③ 地域協力学会連絡会議（2 日目）、専門領域連絡会議（3 日目）：連絡会議の実施については、学会事務局が担当した。
- ④ 名誉会員懇談会、情報交換会：新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、中止とした。

(5) 参加・発表申し込み

○事前準備

前回大会同様に、Confit 機能の参加登録システム・演題登録システムを利用した。システムの構築は、学会事務局において担当した。4 月 1 日から本番環境サイトを稼働した。

○領収書発行

前回大会同様に、Confit の領収書ダウンロード機能を利用し、参加者自身で大会マイページより発行できるようにした。領収書ダウンロード機能は、クレジットカード決済並びに銀行振込のみの対応のため、その他決済の方には個別に対応した。

○参加証発行

今大会より、Confit のQRコード付き参加証のダウンロード機能を導入した。参加者には大会マイページよりダウンロード、印刷したものを持参して頂き、スタッフのスマートフォン等でQRコードを読み込み受付した。

○大会プログラム（冊子）作成

大会プログラム（冊子）に関する校正、印刷、発送等の作業については、有限会社創文企画に委託した。大会プログラムの制作過程については、表2の通り。

表2 プログラムの制作過程

作業月	内容等
2022年6月末	申込演題、シンポジウム、専門領域企画の原稿データを事務局から創文企画へ送付し、順次原稿の校正が始まる。 校正作業は、組織委員会と応用部会担当者、専門領域事務局に依頼した。
8月4日	校了
8月下旬	8月19日頃より、重要なお知らせ（注1）を同封し、事務局からプログラムを発送した

○製作物

- ・参加証(Confitダウンロード用、当日申込用、忘れた人用)
- ・申込用紙（現地申し込み用）
- ・ネームカード（スタッフ、出展者、招待者、取材関係）
- ・ストラップ（参加者、スタッフ）
- ・ランチョンセミナー整理券

○海外協定学会からの招聘者対応

協定学会（インドのNAPCESS）から招聘者2名が参加した。アテンドを主管校（順天堂大学）の学生に依頼した。会場内の移動、食事や発表のサポートに3名の同学生が対応にあたった。勤務条件等は本部国際交流委員会の「学会大会における学術協定締結学会との費用負担に関する申し合わせ」に準じ、アルバイト代は本部が負担した。尚、ドイツから招聘者1名が来日する予定だったが、感染への警戒が強まったため渡航を取りやめ発表を取り下げた。

重要なお知らせ

・新型コロナウイルス感染症対策について

開催にあたっては、千葉県（会場所在地）新型コロナウイルス感染症対策本部の情報を参考にしながら、感染症対策に十分な注意を払い、大会を運営いたします。

来場される方へのお願い

（１）前日及び当日 37.5℃以上の発熱や体調不良等の場合には来場をお控えください。

※学会参加数日前からの健康チェックをお願いいたします。

（２）必ず不織布マスクの着用をお願いいたします。

（３）厚生労働省 接触確認アプリ（COCOA）等をぜひご活用ください。

（４）学会期間中に発熱した場合には、来場を控え、千葉県庁「熱があるときは」に従い、人との接触は避け、ご自身で対応をお願いいたします。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kenfuku/hatsunetsu.html>

（千葉県 熱があるときは で検索）

（５）各会場の定員は約 50%を上限とします。間隔を空けて着席してください。

（６）食事は、感染対策を行った場所にて、黙食にご協力ください。

・新型コロナウイルス感染症の外出制限により来場できない発表者への対応について

発表者が新型コロナウイルス感染症の外出制限等で発表当日に来場できない場合、かつ共同研究者による代理発表が困難な場合には希望によりオンラインで発表も可能です。

ご希望の方は分かり次第早めに大会事務局までご連絡をください。事前に連絡がなく欠席された場合は、発表取り消しとみなされますので、ご注意ください。

※詳細は大会 HP をご覧ください。

・交通アクセスについて

駐車場の用意はございません。京成酒々井駅と会場を往復する無料シャトルバスを増便し、路線バスと合わせると約 10 分間隔で運行します。

・インターネット

会場内では参加者用にフリーWi-Fiが使用できます。また、初日と 2 日目に開催される第 1 会場と第 2 会場のシンポジウムについては、LIVE 配信を行いますので、会場の定員を超えた場合には、インターネットで参加することができます。

これまでに何度も組織委員会で開催方法を検討し、3 年ぶりの対面での学会大会を行うこととしました。感染症対策を十分に施し実施いたしますが、参加者の皆様におかれましては、ご自身や大切な人を守るための準備・行動を切にお願い申し上げます。

○参加者数内訳

第72回大会の事前参加申込者は1,342名、当日現地申込者は163名、オンライン参加申込者は59名であった（表3）。事前参加申込者1,342名のうち、大会期間中に来場された参加者は1,018名であった（表4）。オンライン配信を実施したプログラムの参加者数は、表5の通りである。

表3 参加申込者数

区分	早期割引	事前割引	通常	当日現地 受付	オンライン 参加	申込者 合計
	4/1～5/11	5/12～7/11	8/1～8/17	8/31～9/2	8/1～8/17	
会員	626	279	64	104	38	1,111
非会員	43	22	11	24	6	106
学生会員	172	76	40	35	15	338
名誉会員	2	4	3	0	0	9
	843	381	118	163	59	1,564

表4 現地QRコード受付者数

区分	早期割引	事前割引	通常	申込者 合計
	4/1～5/11	5/12～7/11	8/1～8/17	
会員	491	197	55	743
非会員	16	11	9	36
学生会員	145	60	33	238
名誉会員	1	0	0	1
	653	268	97	1,018

表5 オンライン会場の参加者数（現地会場のみ参加者を除く）

セッション	参加者数(約)
本部企画シンポジウム①	60
本部企画シンポジウム②	100
スポーツ文化 課題A シンポジウム	60
学校保健体育 課題B シンポジウム	60
競技スポーツ 課題A シンポジウム	80
生涯スポーツ 課題B シンポジウム	80
健康福祉 課題C シンポジウム	70

○研究発表数一覧内訳

研究発表数一覧については、表 6 の通り。

表 6 研究発表数一覧

テーマ別研究発表	区分	口頭発表	ポスター 発表	合計
スポーツ文化研究部会	課題A	3		3
	課題B	9		9
	課題C	4		4
学校保健体育研究部会	課題A	10		10
	課題B	6		6
	課題C	23		23
競技スポーツ研究部会	課題A	6		6
	課題B	5		5
	課題C	12		12
生涯スポーツ研究部会	課題A	7		7
	課題B	6		6
	課題C	10		10
健康福祉研究部会	課題A	6		6
	課題B	3		3
	課題C	8		8
合計		118	0	118

専門領域別研究発表	口頭発表	ポスター 発表	合計
体育哲学	3		3
体育史	4		4
体育社会学	8		8
体育心理学	9	43	52
運動生理学		4	4
バイオメカニクス	4	10	14
体育経営管理	3	4	7
発育発達		16	16
測定評価	12	13	25
体育方法		36	36
保健	2	4	6
体育科教育学	7	14	21
スポーツ人類学	3	0	3
アダプテッド・スポーツ科学		7	7
介護予防・健康づくり	2		2
体育・スポーツ政策	7		7
合計	64	151	215

○発表の取り下げ

専門領域別研究発表（体育科教育学）のポスター発表（11 教-ポ-11）について、大会当日に演者より取り下げの申し出があった。

なお、表 6 の発表数は取り下げ前の発表数であり、大会プログラムの発表数と一致する。

2. 大会の運営概要

(1) 受付

1) 大会の準備と実施

総合受付はポスターおよび企業展示会場やクロークと同じ場所（第1体育館）に設置した。そのうえで、初日はキャンパスへ入構する方々をすべて第1体育館の入口付近に設置した簡易受付へ誘導した。事前申込者でかつ参加証を事前にプリントアウトしてきた参加者は、その簡易受付付近で待機するスタッフのスマートフォンを使って参加証にある二次元バーコードを読み取り、事前申込の確認をした後、コングレスバック（いくつかのチラシやノベルティ用のマグネットを含む）やネームホルダーを配布した。その他の参加者は第1体育館に入り、総合受付で手続きを行った。2日目以降は、簡易受付を閉じて総合受付ですべての手続きを行った。当日申込者には記入用紙に個人情報を記入してもらい当日申込者数の把握を行った。支払いはキャッシュレス決済などを検討したものの、最終的にはコスト面から現金払いのみとし、学会事務局が小口現金を用意し、対応した。また、事前に申請のあったマスコミ関係者や招待者など一般参加者以外の来場予定者リストを総合受付に用意し、対応した。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

今大会では、前回大会に引き続き、アトラス社の Confit 参加登録・確認システムを用いたが、対面開催で運用する初めての大会となった。Confit では参加証、参加受付用二次元バーコード、参加証明書、プログラム閲覧サイト二次元バーコードがそれぞれ A4 版 4 分の 1 サイズで印刷することができる。そのため、ネームホルダーのケースを A4 版 4 分の 1 サイズにし、4 つ折りにして収納できるようにした。そして事前申込者には参加証をプリントアウトしてくるよう案内した。受付の際に、事前申込者の中で参加証をプリントアウトしてこない者も一定数いることが想定された。アトラス社の Confit 参加登録確認システムでは、スマホ上で表示した二次元バーコードでも参加登録の確認が可能であったが、ネームホルダーに参加証を入れてもらう必要があったことや、受付での人の滞留を避けるために、簡易受付では参加証を事前にプリントアウトしてきた者だけに対応した。二次元バーコードの読み取りはスタッフのスマートフォンで行うことができたため、複数のスタッフが同時に複数名の来場者の参加確認を簡単に行うことができたため来場者のストレスはほとんどなかったと思われる。次回大会へ引き継ぐとすれば、簡易受付と総合受付の両方を設置すること、簡易受付は天候不良でも影響がない場所に設置すること、参加費の支払いに関する様々なケースの問合せが生じるため、その判断ができる者が総合受付にいますぐに対応できるように準備しておくことを申し送りたい。特に、今大会のように Web 参加区分を設定する場合に、Web 参加として申込みをした者が現地に来た場合や一般参加者以外の来場者について参加費を徴収するの可否かの判断は事前に想定できないケースもあるため、事務局長などがすぐに判断し対応できるように準備しておくことが必要かもしれない。

(2) 発表データ受付

1) 大会の準備と実施

事務局の依頼を受け、「発表者へのお知らせ」を作成し、その後事務局および実行委員会で摺り合わせを行った。大会前日に、借用 PC が設置された後、各会場の PC には、予め「会場名_○号館_会場番号」が付与されたフォルダをデスクトップ上に配置し、セッション前にデータを収集する場合は、該当する「日付、セッション開始時間、セッション名」を選択し、そのフォルダ内に発表者のデータを格納するようにした。

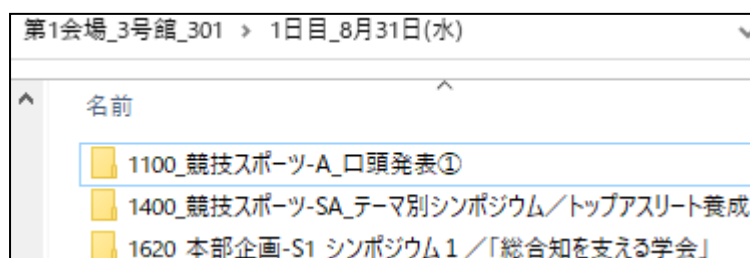
例) フォルダ名 (会場名_○号館_会場番号)

第1会場_3号館_301/1日目_8月31日(水)/1100_競技スポーツ-A_口頭発表①

例) ファイル名 (演題番号_発表者名(代表者))

競技スポーツ-A-01_順大太郎

※演題番号等は発表者リストを参照



大会当日、発表データは定められた時間（セッション開始の5分前）までに各会場またはPCセンター（初日および2日目のみ）で受付を行ってもらい、その場で動作確認を行った。発表資料を配布する場合は、発表者から資料を受け取り、入り口付近に資料を配置して、参加者に配布した。各会場、数名の発表者は持ち込みPCによる発表を希望していたため、受付時に動作確認を行ってもらい、スムーズな運営に努めた。当初、PCセンター設営の予定はなかったが、各会場でのデータ受付時の混雑を緩和できるように初日および2日目の2時間（15:00~17:00）のみPCセンターを運営した。2~4台程度の受付PCを準備し、1日当たり20名程度の利用があった。コロナ感染対策として、使用後のPC・マウスの消毒を徹底して行った。2日目以降、事前受付を済ませた発表者のデータは、各会場のPCの該当するセッションのフォルダに格納し、オペレーターはセッション開始前に確認を行った（各会場の受付名簿を添付）。事前受付を済まされた発表者も出欠確認のために、セッション開始前に「担当のオペレーター」（各会場の受付）に声をかけてもらうように促した。大会終了後、受付を行った発表データは全てPC上から削除した。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

大会前日のPCチェックでは問題はなかったが、当日上手く起動しない、あるいは途中で動作が止まってしまう事例がいくつか見られた。また、前日のPCチェックでは問題のあったPCもリブートすることで正常に機能したPCもあったため、事前の念入りのチェックは欠かせない。また、トラブル時に交換できるPCは常に配置しておいたほうが望ましい。PCとマウスが上手くペアリングできていない事例も見られたため、同様のマウスを使用する場合には他と混同しないように目印をつけるか、会場ごとに管理することが望ましい。PCが複数設置されているハイブリット会場では、データの格納されているPCフォルダに気づかず、発表者に再びデータを提供してもらう事例があったため、各会場との連携を密に行っておく必要がある。本大会では希望者のみの事前データ受付を行ったが、当日の会場受付の負担を減らすためには、上手くPCセンターを機能させることも必要であると考えられる。発表当日のスケジュールや配置されるスタッフの人数などを加味してPCセンターの必要性を考えると良い。

文責：吉原 利典

(3) 発表会場

1) 大会の準備と実施

今回の学会では対面開催として、教室にて口頭発表、シンポジウム、キーノートレクチャーなどが、体育館にてポスター発表、企業展示などが行われた。感染症対策の観点から会場となる教室の収容人数が100%にならないよう、座席を制限し、収容人数を50%以内とした。その上で、座席数が多い教室を発表会場とし、2号館7教室、3号館6教室を使用した。一方で、2号館と3号館の建物は2階より上階に連絡通路が無く、必ず1階で外に出て向かわなければならない。両建物はさほど遠くはないが、例えば2号館の4E会場から3号館の301会場に行く際には、エレベーターもしくは階段を下りて、1階で外に出て、と来場者に手間をかけることになった。念のため、「2号館と3号館の連絡通路はございません（1階の出入り口からご移動お願いします）」の紙パネルを事前に用意し、2号館や3号館の上階、両館の1階出入口に掲示し、来場者に理解していただくようにした。

1日目2日目は天候に恵まれたが、3日目は天候が不安定で雨が降る時間帯もあった。そのため急遽、学内使用限定の無料レンタル傘を2号館入口、3号館入口、体育館入口、シャトルバス乗り場の4ヶ所に設置した。「傘、学内専用貸し出し中」「かさの返却口は2号館入口、3号館入口、第1体育館入口、学内バス停乗り場の4ヶ所です。学内専用のため、絶対に持ち帰られないようお願いいたします」と紙パネルを作成し、準備した。傘の本数に限りはあったが、来場者が積極的に使用してくださったことから、かなり好評であったと思われる（傘の本数が少なかったことについてはこの場を借りて、お詫び申し上げます）。

3日間を通して、必要な案内板は業者が準備してくださったこともあり、2号館、3号館、体育館等、迷われる来場者は少なかった。その上で、来場者に対して必要な情報や、有ったら嬉しい情報についてはその都度、紙パネルを作成し、印刷し、該当箇所に貼り付け、来場者の目に留まるようにした。2日目、3日目になると来場者の方々も場所を把握していることから、案内・誘導に関する質問はほとんどなかった。また、案内・誘導を担当した教員および学生スタッフに対して、「迷わず行けたよ」「分かりやすい説明ありがとう」などと労いの御言葉をかけてくださる来場者も多く、本学会の温かさを感じた。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

プログラムには大会日程を見て、各会場（教室）に向かうが、いざ教室に着いてみると、教室前には紙パネルで教室番号が記載されているが、教室内でそのセッションが実施されているか不明・不安になり、教室に入りにくい来場者が見受けられた。そのため、教室番号が記載された紙パネルに加えて、いま何のセッションが行われているか（例：競技スポーツ研究部会）（例：口頭発表6 学校保健体育）を紙パネルで示せば良かったと考える。

感染症対策から教室（会場）の収容人数を100%にしていなかったため、セッションによっては教室に入らず、廊下から発表を聴く（見る）人も多々見受けられた。それに伴い、廊下に人があふれてしまい、通路が狭くなってしまい、一時的に会場および廊下に人が多くなってしまうこともあり、会場の収容人数や出入口のルートについてはもう少し検討しておくべきであった。

ポスター発表の会場については、プログラムでは「ポスター発表は3日目ですが、ポスターの掲示は1日目の10時以降から可能です」「発表者は、できる限り大会初日からポスター掲示をお願いします」などとポスター発表のページに記載をしていたが、1日目や2日目の貼り付け率が低く、会場自体が閑散とした雰囲気になってしまった。そのため、初日からポスター会場にも来場者が流れるよう、学会開始前にもう少し周知させたり、1日目の受付時にアナウンスしておくべきであった。

発表者が濃厚接触者等により対面での発表が厳しい場合においては、Zoomによるオンライン発表が連名者による代理発表が可能であった。Zoomによるオンライン発表を行う場合には、対面発表で使用しているノートPCとは別に、オンライン対応のノートPCを会場に準備し、発表の順番が来たら、パソコンのプロジェクター表示を切り替えて行った。セッション開始15分前に、発表会場の担当者とは

別にオンライン対応の担当者が該当の会場に向かい、Zoom の使い方や確認作業、座長への説明を行った。その際、音声・音量等の確認や画面共有の仕方などと Zoom の使い方に関する問題は見受けられなかった。次年度以降ハイブリッド開催を行う場合には、現地での対面発表からオンライン発表に切り替える場合も考えられるため、発表会場担当に加えて、オンライン対応のスタッフが居ることで、上記の事態について問題なく進行や対応ができると考える。

文責：山口 慎史

(4) ハイブリッド会場

1) 大会の準備と実施

前日準備では学会業者様、教室のシステム管理を行う業者様、大学のシステム担当者と提携し、Zoom ウェビナーと会場の音響システムの同期を行った。細かい操作は学会業者様にお願いした。401 と 402 会場を接続した状態でのハイブリッドシンポジウムでは、前のプログラムとの間が 30 分と非常に短かったため、時間内に全ての設定を完了させることは困難と判断し 401 をメイン会場として 402 教室をライブ配信のみに設定した。402 会場で質問があった場合は 401 会場に移動して質問していただくようお願いした。学会業者様からは 401 教室内で 3 台の PC のご用意があり、1 台目は発表用、2 台目はウェビナーのホスト、3 台目をバックアップとして準備した。402 教室は 1 台の PC を用意した。

持ち込み PC 可となっていたため、ご自身の PC で発表される方が多かった。その場合は業者様が用意したホスト PC からシンポジスト個人の PC をウェビナー機能のパネリストに昇格して発表していただく形式をとったが、MAC を使用されている 2 人の先生方の発表途中でエラーが発生し対処した。事前準備の段階でご自身の用意された MAC の HDMI コネクタが認識されないトラブルがあったが、他のシンポジストのコネクタをお借りすることで対応した。また、配信できないなどの不測の事態に備え物理的なビデオ録画を行った（スクリーンレコードも一部行った）。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

ハイブリッドシンポジウムでは、発表の設定（持ち込み PC の設定）に時間がかかり、持ち込み PC を原因とした細かな問題が発生し、進行が一部中断した。そのため、次回大会でハイブリッドシンポジウムを開催する場合は持ち込み PC の使用を許可するかどうかは、慎重に判断すべきであると考えられる。また、シンポジストの中では MAC を使用される方も多く見られるため、Windows のみでなく、MAC を用意することで問題なく進行できると考えられる。

また、プログラム間を 1 時間程度空けることで万全の準備をしてプログラム進行ができると考えられる。

文責：野呂 啓晃

(5) ポスター発表

1) 大会の準備と実施

ポスター発表は、企業展示および休憩場所と同じ会場で行われ、2 つの体育館（バレーボール館・バスケットボール館）にて実施した。それぞれの体育館には他会場からそのまま土足で立ち入ることが可能であり、手前にポスター発表、奥に休憩場所および企業展示が配置された。ポスター掲示は、1 日目より掲示可能であることが案内され、それぞれの体育館の入り口に押しピンなどを設置し、パネルボードに発表番号を掲示することで、各自で掲示をしてもらうようにした。ポスター発表当日（3 日目）は、それぞれの体育館の入り口に受付を設け、筆頭演者の出席有無を確認した。ポスター発表形式に関しては、各専門領域に準ずるようにした。ポスター発表当日（3 日目）は活発に議論がされていたが、大会 1 日目からのポスター貼付率が低く、大会 3 日目以外は、ポスター会場を訪れる参加者はまばらであった。また、ポスター発表当日（3 日目）に筆頭演者の出席有無の受付を実施していたが、受付に来ない

発表者も散見された。COVID-19 感染に関連する発表者の変更や発表形式の変更（Web 掲載）などは臨機応変に対応した。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

ポスター発表当日に筆頭演者の出席有無の受付を実施していたが、受付に来ない発表者が散見された。受付係が、各ポスター発表時間の開始 30 分後に、ポスター掲示場所に出向き、筆頭発表者を探すことが多かった。筆頭発表者の出席を必須とするのであれば、必ず受付を通過するなどの徹底した周知が必要であると考えられる。また、ポスター掲示はや大会 1 日目より可能であったが、大会初日の発表直前で掲示をする場面も見られた。大会 1 日目からの掲示をより促す、掲示時間を明記するなどすれば、発表当日以外でも、より活発な議論が繰り広げられるのではないかと考えられる。また、3 日目に全てのポスター発表が行われたことにより、急遽、大型扇風機で換気を促したが、密を避けるということからも、ポスター発表を分散させることも必要であると考ええる。

文責：染谷 由希

(6) 企業展示

1) 大会の準備と実施

今回の学会大会はコロナ禍になって以降初の対面開催であったが、23 団体（企業 20、大学・団体 3）から展示協賛をいただいた。企業展示は、ポスター発表および休憩場所と同じ会場で行われ、2つの体育館（バレーボール館・バスケットボール館）を使用した。それぞれの体育館には他会場からそのまま土足で立ち入れるよう床にグリーンシートが張り巡らされ、手前にポスター発表、奥に休憩場所および企業展示が配置された。大会参加者が各企業展示ブースを確認・巡回しやすいよう、企業展示ブースは体育館奥および側面の壁側に、それらのブースに囲まれるように体育館中央付近に休憩場所の机・椅子が配置された。なお、これらのグリーンシートや企業展示ブース、机・椅子は委託業者にご準備いただいた。

大会 1 日目では、大会参加者の企業展示ブースへの来場が少ないことが課題となった。同体育館で行われるポスター発表は大会 3 日目であったことから、大会 1 日目のポスター貼付率が低く、まばらにしか貼られていない発表ポスターのさらに奥で行われている企業展示には大会参加者が足を運びにくい状況であったと考えられる。その対策として、大会 2 日目では、両体育館の奥に配置していたフリードリンク（大塚製薬様より提供）を体育館入り口に配置替えし、大会参加者がフリードリンクを受け取ることで、体育館内に立ち寄りやすくなるよう工夫した。また、大会 2 日目夜から 3 日目にかけては雨天となり、体育館内では雨漏りする箇所が確認されたことから、大会 3 日目朝にいくつかの企業展示ブースの配置を調整する必要がある、皆様にご迷惑をおかけした。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

前述したように、同体育館で行われていたポスター発表のない日時に、大会参加者の来場が少なかったことが反省点である。大会プログラム冊子などにおいて、ポスター発表者には大会 1 日目からポスターを貼ることが促されてはいたが、周知されていなかった可能性がある。次回以降、同様の形態で企業展示を実施する場合には、大会参加者に足を運んでもらう動線やレイアウト、プログラム、周知方法の工夫等が必要であると考ええる。

また、展示協賛をいただいた企業より、同体育館で行われているポスター発表領域と企業展示の分野との関連があるとありがたいとの声を聞いた。全ての企業の意向を汲むことは困難であると予想されるが、大会参加者や協賛企業にとって、より充実した学会となるよう今後検討の余地があると思われる。

文責：大田 穂

(7) 図書展示

1) 大会の準備と実施

取りまとめ役の不昧堂出版の担当者が、6 月中に図書展示の会場候補となる場所の視察、検討を行った。組織委員会との相談を踏まえて、3 号館 1 階の入り口付近を会場として設定するに到った。展示物は、開会の前日に不昧堂出版、ならびに販売の紀伊国屋書店の担当者によって行われた。展示への参加出版社は、文光堂、杏林書院、溪水社、道和書院、ベースボールマガジン社、大修館書店、朝倉書店、ナツプ、講談社、市村出版、不昧堂出版、ミネルヴァ書房、福村出版、ラウンドフラットの計 14 社であった。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

取りまとめ役の出版社については、1 社だけであると負担の大きさから、対応しきれない場合があり得るため、主・副の 2 社、設定するのが望ましい。また、展示参加出版社の拡大、展示図書の増加など、対面での学会大会の魅力として図書販売コーナーが充実するよう学会側から出版社側に積極的に働きかけることも重要であると考えられる。

文責：杉山 和也

(8) 補助スタッフ

1) 大会の準備と実施

実行委員会から事前に、アルバイト等謝金に関する申し合わせがなされ、それに基づいて準備を進めた。また、補助スタッフ（学生・院生）の確保については、原則、各担当部署で手配することとしたが、確保できなかった場合のため、事前に実行委員から学生・院生を募り、補助スタッフ係がとりまとめ、補充・調整を行った。補助スタッフの配置状況については、準備から実施にあたり、担当部署の先生方とスプレッドシートを活用して、逐次確認した。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

補助スタッフが濃厚接触者等、急遽参加できなくなることがあり、調整に迫られた部署もあった。謝金支払い手続きについて、補助スタッフの総数が多く、また、開催期間中、担当部署を跨いで手伝う学生・院生も多いため、業務終了後、謝金調書の提出方法等、集約の仕方について事前によく確認しておくことが必要である。

文責：大久保 菜穂子、荻原 朋子

(9) 交通関係

1) 大会の準備と実施

大会会場が最寄りの京成酒々井駅から徒歩 20~25 分という立地であることから、通常の路線バスに加え、大会用シャトルバス（京成酒々井駅⇄順天堂大学さくらキャンパス構内ロータリー）を合計 3 台業務委託し、運行した。運賃については当初予算の関係から徴収する案も出されたが、結果として無償で提供することができた。参加者の満足度や料金徴収のコスト等を踏まえても、参加者から料金を徴収せず無償で運行できたことに、事務局はじめ関係各位に感謝申し上げたい。運行ダイヤについては運営に携わっていただいた業者の方に、京成線の上り方面および下り方面の電車のダイヤを考慮し、またプログラムとの兼ね合いでどの程度の人数が乗車する可能性があるかを幾度もシミュレーションして頂き、概ね想定通りの運行が実現できたと考えている。一部想定を超える乗車人数が待機する時間も生じたが、臨時増便によって可能な限り対応することができた。学会大会 2 日目の帰りの便では、ゲリラ豪雨の発生も相まって、帰りのシャトルバスに長蛇の列が発生してしまった。この点については想定外の出来事

であり、待機頂いた学会参加者の皆様にはお詫びを申し上げるとともに、傘の貸し出し、待機場所等も含め多くの運営委員・さくらキャンパスの事務員・学生スタッフの協力で何とか全員を無事に駅まで送り届けることができたことに感謝申し上げたい。コロナ禍の対面型での学会大会開催ということで、バスの窓は原則開放し、バス乗車にあたって車内では会話を控えて頂くようお願いさせて頂いた。ご協力頂いた皆様には感謝申し上げたい。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

開催される会場の立地等の条件にもよるので一概に言及することは困難であるが、例年の開催時期から台風など天候の急変の可能性が考えられる。あらかじめそのような事態を想定し対策を練っておくと良いのではないかと感じた。想定外の事態が生じたときの便の増減など、学生スタッフだけでは対応が困難であるので、運営委員が常に連絡を取れるようにしておくことが重要である。また、8月－9月での炎天下での業務ということで学生アルバイトスタッフの人数を多めに配置し、休憩時間を多く取れるようにした。

文責：山中 航

(10) 託児所

1) 大会の準備と実施

託児所は、学会期間中に順天堂大学さくらキャンパス内に設けた。6月上旬、託児所の利用案内等の打ち合わせし、大会 Web サイトに託児所利用に関する案内を掲載した。事前申込み制とし、申込み〆切は8月17日に設定した。8月上旬、担当者と現地打ち合わせを実施し、託児所開設場所の候補地を内覧いただいた上で、開設場所を最終決定した。また、その際に、避難経路、危険場所、トイレ等の確認が行われた。

利用申込みは5名で、3日間での最終的な託児数は、1日目3名、2日目4名、3日目3名であった。

申込み〆切後のキャンセルや追加、学会期間中の追加などがあったが、安全面から受け入れられると判断をし、全てに対応をした。学会当日は、託児所利用初日に、総合受付にて全日程分の利用料金を合わせて支払いをしていただいた。使用済みおむつの処分に関しては、学会会場で処分できるよう学会内で配慮をした。当日の託児所委託業務は、担当業者に完全委託し、事故などはなく、円滑に運営がされた。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

学会参加人数に対して、託児所の需要は多いとは言えないものの、子育て中の学会員が、学会への参加を諦めたり、制限されたりすることがないように、託児所の開設実績を重ねることは大切であると思われる。利用人数の事前把握はある程度必要であるが、子供が関係することである故、体調や天候により、先の予定が定まらないことも予想される。安全が確保できる範囲で、利用の追加・変更に対応することが子育て中の学会員への重要な配慮であると感じた。

文責：黒坂 裕香

(11) 感染対策・救護

1) 大会の準備と実施

本大会は、新型コロナウイルス感染症の流行下における現地開催となり、通常の学内における感染対策を基本とし、さらに学内人口の増加に伴う感染対策の準備を実施した。

【感染対策】

事前にホームページ等で「新型コロナウイルス感染症対策について」を掲示し、来場の際と大会会場

でのお願い事項について周知した。当日は、来場者は大会会場入口となる学部校舎玄関のサーマルカメラ前を必ず通過し、37.5 度以上の体温異常の有無を確認する動線とし、観察者として教員と学生配置を行った。体温異常者が発生した場合のフローチャートを作成し、体温異常者の待機場所の設営、体温計や消毒剤の設置などを準備したが、大会期間中に体温異常者はおらず、使用することはなかった。各会場の入室の際には手指消毒の徹底を指示し、通常の学内設置箇所以外にも来場者の導線を想定し、手指消毒剤を増設し、大会期間中は巡回を行い、適宜消毒液の補充を行った。各会場の収容人数は 50% を上限とし、使用不可の座席表示をして定員を超えないように配慮した。一部の会場で収容人数の上限に近づくことがあったが、他会場への誘導など適宜対応した。各会場において、窓の開放等による換気を励行したが、天候の関係もあり、常時、窓の開放が難しくなった会場も見られた。特に、ポスター会場である体育館は、窓を開放すると冷房の効きが悪くなる、雨天時に窓を開放できないなどの課題が発生したため、CO₂ モニターを複数個所に設置し、その数値を参考にしながら、定期的に窓を開放し、換気を行うこととした。しかし、3 日目のポスター発表の際には、来場者が多く、急遽、工業用扇風機とサーキュレーターを設置し、換気能力を増強した。

【救護】

スタッフ用マニュアルに緊急時の対応フローチャートと AED 設置箇所などを入れ、誰もが初期救護活動を行えるように準備した。また、処置が必要な場合は、安全衛生管理室（健康管理室）での対応とし、大会期間中は看護師、医師が学内常駐する体制を整え、さらに、軽微な処置については、大会本部でも対応できるように救急箱の設置を行った。しかし、大会期間中においては、傷病発生はなく健康管理室、救急箱ともに使用することはなかった。

2) 大会運営上の反省点と次回大会への提言

来場者の感染対策の励行もあり、本会大会における感染拡大や傷病発生もなく、大会を終了することができた。ただ、天候の関係等で急遽対応を余儀なくされた点も多かったため、特に感染対策に関しては大型空気清浄機、工業用扇風機またはサーキュレーター、CO₂ モニター等を各会場にあらかじめ準備しておくとういことと思われる。

文責：中西 唯公、松山 毅

(12) アクセシビリティ

本大会では、参加者の様々なニーズに応えるため、大会参加申し込みと同時に「アクセシビリティ・サービス」の申し込みを受け付けることとした。結果的に事前にサービスを希望する参加者はいなかった。また当日も受付の一か所に「アクセシビリティ・サービス」に関する窓口を設けたが、相談やサービスを希望する参加者はいなかった。一方で、「アクセシビリティ・サービス」の利用は求めないが、学会に参加し、また発表を行っている障害のある方の姿もあった。「アクセシビリティ・サービス」は今回からはじまった取り組みであるが、大会参加を検討する際の一つの選択肢として参加者に活用されるものであることを改めて実感した。次年度以降もこの取り組みを継続していき、本学会が多様な参加者による質の高い議論の場として発展することに期待する。

文責：村上 祐介

本部企画シンポジウム 1

日 時：8 月 31 日（水）16：20 ～ 18：10

会 場：301

テーマ：「総合知を支える学会」を目指して

コーディネーター：伊坂 忠夫（立命館大学）、一階 千絵（群馬県立女子大学）

シンポジスト：宮地 元彦（早稲田大学スポーツ科学学術院）

日本学術会議健康・スポーツ分科会の活動

萩原 悟一（九州産業大学）

総合知を生み出すための準備と実践

金谷 麻理子（筑波大学）

総合知の創造のためのダイバーシティとは

○シンポジウムについて

本シンポジウムは、今回のメインテーマである「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学」を支え、推進する本学会の今後の方向性について以下の点から議論し、今後の発展につなげることを目的とした。一つ目は、学会本来の持つ文理横断の強み、ならびに他の学会にない身体についての総合知を生み出す学会の強みは何か。二つ目は、老若男女の別だけでなく、様々な分野・考え方の者が集まる本学会は、まさにダイバーシティ環境の中で、体育、スポーツ、健康を議論できる学会であり、「発想のダイバーシティ」から **well-being** へとつなげていく学会の姿を示せないか。三つ目は、若手の学会員からみて、「総合知を生み出す学会」の良さは何か、また総合知を生み出せる研究者は、大学や研究機関にとってどのような魅力になるのかについて、学会員のキャリアの観点から本学会の強み、魅力は何かについても議論することとした。

まずはコーディネーターの伊坂忠夫氏（立命館大学）より本シンポジウムの趣旨の説明があり、続いて宮地元彦氏（早稲田大学スポーツ科学学術院）から、日本学術会議における健康・スポーツ科学分科会がこれまでに進めてきた活動をご紹介いただいた。健康・スポーツ分科会は第二部（生命科学系）に所属し現在 13 名の委員により活動しているが、人文・社会系、生命科学系、理工工学系を専門とする幅広い研究分野の会員、連携会員が所属し、共同して活動を続けている。近年では、スポーツ庁長官からの審議依頼に対する回答「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」や、提言「子どもの動きの健全な育成をめざして～基本的動作が危ない～」などを表出してきた。日本学術会議では 2011 年に提言「社会のための学術としての「知の統合」 ―その具現に向けて―」を出しており、本学会の目指す「総合知」の在り方と共通するところがあるとの指摘をいただいた。

金谷麻理子氏（筑波大学）からは、体育・スポーツ・健康分野におけるダイバーシティについてのお話をいただいた。金谷氏は本学会ダイバーシティ委員会委員長であり、また大学教員としても教育、研究、大学運営、部活動指導などに携わり多くの役割を持っている、いわば「ひとりダイバーシティ」の体現者としての立場から、直接的・間接的にかかわる人々と共に経験を知識化することの重要性、身体知の形成プロセスとその応用、共有、伝承の場として本学会の持つ発想のダイバーシティが **well-being** へとつながることを解説していただいた。

萩原悟一氏（九州産業大学）は、「総合知」を実践すべく活動している若手研究者として、その取り組みについてお話をいただいた。萩原氏は社会心理学をベースとしたスポーツマネジメントを専門とされており、社会におけるスポーツの価値創造を目指して活動している事例として、e スポーツプレイヤー志望の学生と接した経験から脳科学、心理学等の研究者と共同で行ったスポーツと認知機能の研究などをご紹介いただいた。自らのビジョンや目標を言語化し自分の中での総合知を可視化したものとしてアカデミックポートフォリオについてもご紹介いただいた。

3 名のシンポジストのご発表の後、コーディネーターとシンポジスト間で質疑応答が行われ、本学会

の持つ分野横断・学際融合の強み、ならびに他の学会にない身体についての総合知を生み出す学会の強み、「発想のダイバーシティ」から well-being へのつなげ方についての議論が交わされた。またその中で、若手研究者委員会委員長の立場から一階氏よりキャリアの構築が若手研究者の重要な関心事項の一つにあること、就職先としての大学の中には体育の専任教員の人数が少ないところもあり研究者一人一人が体育学を代表することを求められることが話題として提供され、そこから学会員のキャリアの観点からみて本学会をいかに生かしてもらうかといった議論が行われた。

フロアの参加者との間では、医学と本学会に集う学問領域の違いについて、他学会との協働について、総合知を体现するためのプラットフォームづくりについて、研究者個人の中での総合知と専門知の両立についての質疑応答があり、今後の本学会の方向性、展望について学会員の皆さんと議論を深めるシンポジウムとなった。

○運営について

本シンポジウム開催にあたり、コーディネーター間、またコーディネーターとシンポジスト間で zoom を用いたウェブ会議やメールのやり取りにより複数回の打ち合せを重ねてきた。登壇者の所属機関は関東 3 名、関西 1 名、九州 1 名と散在していたが、コロナ禍で遠隔会議体制が整備され各人も慣れてきたことにより綿密な準備をすることができたと考えている。

○その他

第 70 回大会以来の対面での開催となり、フロアからの質問も哲学、医学、運動学など様々な分野の先生方からいただいた。従来の学会大会に戻った感と分野横断の色を濃くした新しい学会大会になった感と、両方を感じさせるシンポジウムとなった。

最後になるが、コーディネーターの伊坂忠夫氏には本学会の企画委員会委員長として、本シンポジウムの企画・構想、シンポジストの選定、シンポジウムを空中分解に陥らせないための議論の舵取りなど、献身的にご尽力いただいた。ここに深く感謝を申し上げる次第である。

文責：一階 千絵

本部企画シンポジウム 2

日 時：8 月 31 日（水）16：20 ～ 18：10

会 場：401・402（サテライト会場）

テーマ：持続可能な成熟社会と体育・スポーツ科学

コーディネーター：高峰 修（明治大学）、荒木 香織（順天堂大学）

シンポジスト：河本 敏夫（株式会社 NTT データ経営研究所）

Sports-Tech の概観

—スポーツ産業 DX（デジタルトランスフォーメーション）の潮流とは—

持丸 正明（国立研究開発法人産業技術総合研究所人間拡張研究センター）

人の身体性と社会性を拡張するテクノロジー

菊 幸一（筑波大学）

スポーツにおける身体的解放の「人間的臨界点」とテクノロジー

○シンポジウムについて

本シンポジウムは、第 72 回大会テーマである「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学—成熟社会に向けての不断前進—」のサブテーマを拡大させ、キーワードとなる「持続可能性」「成熟社会」と体育・スポーツ科学の接点を探ることを意図して企画された。

現在の日本社会は、少子高齢化、貧困や格差、孤立や孤独など、様々な問題を抱えている。さらに自然環境というグローバルな問題も加わり、社会の持続可能性は深刻かつ具体的な課題としてある。社会やスポーツの持続可能性を探ると、現状維持ではなく変革—不断前進—が求められるだろう。他方、現代社会ではデジタル化やネットワーク化、そしてそれらを前提とするビッグデータと AI の活用も進んでおり、またテクノロジーが各種産業や医療、介護に様々な利便性の向上をもたらしている。スポーツ分野においても、先般策定された第 3 期スポーツ基本計画では、デジタル技術を活用してスポーツ界に新たなビジネスモデルを創出することが施策目標として掲げられた。これまでスポーツにおいて応用されてきたテクノロジーやデータサイエンスは、成熟した持続可能な社会を志向する変革にも応用可能なのだろうか。そもそもテクノロジーはスポーツ文化自体、あるいはそれを通じた社会の持続可能性にいかに関与するのだろうか。以上の問題意識から、本シンポジウムでは、スポーツや身体活動分野において活用されるテクノロジーやデータサイエンスの可能性とそれらのスポーツに対する影響を検討することで、成熟した持続可能な社会に対するスポーツの貢献と、そこにおける留意点について探ることを目的とした。

シンポジストとして河本敏夫氏、持丸正明氏、菊幸一氏をお迎えした。Sports-Tech & Business Lab にてスポーツとテクノロジーを通じたイノベーションを模索される河本氏には、マクロな視点でスポーツ界におけるテクノロジーやデータ等々の応用、実践について概観していただいた。人間工学やサービス工学を専門とされる持丸氏には、焦点を絞ってミクロな視点で、実際にどのようなデバイスを身体に着けた実践が行われているか、そこにおいて身体にどのような変化が生じるのか、などについていくつか具体的事例をご紹介いただいた。体育・スポーツ社会学を専門にされる菊氏には、スポーツ文化やそこにおけるテクノロジーの活用が、いかに社会の持続可能性に寄与するのか、という視点からお話いただいた。

各シンポジストの発表内容の詳細については、大会ホームページで公開される報告書に譲ることとし、ここではコーディネーターとしてのごく簡単なまとめをしておきたい。本シンポジウムのテーマとなる、スポーツにおけるテクノロジーやデータサイエンスの活用例については、全体像が整理されておらず、したがって個々の事例における可能性や問題点も入り交じっているように感じる。そうすると自ずと、それらをめぐる議論も漠然としたものになるか、あるいは的外れなものになる可能性が高い。今

回のシンポジウムではそうした全体像の整理までは至らなかったが、整理するためのいくつかの軸のようなものは見えてきたといえるだろう。例えば、テクノロジーやデータが活用される“対象”という軸がある。これはアスリート、レクリエーション・健康づくり実践者、審判、ファン等の区分としてありうる。また健常者／障害者あるいは発達／老化段階にいる人であれば、そこにはエンハンスメントなのか治療なのか、といった軸も生じるかもしれない。あるいはデバイスなのかデータ・プログラムなのか、あるいは仮想空間なのかという軸も考えられるだろう。そこでは身体性の有無という視点が関わってくると思われる。

以上のことから、本シンポジウムはスポーツとテクノロジーやデータサイエンスをめぐる今後の議論につながるいくつかの視点を提示できたと考えている。ただしこのテーマは、本学会の周辺分野において期待されているほどは、本学会内において議論されていないように思われ、今後の研究の発展に期待したい。

○運営について

本シンポジウムの企画段階では、6月27日（月）にオンラインにて事前の打ち合わせを行った。ここではコーディネーターからシンポジストに依頼されたテーマについてどのような内容の話をするか、この段階での構想を紹介し、これによって各シンポジストの話題を共有して、それらに基づいて当日の発表内容を微調整していただいた。第72回大会は3年ぶりの対面開催となったため、シンポジウム当日には30分間ほど、対面にて最終打合せを行った。

シンポジウムのタイムスケジュールとしては、10分間でコーディネーターから趣旨説明とシンポジスト紹介を行った後に、シンポジスト3名から各20分間の発表、その後20分間でコーディネーターからのコメントとシンポジスト間のディスカッション、10分間で参加者との質疑応答、残り10分でシンポジストからの最終コメントとコーディネーターのまとめ、という流れであった。

資料の配付については、PDFファイルをクラウド上で共有できるよう設定し、そこへのアクセス情報を大会公式サイト「confit」の本シンポジウムページのコメント欄から公開した。こうした共有方法について各シンポジストの了承を得られたのが当日になってしまったため、公開が各シンポジストの発表開始直後になってしまった。この点については事前に公開する可能性も含め、あらかじめ検討しておく必要がある。

本シンポジウムは会場での対面開催と同時にオンラインでライブ配信も行われたが、質疑応答は会場来場者のみに制限することとした。また新型コロナウイルス感染予防対策のために会場の利用人数に制限がかかり、そのために隣り合わせの2会場（メイン／サテライト）に分かれて実施することになった。質問は会場来場者から受け付けたが、マイクの配置等の制限があり、実質的にはサテライト会場の来場者から受け付けることはできなかった。この点については今後、事前に周知しておくとういと思われる。

最後に登壇者のジェンダーバランスについてふれておくと、企画段階では1名の女性シンポジストを想定していたが、諸々の事情により登壇がかなわなかった。テクノロジーやデータサイエンスという分野に関わる人が男性に偏っているという事情もある。そうした現実的な事情に直面しながらも、引き続き登壇者のジェンダーバランスについては配慮していく必要がある。

文責：高峰 修

テーマ別研究発表・シンポジウムについて（まとめ）

第 72 回大会では、一昨年度から学会内に新たに設置された 5 つの応用（領域横断）研究部会が企画する「テーマ別研究発表」と「テーマ別シンポジウム」を大会の中心に据え、3 日の大会期間のうち初めの 2 日間をかけてテーマ別企画が実施された。この企画は、5 つの領域横断研究領域（スポーツ文化、学校保健体育、競技スポーツ、生涯スポーツ、健康福祉）において、それぞれ設定された 3 つの「解決すべき上位課題」に応じて研究発表とシンポジウムを行うというもので、その目的は、重要な社会的／実践的課題の解決に向け、様々な専門領域の研究知見を集積し統合すること、併せて、異なる専門領域間での研究者の交流と連携を図ることである。

テーマ別研究発表では、設定された上位課題に広く関連を持つテーマの下で口頭発表と質疑が行われ、テーマ別シンポジウムでは、設定された上位課題に関連する 1 つの特定のテーマに焦点を当て、多様なバックグラウンドを持つシンポジストを中心に討議が行われた。

このテーマ別企画は昨年度から実施が始まったが、昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため学会大会がオンライン開催となったので、対面での開催は本大会が初めてということになる。対面での開催は、オンライン開催に比べて質疑応答がしやすく、演者間やフロアと演者の間のディスカッションを深められるとともに、発表終了後も引き続き研究者の交流が図れることから、その有効性が改めて認識されたと言えよう。その一方で、オンライン開催と違って、発表時間や会場数、ライブ配信会場に制約があったことによる問題点や課題も認められた。また、このテーマ別企画のねらいである研究知見の統合化や学際的な議論の活性化といった目的がどの程度達成されたかについての評価には賛否両論があり、本大会のみでの判断は難しい。テーマ別企画の理念が学会参加者に広く伝わっていないように感じられる面もあり、これにはコロナ禍における会員間のコミュニケーション不足の影響も大きいのではないかと考えられる。専門領域別研究発表との兼ね合いについては、今大会において研究発表数が激減したという専門領域がかなり多かったことから、今後はテーマ別研究発表と専門領域別研究発表の数的バランスを検討する必要があるだろう。今回の学会大会の企画と実施を通して、5 つの研究部会から出された意見を以下に集約した。各部会における詳細な報告は次ページ以降を参照されたい。

○テーマ別研究発表について

- ・他の領域の発表に対する質疑応答が難しかった。他部会との内容の重複や、それに伴う一般発表の分散といった問題がある。
- ・全体的に参加者が多く、盛り上がったが、口頭発表で情報を収集してシンポジウムで討議するという流れや、テーマと関係する一般発表が集まったかどうかは疑問である。
- ・テーマと関係が薄い発表があったり、演題に偏りが見られたセッションもあった。

○テーマ別シンポジウムについて

- ・シンポジウムの数が多く、他部会と重複した内容が見受けられた。
- ・テーマによって参加者数に差があった。領域横断が故の質疑の難しさを感じた。
- ・口頭発表とシンポジウムの内容の不一致、テーマに対する理解不足が見られた。
- ・今後の検討課題として、口頭発表とシンポジウムをどうつなげるか、「解決すべき上位課題」との整合性、演者と座長、コーディネーターとの事前打ち合わせの必要性が挙げられる。
- ・時間短縮により、討議の時間が少なかった。次年度に向けて、各研究部会のテーマの数、シンポジストの人数、プログラム構成、発表時間についての見直しも必要である。

文責：沢井 史穂

テーマ一覧

「スポーツ文化」研究部会								
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	キーワード	テーマ別研究発表のテーマ					
【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか	スポーツによる開発支援と持続可能性	グローバリゼーション、国際貢献、サステナビリティ	【課題A-①】国際協力・開発支援					
			【課題A-②】地球規模の諸問題（格差・貧困・健康・地域・人種・ジェンダー等）					
			【課題A-③】地球環境との共生					
			【課題A-④】スポーツによる人類の幸福					
			【課題A-⑤】持続可能なスポーツ文化					
【課題A-⑥】メガスポーツイベントとその思想（オリンピック、グローバルズ等）	【課題B-①】スポーツと倫理的諸問題（人権、教育、身体など）	【課題B-②】スポーツと科学のかかわり（自然科学、人文社会科学、科学技術など）	【課題B-③】スポーツと地域・社会（ボランティア、非常事態下のスポーツなど含む）	【課題B-④】スポーツと経済（雇用、契約関連など含む）	【課題B-⑤】スポーツと身体運動文化（e-sports、エクストリームスポーツ、ゲイゲームズなど含む）	【課題B-⑥】スポーツの組織・ガバナンス		
【課題B】 人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか	多様性の尊重から他者とのかわりへースポーツにおける／をとした「多様性と調和」はいかにして可能かー	身体、倫理、他者	【課題C-①】身体文化の保存・伝承活動（武術、芸能・ダンス、身体技術・技能など）	【課題C-②】スポーツ文化の記録・保存（博物館・図書館、アーカイブ、史料など）	【課題C-③】スポーツ文化におけるメディアの役割と課題（SNS、ジャーナリズム、メッセージなど）	【課題C-④】スポーツ施設・用具の流通と促進（テクノロジー、競技場、コマーシャルなど）	【課題C-⑤】スポーツプロモーションとしてのスポーツ教育（インテグリティ、オリパラ教育、スポーツボランティアなど）	【課題C-⑥】スポーツ文化とレジャーの課題・可能性（ツーリズム、アウトドア、スポーツ観戦など）
【課題C】 多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか	スポーツ文化の浸透戦略(2)ー身体文化の伝承・継承を科学するー	身体文化、記録・記憶、伝承・継承、メディア、プロモーション	【課題C-①】身体文化の保存・伝承活動（武術、芸能・ダンス、身体技術・技能など）	【課題C-②】スポーツ文化の記録・保存（博物館・図書館、アーカイブ、史料など）	【課題C-③】スポーツ文化におけるメディアの役割と課題（SNS、ジャーナリズム、メッセージなど）	【課題C-④】スポーツ施設・用具の流通と促進（テクノロジー、競技場、コマーシャルなど）	【課題C-⑤】スポーツプロモーションとしてのスポーツ教育（インテグリティ、オリパラ教育、スポーツボランティアなど）	【課題C-⑥】スポーツ文化とレジャーの課題・可能性（ツーリズム、アウトドア、スポーツ観戦など）
「学校保健体育」研究部会								
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	キーワード	テーマ別研究発表のテーマ					
【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか	大学体育の社会的使命とその実現可能性を考えるー現代的課題の解決に向けた大学体育の可能性ー	グッドプラクティス、ライフスキル、大学体育の教員養成、身体運動文化	【課題A-①】大学体育の政策・制度設計					
			【課題A-②】大学体育の理念・目標					
			【課題A-③】大学体育の授業デザイン・学習内容					
			【課題A-④】大学体育の評価・効果検証					
			【課題A-⑤】大学体育のマネジメント					
【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか	より良質な保健体育授業の具体像を考えるーその2ーこれからの保健体育カリキュラムを改善する視点とはー	保健体育授業、カリキュラム改革、学習内容の再整理、授業改善の視点	【課題B-①】保健体育授業に関わる政策					
			【課題B-②】保健体育授業の評価					
			【課題B-③】保健体育授業を支える諸制度					
			【課題B-④】インクルーシブの視点を踏まえた保健体育カリキュラム					
			【課題B-⑤】保健体育教師教育制度					
【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか	科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ー体育、保健体育に活かせる科学的エビデンスー	体育授業、保健体育授業、学習指導要領、多角的エビデンス	【課題C-①】体育・保健体育のカリキュラムに関する研究					
			【課題C-②】体育・保健体育の学習指導方法に関する研究					
			【課題C-③】幼児期から児童期の発達に関する研究					
			【課題C-④】子どもの運動指導に関する研究					
			【課題C-⑤】保健体育の指導に役立つ科学的エビデンス					
「競技スポーツ」研究部会								
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	キーワード	テーマ別研究発表のテーマ					
【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか	トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点Ⅱートップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目してー	大学スポーツ、サポート、キャリア、トランスファー、価値、タレント発掘・育成	【課題A-①】大学スポーツとトップアスリート養成					
			【課題A-②】トップアスリートへのサポート					
			【課題A-③】トップアスリートのキャリア					
【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか	競技スポーツの女性コーチ養成	ジェンダー、多様性、競技スポーツコーチング	【課題B-①】コーチ養成およびコーチング全般					
			【課題B-②】学校運動部活動における競技スポーツ指導					
			【課題B-③】競技団体における競技スポーツ指導					
【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか	ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング	ハイパフォーマンススポーツ、性差、トレーニング	【課題C-①】体力・技術・戦術トレーニングに関連する研究					
			【課題C-②】心的・認知的能力トレーニングに関連する研究					
			【課題C-③】トレーニング機器・手法の開発・検証・複合的研究					

「生涯スポーツ」研究部会			
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	キーワード	テーマ別研究発表のテーマ
【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか	協働システムの現状と課題から今後を考える ー“支えるスポーツ”が果たす役割ー	共生社会、 総合型地域スポーツクラブ、 学校運動部活動、 障がい者スポーツ、 スポーツ法・施策、 スポーツボランティア	【課題A-①】共生社会とスポーツ関連組織（スポ少、スポ協、レク協、スポ推、障がい者協会、スポーツNPO、法制度等）の可能性と限界
			【課題A-②】総合型地域スポーツクラブの質的充実と協働システム
			【課題A-③】学校運動部活動と地域スポーツのシステム化
			【課題A-④】障がい者スポーツ推進をめぐる様々な問題が協働システムに及ぼす影響
			【課題A-⑤】共生社会の実現に向けたスポーツ法・政策の可能性と限界
【課題B】 生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか	子どもたちのWell-beingとスポーツ ー政策・産業・そして遊び（仮）ー	地域コミュニティ、 健康づくり、 プロスポーツ、 生涯スポーツの概念、 ICT・e-Sport、 エビデンス	【課題B-①】生涯スポーツと地域コミュニティ
			【課題B-②】生涯スポーツと健康づくり
			【課題B-③】スポーツイベントとプロスポーツ
			【課題B-④】生涯スポーツの概念とその妥当性
			【課題B-⑤】生涯スポーツとICT・e-sport
【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか	国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2） ー国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けてー	運動・スポーツ習慣の形成、 ライフステージに応じた運動・スポーツ実施、 ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツ、 子どものスポーツと地域連携、 スポーツキャリアサポート、 国民のための運動・スポーツ施策	【課題C-①】ライフステージに応じたスポーツ実施に関する研究
			【課題C-②】レクリエーションスポーツ、ユニバーサルスポーツの実施と普及に関する研究
			【課題C-③】子どものスポーツ実施における地域連携（学校部活動の地域連携を含む）
			【課題C-④】スポーツキャリアサポートに関する研究
			【課題C-⑤】「する」「みる」「ささえる」スポーツ
			【課題C-⑥】エビデンスに基づいた生涯スポーツ施策に関する研究
「健康福祉」研究部会			
解決すべき上位の課題	テーマ別シンポジウムのテーマ	キーワード	テーマ別研究発表のテーマ
【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか	ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方 ー「女」を生きることと健康・スポーツー	心身の健康の測定評価、 健康・体力に関する教育・指導、 （パラ）アスリートに対する心身の健康管理・サポート、 健康・体力に関する政策・制度、 健康・体力に関する思想・歴史	【課題A-①】対象者に応じた心身における健康増進の捉え方やその評価
			【課題A-②】健康増進や体力向上につながる運動指導
			【課題A-③】アスリートやパラ・アスリートにおける心身の健康と福祉
			【課題A-④】福祉社会（政策、制度、文化等）における運動と健康増進・体力向上
			【課題A-⑤】運動と健康増進・体力向上をめぐる思想・歴史
【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか	運動から認知へ、認知から運動へ	認知症予防、 運動の認知制御、 認知行動科学、 認知機能の発育発達、 認知機能の測定評価	【課題B-①】体力・身体活動と認知機能
			【課題B-②】心理・社会的要因からみた運動・認知
			【課題B-③】運動・認知機能の発育発達
			【課題B-④】認知症予防（食事・栄養、認知と転倒、社会参加、政策、プログラム開発、その他）
			【課題B-⑤】運動・認知機能の測定評価
【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか	オンライン化で得られる健康、失う健康	不活動、 生活習慣、 子ども、 COVID-19、 高齢者、 障がい者	【課題C-①】身体活動・運動による生活習慣病・フレイルの予防
			【課題C-②】身体活動・運動による心身の機能低下の予防
			【課題C-③】運動不足・生活習慣・体力・心身の健康の現状
			【課題C-④】生活習慣病予防のための身体活動・運動の動機づけと指導法（オンライン指導含む）
			【課題C-⑤】身体活動・運動の実施率を高める環境と福祉

スポーツ文化研究部会 課題A 研究発表

○研究発表について

課題Aにおいては「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」という上位課題が設定されている。その範疇に位置づけられる研究テーマは様々想定されるが、例として、スポーツと国際平和、開発、格差の解消、地球環境との共生、人々の幸福、持続可能性、グローバルイベントなどが挙げられる。課題Aの口頭発表は大会初日の8月31日午前の時間帯に行われ、3つの演題について発表が行われた。会場には常時40名ほどの聴衆が参加し、対面による活気ある議論がなされた。

第1演者である町田氏（法政大学大学院）の発表は、地球規模で広がる環境問題としての紫外線対策に着目したものであった。屋内外で日々活動する大学生アスリートがどのような日焼け対策を行っているのか。紫外線の長期的な影響や後々生じる健康問題を考えると、アスリートには環境変化に応じた対策が求められているはずである。今回、大学生の日焼け予防行動の実態について、トランス・セオレティカルモデル（行動変容理論）に基づく日焼け予防行動のステージ同定を試みたところ、女性や屋外競技のアスリートは日焼け対策を行う割合がやや高かったものの、多くの大学生アスリートが日焼け対策をほぼ行っていない実態が明らかになった。後年に顕在化してくる健康リスクを低減し、アスリートたちが長期的かつ健康的にスポーツ活動に従事するためにも、スポーツ界全体で地球規模の環境変化に対応する意識を高める必要性を示した研究であった。

第2演者である石塚氏（公財日本スポーツ協会）による発表は、1972年札幌にて開催された第11回オリンピック冬季競技大会の跡地復原に至る意思決定のプロセスを明らかにするもので、オリンピックというグローバルスポーツイベントにおける開発、環境保護、持続可能性につながるテーマだといえる。1972年札幌大会での恵庭岳滑走競技場は、オリンピック・ムーブメントにおける環境保護対策の初となる森林復原を試みた事例である。発表では、行政および大会組織委員会の当時の文書および議事録などの史資料を辿ることで、計画時の復元決定から競技場竣工までに定められた建設条件の数々や、競技場存続を求める声に対する大会組織委員会の対応など、従来ブラックボックス化していた部分についての力動的なプロセスが明らかにされた。この経緯の解明により、今後、環境保護や持続可能性の観点から競技場跡地の復原を試みる際の「教訓的なレガシー」が得られたとともに、民主的な意思決定と妥協点を模索する貴重な記録が後世に残されたといえる。

第3演者の坂本氏（筑波大学大学院）の発表は、東京2020大会においてスイス選手団がつくば市・筑波大学でおこなった事前キャンプを取り上げ、アテンド役を果たした学生の国際理解を調査した研究である。コロナ禍のホストタウン事業の具体を紹介したスライドでは、海外選手とアテンドスタッフとの接触を避けるゾーニングや頻繁なPCR検査など、徹底したシミュレーションや体制構築が行われた事例が報告された。アテンドスタッフとして参加した学生を対象とした半構造化インタビューのコメントから、コロナ禍における厳密な制限下であっても、国際的なキャンプ誘致が学生の国際理解を促進した様子が示された。こうした前例のない取り組みについて記録を残すこと自体が無形のレガシーとして位置づけられるとともに、限られた環境でスポーツがいかに関国際平和や人間の幸福、持続可能性に貢献し、スポーツの価値を維持・向上できるのか、示唆に富んだ研究であったといえる。

いずれの研究も、スポーツ文化研究部会の課題Aのテーマに沿うものであり、発表数は少なかったものの質疑応答では領域を交えた活発な議論がなされた。研究内容の詳細や具体に踏み込む質問はもちろんのこと、研究方法に係る異なるアプローチ法についての助言や今後の展開への示唆も多領域から得られ、応用研究部会らしい意見交換がなされたといえる。

○運営について

コロナ禍の対面発表に伴う感染予防対策として、会場の収容人数や換気についても十分な配慮がなされていた。その他、運営面において特に問題などは認められなかった。

文責：山崎 史恵

スポーツ文化研究部会 課題A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	スポーツを通じた開発支援と持続可能性
------------	--------------------

「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」という解決すべき上位課題に対して、昨年度は「SDGs とスポーツとの接点を探る」というテーマを設定し、SDGs の枠組みを共有した上で、オリンピック・パラリンピック等のメガイベント、アダプテッド・スポーツと SDGs の接点について事例報告、課題等の検討が行われた。今年度はより具体的な課題に焦点を当て、表記テーマのもと、スポーツを通じた開発支援の動向、支援先において体育・スポーツがどのように享受されているのか、それにとともなう身体文化の変容過程、体育科教育に関わる具体的な支援事例を報告し、持続可能な開発支援のあり方ならびに、そこでの体育やスポーツの意義について議論を展開した。なお、本シンポジウムは対面とライブ配信を併用し、参加者（会場での聴講者）は 60 名ほどであった。

まず、山口拓氏（筑波大学）より、「スポーツ国際開発学の定位と発展性」と題する報告がなされた。「スポーツ」と「開発」に関する概説後、IOC や国連の取り組み、山口氏自身が参与されているカンボジアの事例等について報告がなされた。また、スポーツと開発に関わる諸活動は非常に多様であるがゆえに、研究領域として成立しづらいとされてきたが、スポーツ科学は多彩な研究領域を含むものであり開発学と親和性が高く、今後、スポーツ科学分野を巻き込んだ学際的な研究が可能になるのではないかという指摘がなされ、示唆に富む報告であった。続いて、佐川哲也氏（金沢大学）より、「スポーツ開発を推進する途上国に対する日本からの視線」というテーマで、タイの農村部、都市部における子どもの生活、発達、遊びの変遷等について報告がなされた。経済発展に伴って、学校整備や体育の拡充が進んでいく中で、子どもたちは伝統遊びよりも体育・スポーツを好むようになったと指摘しており、発展途上国におけるスポーツ開発の課題ともいえる、本会テーマの根幹を問う意義深い報告であった。最後に、齊藤一彦氏（広島大学）より、『『スポーツと開発』における授業研究アプローチの可能性』と題して、ペルーに対する体育教師の能力開発支援事業に関する実践報告がなされた。ペルーでは「体育＝競技」としてとらえる価値観があり、プログラム導入時には課題が見られたものの、ペルー国内の体育科教育関係者間でのネットワークが構築され、プロジェクト終了後も、ペルーにおいて継続的に体育授業研究の普及や紹介がなされており、持続可能な開発支援の好例とも言えるものであった。

また、質疑においては、支援先において体育・スポーツがどのように受容されていくのかという点について議論がなされ、カンボジアでは日本式の体育・スポーツを一方向的に押し付けるのではなく、現地でアレンジをしてもらえる選択肢を提示することで、当該地域の文化や暗黙知と融合し、新たなスポーツ活動が生まれている事例があると報告がなされた。また、タイは東南アジア圏では経済的に発展しており、国力証明のためにスポーツを強化する側面があり、今後地方においても選手発掘や体育の奨励がますます進むものと考えられるが、その一方で、伝統遊びを国家遺産として保護していく取り組みがなされているとのことであった。さらに、ペルーの事例として、南米では体育の制度と実態の乖離により、2010 年頃からカリキュラム変更の検討が進んできており、ペルーにおいても「体育＝競技」を目指しているわけではなく、このような状況の中で日本における体育の授業研究が現地のニーズに合致するものとして受容されていったとのことであった。以上の諸活動における持続可能性について、昨今の国際開発支援においては、「最初から関わり最後には手放す」という段階にきていると同時に、研究としては、諸活動を「記録するための研究」が必要であり、このような取り組みを進めることで研究者が開発支援者へと変わっていく可能性があるのではないかという指摘がなされた。

なお、本シンポジウムの開催に際して、シンポジスト、コーディネーター間で複数回の研究会を開催し、本会において何を中心テーマとして論じるのか、各シンポジストの報告における要点等について議論を重ね、これらは非常に有意義な取り組みであったと考えられる。

文責：河西 正博、榎本 雅之

スポーツ文化研究部会 課題 B 研究発表

○研究発表について

スポーツ文化研究部会「課題 B」のテーマ別研究発表は、9月1日（木）に口頭発表1～3の3会場で行われ、9題の発表が行われた。

口頭発表1では、初めに林氏は、「ホモルーデンス」と「遊びと人間」の検討から、文化が生成、発展する際の原動力が人間の意志にあり、その意志をもって『先人の生き方を模倣する』ところに文化が生成し発展するとし、この有様を「エクササイズ」概念で説明された。次に市井氏から、かつて身体訓練方法として行われたパルクール（Parcours）が現在のパルクール（Parkour）へと変化した経緯が考察され、そこには若者たちの創意と自発性に満ちた実践があったことが説明された。最後に豊島氏から、諏訪市の「御柱祭」にエクストリームスポーツの要素を見出し、伝統スポーツをエクストリームスポーツと捉える現象(New Traditional Sports)の分析が試みられ、「フロー」や「エッジワーク」といった現象から両者の接点に「極限性」があることが説明された。三者とも「スポーツ文化をいかに醸成していくか」という「課題」に迫る内容であり、活発な意見交換が行われた。

口頭発表2では、近年ではマスコミでも取り上げられているスポーツの場面における倫理に関する発表がなされた。最初の発表者である石原氏はスポーツ・インテグリティについて、研究と実践の進んでいるオーストラリアの事例を紹介しながら、競技団体間での取り入れ方について問題提起をした。続いて、スポーツ・インテグリティ・インデックスの大学版の開発を試みた庄司氏の発表となり、石原氏の発表を受けた議論となった。最後に豊田氏による日本語版 IViS の開発と対人暴力が齎す病理性について発表がされた。また、インテグリティという概念を日本でどのように定着させるのか、という視点を軸に活発な議論が交わされた。

口頭発表3では、まず上代氏から、プロスポーツクラブの現状に関する共同研究の中間報告が行われた。憧れの職業とみなされているプロスポーツクラブであっても、若者の離職率が高い傾向にあることに着目した本発表は、これまで実態が明らかにされてきていないことから、スポーツ政策への提言も期待される。つづいて山田氏からは、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜たちとの交流があった史実をもとに企画された「北灘ワンデリング大会」（徳島県鳴門市北灘町）が紹介された。ここでは、スポーツイベントと地域づくりの可能性について報告がなされた。最後に秋本氏から、パラリンピックスポーツは「インクルーシブ社会の創造」を謳いながら、参加資格によって排除される障害者（非パラリンピアン）を生み出しているとする問題提起がなされた。特に精神障害を有する人たちはパラリンピアンとの格差を感じており、パラリンピックムーブメントからエンパワメントを阻害されているという調査結果も報告された。

○運営について

「課題 B」の一般研究発表に通底する課題を述べておく。昨年度の報告でも指摘されたことだが、プログラムの p. 40 に「『上位の解決すべき課題』の解決へ向けての示唆や提言に言及してください」との記述があるが、例えば口頭発表1では上位課題への示唆を述べた発表者はいなかった。他の研究発表会場でも拝聴したが、その限りでは上位課題へのコメントを述べた発表者はいなかった。昨年度に比較して、対面であることからか、発表が終わるとすぐに質問の手が挙がり、座長からも上位課題への示唆を求める時間をとることができなかった。また、今回は申し込み時に発表時間を発表者が選択できたが、今回は一律の時間配分であった。このことも含めて、今後、引き続き、上位課題と一般研究発表との繋がりについては検討が必要であろう。

文責：周東 和好、加藤 えみか、山口 理恵子

スポーツ文化研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	スポーツにおける／をととした「多様性と調和」はいかにして可能か —身体・組織・支援の観点から—
------------	--

本シンポジウムは、スポーツ文化研究部会課題 B の 2 年目の企画である。課題 B では、「人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか」という上位課題を設定している。この上位課題にもとづき、本シンポジウムでは、パラスポーツを手がかりにしつつ、スポーツにおける／スポーツをととした「多様性と調和」の可能性について議論した。

本シンポジウムの登壇者は、田中愛氏（明星大学）・河合純一氏（公益財団法人日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会）・袴田智子氏（国立スポーツ科学センター）の 3 名であった。加えて、本シンポジウムでは、渡正氏（順天堂大学）を指定討論者として招聘した。

田中氏からは、パラスポーツの空間においては、多様な「できなさ」が前提となっている一方で、「できる」ようになろうとする過程でむしろ「多様性」を消失させてゆくような連関があることをご報告いただいた。次に河合氏からは、共生社会への 3 つのステップ（knowing-doing-being）や「共に生かしあえる社会」として「共生社会」を再解釈する方向性をご提示いただいた。最後に袴田氏からは、パラスリートのサポートでは、専門分野を超えたスタッフ間での状況共有がとりわけ必要になることやそのノウハウを蓄積し共有してゆくことが重要になる点をご報告いただいた。

上記のご発表に対し、指定討論者の渡氏より質問がなされた。ここでは、①「できなさ」の共有可能性や「多様性の消失」という事態の内実、②「多様性と調和」をパラリンピックから推進してゆくことの独自性、③「障がい者を測定する」ことの本質とパラサポートで蓄積された知の応用可能性、について議論がなされた。

次に、フロアディスカッションでは、4 名の参加者からご質問いただいた。ここでは、①技術的な位相での「できなさ」と乗り越え困難な「できなさ」の関係、②「多様性と調和」という言葉が差別や分断に結びつくことの危険性、③社会における「多様性と調和」への関心、④障がい者と健常者がともに生活することの意味、⑤「普通」と「特殊」というカテゴライズの問題、について議論がなされた。

本シンポジウムでは、多角的な視点から「多様性と調和」について議論が交わされたが、それぞれの視点には、論者にとっての「多様性と調和」の実践が厳として紐づいている印象を受けた。この点は、「多様性と調和」を考えるうえで見過ごしがたいポイントである。「多様性と調和」は、概念的に規定するものではなく、時間と空間を共有した関係性において生起する具体的な実践であると考えられる。この点に鑑みれば、「多様性と調和」の推進においては、「インクルージョンする」ことを強調するのみならず、個々人が「インクルージョンされる」経験の尊さも見過ごされてはならないだろう。

○運営について

運営上の問題は、とりわけ散見されなかったように思える。シンポジストの意向にもとづき、資料の配布・配信は行わなかったが、登壇者間の議論やフロアとのディスカッションは活発になされていた。また、本シンポジウムは、オンデマンド配信を行うものであったが、配信までの手続きは円滑になされた。立ち見の参加者が見受けられたが、この点は、感染症対策に留意し座席の間隔を空けたことの帰結であり、運営上の問題ではないと考える。実行委員会の方々の運営に改めて御礼申しあげたい。

文責：高尾 尚平

スポーツ文化研究部会 課題 C 研究発表

○研究発表について

スポーツ文化研究部会課題 C では、中村なおみ氏他による「動きの質の違いを共有し認め合うダンス発表会の意義に関する研究」、阿部崇氏他による「国際ストック・マンデビル競技大会の表記に関する研究」、深澤浩洋氏による「大学生アスリートを対象とするアンチ・ドーピング教育に向けた倫理・道徳教育とその限界」、宮崎明世氏による「東京 2020 ホストタウン事業における国際交流と地域活性化に関する事例研究」の 4 題の口頭発表が行われた。なお、会場には約 40 名の参加者にお越しいただいた。中村氏からは、競争を通じた交流が生まれる競技スポーツないし競技大会に対して、「動きを共有する」ために集い、相互の動きの違いを発表し合うことから相互につながり合うダンス発表会の事例報告がなされた。阿部氏からは、パラリンピックの源流である国際ストック・マンデビル競技大会の新聞記事における大会名称の変遷とその特徴を内容分析した結果が報告、考察された。深澤氏からは大学生アスリート対象のアンチ・ドーピング教育の推進における限界を踏まえた上で、今後の方向性が考察された。宮崎氏からは東京オリンピックに伴う「ホストタウン事業」について、山形県村山市を事例にブルガリア新体操チームと関係者による国際交流の実態と共に、その成果や課題が報告された。発表者にご報告いただいたダンス発表会、新聞記事、アンチ・ドーピング教育、ホストタウン事業は全て、本研究部会課題 C の「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進」に関わっている。フロアの参加者からも積極的に質問がなされたことで、ディスカッションも非常に活発に行われた。全体を通じてテーマに基づく発表という点で一貫性を感じるセッションとなった。

○運営について

一時、発表者の PC 画面が投影されない時間が生じてしまったが、会場のスタッフの方々にご尽力いただきその後は滞りなく進めることができた。会場前方部（発表者側）の床に鉄の杭が出ている箇所があったが、注意喚起の掲示を適切に行っていたため円滑に運営することができた。時間の制約上、質問が出来なかった参加者もいたため、すべての発表終了後に全体討議のような時間があれば、柔軟なディスカッションができるように感じた。テーマ別研究発表の趣旨からしても、発表者間の意見交換なども含めて、全体で議論できる場面があるとさらに議論が活発になるかもしれない。

○その他

テーマ別研究発表のため座長から発表者・会場参加者と共に、「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」というテーマを確認する時間を設ければよかったことを反省している。発表者の方々が、どの程度、研究部会のテーマを意識しているかどうかは不明だが、個々の研究発表と部会のテーマ（＝課題）が接点を持つような運営が必要と感じた。研究発表の後に、同課題によるシンポジウムが開催される点でも重要と考える。なお、セッション終了後も発表者と会場の参加者が積極的に意見効果をしている姿が見られ、対面による開催の意義を強く感じた。

文責：朝倉 雅史

スポーツ文化研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	スポーツ文化の浸透戦略 (2) —身体文化の伝承・継承を科学する—
------------	--------------------------------------

本シンポジウムは「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の2年目にあたるものである。1年目の議論のなかで、スポーツ文化そのものの保存については、スポーツ実践の継承に可能性を見いだすことができるのではないかという問題提起があった。そこで、2年目の本シンポジウムでは、具体的な実践の場面にフォーカスし、身体文化がいかにして伝承・継承されるのかを検討した。参加者は80名ほどであった。

シンポジストの1人目、水村（久埜）真由美氏（お茶の水女子大学）は、バイオメカニクス研究の立場から、運動の客観値を提示することは、効果的な運動学習と安全な運動実践を可能にさせることを指摘する。個人差の評価は今後の課題とするが、身体文化の伝承・継承にあたっては、量的分析と質的分析の併用がブレイクスルーに向けての可能性を秘めているのではないかという展望を提示した。

続く2人目のシンポジスト、中村剛氏（筑波大学）は、運動学の立場から、〈わざ〉の伝承においては、伝え手と受け手が身体を携えて互いに接する練習場や道場が重要な役割を演じることになるという。また、運動学では〈わざ〉伝承の営みの最初の段階として〈なじみ〉を重視するという。そして、身体文化の伝承を考える上では、ローカルでマニアックな伝え手と受け手の関係系をどう構築するべきか、ということに注目する必要があると指摘する。

そして、3人目のシンポジスト、清水由佳氏（一般社団法人劉衛流龍鳳会）は、空手道の指導者の立場から、稽古においては、生身の人間同士の交流からでしか継承できないものがあることを指摘する。たとえ映像で著名人の動きを記録したとしても、実際に生で見たままの「凄さ」を伝えるには不十分であるという。重要なことは、身体から身体へ伝承・継承させながら無形文化としていく道筋であり、時代に向き合うとともに、それを深化させる「心」を継承することが肝要と訴える。

シンポジストらの発表を受けて、指定討論者の石井隆憲氏（日本体育大学）は、まず人類学における代表的な文化概念を紹介する。文化とは、特定の集団によって学習され共有された自明かつきわめて影響力のある認識の仕方と規則の体系であるという。そして、シンポジストとの質疑を経て、人と人との関係性が身体文化をめぐる方法知や内容知を伝承するにあたって大きな影響力をもつことを指摘した。

本シンポジウムは、身体文化の伝承・継承が極めてローカルな場であり、濃密な人間関係のなかでなされるものであることを浮かび上がらせるものであった。一方でこの見通しは、ローカルな場のみではなく、多くの人にスポーツ文化を浸透させることを企図する本部会にとって、そのためにどのような制度を設計するのかという点の重要性を照らし出すものでもあった。3年目のシンポジウムに向けて、こうした点を念頭に企画内容を検討したいと考えている。

○運営について

当日の資料配布については、紙を削減するという観点から、クラウド上に資料をアップロードするという形式をとった。アップロード先は、大会 HP の当シンポジウムのコメント欄である。これによって、参加者はそれぞれの PC 等から資料をダウンロードして、適宜、参照することができた。

○その他

清水氏は沖縄からご来場いただく予定であった。しかし、学会期間中、台風の影響により沖縄から順天堂大学へ向かう際の飛行機が飛ばない可能性が出たため、急遽、清水氏には ZOOM でご参加いただくことになった。実行委員会の皆さまにご対応いただき、無事、清水氏にご登壇いただくことができた。

文責：尾川 翔大

学校保健体育研究部会 課題 A 研究発表

○研究発表について

本部会では「大学体育の授業をいかに良質なものにするのか」という解決すべき上位の課題のもとに、5つの研究発表テーマ（①大学体育の政策・制度設計、②大学体育の理念・目標、③大学体育の授業デザイン・学習内容、④大学体育の評価・効果検証、⑤大学体育のマネジメント）が設定され、計10件の発表が行われた。発表者の専門領域は、体育哲学、体育心理学、体育経営管理、発育発達、体育方法、保健、体育科教育学、アダプテッド・スポーツ科学、介護予防・健康づくりと多岐に渡り、領域横断型の研究発表の特徴がみられた。研究発表は2会場（第3会場と第5会場）に分かれて5題ずつ展開され、第3会場では上記5テーマのうち④⑤、第5会場では②③⑤に該当する発表がなされた。

第3会場で行われた④に関わる研究発表では、大学生を対象とした調査研究から、コロナ禍によって大学生の心身フィットネスや生活状況が悪化していることが報告され、フロアからは大学体育授業においてこうした課題にどのように対応できるのかとの質問が投げかけられた。また、大学体育授業の主観的恩恵に及ぼす要因について検討した発表では、学修者個人要因に比べ、学修状況要因が学修成果に強く寄与することが示唆され、「共感・配慮」「他者協力」が学修成果の鍵になる可能性とともに、体育授業において如何なる経験を積ませるか重要であるとの指摘がなされた。さらに、大学生の対処資源測定尺度の作成に試みた研究発表では、大学体育の授業が受講生へのストレスコーピングの効果を高めるとともに授業外への般化を助けることができる可能性が示された。⑤に関わる発表では、大学体育授業における心拍計を用いた積極性の評価について報告がなされ、心拍数を積極性の評価にすることの妥当性等について活発な議論がなされた。参加者は80～90名程度であった。

第5会場で行われた②に関わる研究発表では、体育原理の概念について検討がなされ、「体育原理」から「体育哲学」への移行過程について討議が行われた。③に関わる研究発表では、経済学的視点を取り入れた教育の可能性について検討がなされ、スポーツの価値、将来の医療費や介護費削減への影響、スポーツへの投資に対する抵抗、ジェンダー・スタディーズに立脚した研究の必要性が言及された。また、こころの準備運動としての「笑いワーク」の教育効果について検討がなされ、その教育効果やコミュニケーション能力向上のアプローチとしての期待が紹介された。さらに、2020年度秋学期授業の調査結果から、新型コロナウイルス感染症対策のためにオンデマンド型遠隔授業を活用した体育実技系必修科目の検討がなされ、社会人以降も活用できる運動の情報提供が重要であることの指摘がなされた。⑤に関わる研究発表では、教員養成課程での身体運動文化としてのダンス教育の重要性について検討がなされ、創造的な自己表現を体験する誰一人取り残さない学習は、表現や踊りを通して仲間とのコミュニケーションを豊かにし、次の教育現場に受け継がれるといった主張がなされた。参加者は100名程度であった。

○運営について

専門領域の異なる者同士が研究成果について議論を深めるには、発表10分、質疑応答5分という時間はあまりに短く、領域横断型発表の趣旨が十分に生かされていない印象をもった。また、質疑の際に、スタンドマイクまで移動する方式は時間的なロスが多く、その場で発言することになった。会場担当者がマイクを持って質問者の場所まで移動する方式も同様の問題があり、新型コロナ対策のためにマイクに触れずに発言を求めたため、質問者は話し辛そうであった。

○その他

会場には想定以上に多くの聴衆がおり、大学体育に関する関心や危機意識の高さを感じさせるものであった。応用領域の研究発表では、座長に対し発表者から資料が提供されることでより進行しやすいと感じた。

文責：木村 華織、高橋 浩二

学校保健体育研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性 —多様性理解の観点から—
------------	---------------------------------------

学校保健体育研究部会の課題 A では、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という主題を設定し、昨年度は「大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える」をテーマとしたシンポジウムを実施した。今年度はその議論を深化させるため、現代的課題として「共生社会の創造」を念頭に、多様性の理解を促進するという観点で大学体育がいかなる可能性を有するのかを検討することとした。

パネリストに招いたのは、以下の三者である。はじめに筑波技術大学の向後佑香氏・天野和彦氏から、「聴覚・視覚障害学生と大学体育の現状」に関する話題が提供された。そこでは障害学生の体育実技に関する課題として①安全、②情報保障・コミュニケーション、③指導体制の確保等が挙げられ、その具体的な工夫点について紹介された。また、筑波技術大学を拠点とする「障害者高等教育拠点」事業の成果をもとにした研修プログラムや体育実技事例集・動画ライブラリが利用可能であることが共有された。

次に、順天堂大学の野口亜弥氏から「ジェンダー・セクシュアリティの視点を取り入れた大学体育授業の可能性」について話題提供をいただいた。野口氏は第三期スポーツ基本計画における新たな3つの視点（スポーツをつくる／はぐくむ、あつまり／ともにつながる、誰もがアクセスできる）を確認し、また近代スポーツ史における意識的または無意識的な男性優位主義の存在に言及した上で、共生社会の構築に向けたアプローチとして「社会参画としてのスポーツ参画の保障」、「教育や支援を提供する場としてのスポーツの活用」、「スポーツをする姿を通じた社会規範の変化」を挙げた。具体例として、米国ジョージア州における難民の子に抛りそうサッカークラブや、ザンビア・ルサカにおけるスポーツを通じたジェンダー平等プログラムの事例を紹介された。

三人目に東洋大学の細谷洋子氏から「文化理解につながる有形・無形文化財を活用した大学体育授業の可能性」と題してお話いただいた。細谷氏が長年継続されてきた大学体育としての四国遍路体験（一番札所から六番札所（約15 km）までの歩行）を通じ、ウォーキングによる健康維持促進や、地域住民との触れ合いによる地域文化の理解が深められたことが紹介された。また、ユネスコ無形文化財のブラジル伝統格闘技カポエイラを扱った授業を通じ、技術習得のみならず、既存の競技スポーツと異なる価値観をもったカポエイラ固有の世界観の体験を通じた異文化理解が促進された可能性について言及された。

本シンポジウムでは、大学体育授業の可能性について以上の三点の視点から掘り下げることにより、特に共生社会の創造という現代的課題の解決に向けたその可能性を多くの参加者とともに認識し、共有することができた。三年目となる次年度の総括に向けてさらに論点を深化させる所存である。

○運営について

司会側のコーディネートが不十分であったことから、フロアとの議論の時間を十分に確保することができなかった。次年度へ向けて、タイムスケジュールを再考する必要があると考える。また、オンラインでの配信を増やすことをご一考いただきたい。設備上の限界からオンライン配信数に限りはあるが、昨今の社会情勢を踏まえるとオンラインで参加する会員も少なからず存在する。学会から会員へ提供するサービスを充実するという意味においても重要な課題であるため、ご検討いただきたい。

○その他

ご来場いただいた聴衆は、収容定員あるいはそれを少し超過するほどであった。大学体育に対する関心の高さが窺えたため、来年度に向けて参加者の期待に添えるシンポジウムづくりを目指したい。

文責：今宿 裕、大林 太朗

学校保健体育研究部会 課題 B 研究発表

○研究発表について

口頭発表①では、中野大希氏による「体育授業において痛みを経験することの意味に関する検討」、村上祐介氏らによる「アダプテッド体育・スポーツの観点の定着に向けた小学校の校内研修プログラムの検討」、梶ちか子氏らによる「ダンスの実技力や実技指導に関わる運動観察力の醸成に係る教材開発」と題する研究発表が行われた。

口頭発表②では、藤本敏彦氏らによる「高等学校における体育実技授業の実態調査」、竹内花氏らによる「中学校体育に対する嫌悪感特性」、大坪健太氏らによる「中学保健の知識定着度および活用意識に影響を及ぼす要因」と題する研究発表が行われた。

全 6 題の発表であったが、どの発表も、発表者の取り組みがよく伝わる形で報告され、質疑応答も活発に行われていたことを報告する。

○運営について

運営については、現地スタッフが計時・照明・質疑応答全てにおいて迅速かつ適切な対応を得られたおかげで、大きな問題なく進めることができた。

○その他

この発表枠組みになって 2 年目となったが、発表カテゴリーによって、どの枠組みで発表すれば良いのか、戸惑いを見せる会員も認められた。今後は、会名称及びこれからの学校保健体育の課題を取り上げるにより適した発表カテゴリーの調整について検討する必要もあると感じている。

文責：細越 淳二、原 祐一

学校保健体育研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	より良質な保健体育授業とその学習内容を考える —「豊かなスポーツライフ」の実現をキーワードにして—
------------	--

第 71 回大会のシンポジウムにおいて、コロナ禍の経験が、人と人との関わりには根源的な重要性があることを再確認するとともに、それを具現化する場としての体育・保健の授業の意味の大きさを確認することができた。その一方で、「豊かなスポーツライフ」に向けた取り組みを進めるための体育・保健体育において何を伝え・身に付けるべきなのか、という課題が浮き彫りとなった。そこで、第 72 回大会では、近年の社会的・教育的動向を鑑み、「ともに」学ぶという視点、『自分からみんなへ』という視点の移行、「学校と地域」の連携による授業実践を取り上げた上で、「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点について議論することとした。当日は、会場に約 180 名、zoom ウェビナーに約 60 名の参加者を得てシンポジウムが展開された。

シンポジストの塩見英樹先生からは、豊かなスポーツライフの実現のために必要となる良質な体育の授業という視点から、資質・能力の三つの柱の育成、指導内容の系統性を踏まえた指導内容の一層の充実、そしてどんな時代であっても学びを保証し、学習の連続性を大切にすること、等について実践例を交えて報告された。

梅澤秋久先生からは、「ともに」学び育つことの意義と豊かなスポーツライフという視点から、国内外でも「共生 inclusive」が関心を高める中で多様な他者との互恵的な関係の構築や、アダプテーション・ゲームによって運動格差（技能、身体能力、体格）等を包摂して互いが愉しめるような持続的 Well-being を目指す体育の実践例について、具体的に報告された。

今関豊一先生からは、「自分の健康」だけでなく「みんなの健康へ」という視点について、「みんなの健康」は「自分の健康」に加えて「社会環境（制度を含む）」で捉えること、より良質な学習を保証する際には授業時間内の活動を質的に充実させること、そのために、例えば発問や話し合い活動を通して相互の立場から考える学習過程等が必要であること、等について保健の実践例を踏まえて報告された。

清田美紀先生からは、「学校と地域の連携」という視点からみた「豊かなスポーツライフ」の実現に向けた取り組みの実践例として、ICT を活用した体づくり運動の遠隔授業、保護者との連携で進める水泳の指導、地域人材の活用による保健授業の活性化、オリンピック・パラリンピックでの学びを生かした体育大会・運動会などの学校行事の充実、等について報告された。

その後の全体協議ではフロアから 2 名の質問を受け、全体協議を行った。シンポジストの発表から「豊かなスポーツライフ」を実現する子どもたちが共有すべき視点を授業において取り上げるにあたっては、各領域を通じて学ぶ内容に、これらの要点を付随し、適切な方法と関連づけていくことが確認された。また、多様な他者との協働・連携に着目した議論を通じて、他者と関わる状況・文脈のなかで子供たちにどのような学びがあるのか、その見通しをもった授業デザインや、学習の過程・成果を的確に捉えるためには、多様な学習観やカリキュラムマネジメント等の視点が教師に必要であることが示唆された。この度、より良質な保健体育授業とその学習内容を検討することで、教員養成の在り方や制度等、今後につながる議論を展開することができた。

文責：伊佐野 龍司、岩田 英樹

学校保健体育研究部会 課題 C 研究発表

○研究発表について

口頭発表 1 では、体育授業の教師(指導者)や指導のあり方をめぐって 4 演題が発表された。中学校教師の心理構造、児童の「伝える力」の育成、中学校の創作ダンス指導における経験、発達障害児に対する運動指導と、それぞれに焦点とアプローチの違いのある研究報告であり、複合的観点から体育授業や指導者、指導方法に対する議論が深まることが期待される内容であった。参加者も多く、実技指導場面への関心が高いことが伺われる状況であった。

口頭発表 2 では、運動が苦手な子ども達への指導法に関する発表と身体活動の及ぼす心理的影響の発表であった。いずれも、実際の教育現場に重要な示唆を提示する研究であった。特に運動実施や体力の二極化を防ぎ、心身共に発達を促す点からも、さらに大規模なデータを用いた追跡的な研究に発展することが望まれる内容であった。フロアからの質疑も活発であり、関心の高さを実感した。

口頭発表 3 では、授業の教材の紹介とその評価に関する研究が 4 演題発表された。会場の参加者は、8 割くらい座席が埋まっていた。発表の内容は、ボール運動系領域の ICT の活用や、状況判断の能力、ダンス授業の新たな指導法の提案がなされ、フロアからの質問は、発表の内容によって偏りが多かったが、昨年に比べては、座長が一人に対応する様な雰囲気ではなかった。

口頭発表 4 では 4 題の口頭発表が行われた。すべての発表が学校現場における実践内容に関するものであった。昨年度と異なり対面での実施であったことから、多くの質問が出され活発な議論が展開された。内容を見ると、明日の授業実践に役に立つ体育科教育的な内容が多かったが、これからの体育授業の在り方を議論する領域横断的な内容は少なかったようである。領域を横断する研究とはどのような内容となるのかといったモデル的な研究を実施する必要があると思われる。

口頭発表 5 では、発育発達期の子ども達の身体的、心理的な運動効果などに関する測定評価に関する発表であった。それぞれの目的、対象、方法は全く異なる内容であったが、いずれの研究手法も興味深く、今後の発展が期待できるものであった。4 演題のテーマがややバラツキがあったため、フロアからの質疑もやや少なかったため、1 セッションのテーマ統一は大切であると思われた。

口頭発表 6 は、小学校のマット運動の評価方法や、動作を決定している因子構造、安全対策に関する研究発表であった。会場の参加者は、8 割くらい座席が埋まっていた。発表内容が種目としてまとまっていたので、比較的多くの意見がフロアから挙がり、また、実際に現場で指導している教員からの経験も踏まえて議論がなされたので、テーマ別発表としての機能は果たしたセッションであったと思われる。

○運営について

口頭発表 5 の座長を急遽変更する対応が求められたが、部会内委員で調整することができた。コロナ禍の対応になるが、座長のバックアップも念頭において準備が必要と感じた。発表のオンライン対応に関しては、特に通信の問題はないが、質疑の際にフロアとのやり取りが難しいと感じた一面もあった。

文責：柏木 悠

学校保健体育研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	子どもの心身機能の現状から考えるこれからの保健体育とその科学的背景
------------	-----------------------------------

コーディネーターの春日晃章先生と松田恵示先生の司会のもと、本部会のこれまでの経緯の説明後、シンポジウムが開催された。

一人目のシンポジストの工藤和俊先生の発表は、「心身機能とその科学的背景」というタイトルのもと発表した。近年、運動や身体活動の脳科学への影響が明らかになっている。本発表では、人口知能を例に知性とは何か、知性とは全て身体と共にあり、更に生物の認知は、身体運動と共にあると解説された。つまり、心と身体は繋がっており、そのために身体活動が重要となる。このような概念をもとに東京大学では、運動健康科学実習科目「コーディネーション」、楽器としての身体、声楽の実践と科学「オペラ歌手と一緒に歌う」など授業内容を紹介し、最後に「AI の時代は、脳ではなく、身体の時代」としてまとめられた。

二人目のシンポジストの野井真吾先生からは、「発育発達の見点で考えるこれからの保健体育」というタイトルで発表された。子どもの教育は、心身が基盤となって展開されているのに関わらず、現代の子ども神経系の発育不全や不調の多くが確認されていることを問題視した。これまでの子どもの生活調査の研究では、平日と休日のメラトニン分泌パターンの違いなどを示し、学校に通うことの意義は、正しい生体リズムが調整されていること報告した。しかし、コロナ禍による突然の臨時休校処置は、子どもと保護者の両方へ更なる負担をかけ、学校へ登校することの意義において、子どもは、友達との繋がりを重要視するのに対して、大人は学業を重要視し、その意識と視点が親子では全く異なることを示した。「人間」は、「人の間」と書く様に、一人で進化してきてわけではなく、生まれた時は動物であり、動いて人になり、群れて人間になる。協力、共存、子育てのための社会の形成の重要性を、Society 5.0 時代を迎えるあたり、保健体育は、益々重要になるとまとめられた。

三人目のシンポジスト近藤智靖先生からは、「戦後の体育科の変遷について」というテーマで発表された。特に、学習指導要領がどのように作成されてきたのか、その経緯などについて解説された。1953 年の試案の具体的な例から始まり、どの様に系統的な指導が形成されたのか、時代背景と共に変遷されてきた学習指導要領の内容の経緯を専門化外でも理解できるように分かりやすく解説された。急激な時代変化と共に、その時代に適応する多くの能力が求められるため、教育の内容も多くなり、現在はカリキュラムオーバーロード（過積載）が顕在化している問題も一方で指摘した。今後の指導のあり方、指導内容の優先順位と整理の必要性、持続可能な教育のための学習指導要領が求められるとまとめた。

総合ディスカッションでは、春日晃章先生（岐阜大学）が、3 名のシンポジストにカリキュラムオーバーロードの状態をどの様に今後改善していくのか、保健体育が全ての教育の土台であり、その重要性をどの様にしてステークホルダーに学会として発信していくべきなのか質問し、また、シンポジストの発表に対して、コーディネーターの松田恵示先生（学芸大学）、フロアからも様々な意見、議論が展開された。

○運営について

与えられた会場定員の 8~9 割の座席が埋まっており、盛況であった。シンポジウム自体の進行等には特に問題はなかった。シンポジウムは 2 年目であり、また、対面であったので、昨年よりも参加者の雰囲気やシンポジウムの意図を理解して参加された方が多かったと思われる。特に今年度は、スポーツ心理学、発育発達学、体育科教育の異なる分野からの発表であったが、課題の改善策を様々な視点から考える機会を作り、体育、スポーツ、健康の総合知のテーマに沿ったシンポジウムを企画できた。シンポジストの発表時間と議論の時間、議論の方法等の時間配分は悩ましいが、今後、アンケート等で参加者の意見や感想を収集できるとよい。

文責：柏木 悠

競技スポーツ研究部会 課題 A 研究発表

○研究発表について

<口頭発表①>

口頭発表①では、体育哲学、体育方法、体育科教育学の専門領域からの研究発表が行われた。いずれの発表も、他専門領域と関連する視座や方法論を含んでおり、質疑応答においても多様な専門領域の研究者同士のディスカッションが交わされ、領域横断型を実施する意義を示すものであった。「もしアスリートがパーソナルコーチングを受けたら (青柳先生・体育科教育学、体育方法)」は、ビジネス領域で用いられてきたパーソナルコーチングを、アスリートへのサポートに応用した事例発表であった。この発表に対し、選手との関係開始の経緯や、実践の上で選手との関係性をどのように構築し、実践を続けていく中でどのように流動的に変容していくのかなど、心理学的な視点からの質疑応答がなされた。「大学における学習支援は競技スポーツを教育に結びつけられるのか (岸井先生・体育哲学)」では、学業と競技の対立 (両立) に囚われない、スポーツの教育的な説明が必要であるという問いが投げかけられた。これに対し、学歴至上主義と勝利至上主義のような社会における両義的な価値の葛藤が、大学スポーツの問題と関連するのではないかなど、心理・社会学的な観点から質疑応答がなされた。「スピードスケート競技におけるジュニア育成システムの課題に関する事例研究 (小野寺先生・体育方法)」では、育成における阻害要因を考察し、育成システムの構築や改善に向けた示唆が提示された。ネガティブな要因にのみ焦点を当てることの研究手法上の問題や、コーチの視点のみならずアスリート側の視点 (進学上のリスク、キャリア形成のリスクなどにより競技から離脱) を捉える必要性などについて、多様な立場から討論がなされた。以上のように、領域横断型のセッションであったことから、「多様な人間、複雑な社会」に対して、体育・スポーツ・健康に関わる者が、様々なスタンスから多角的にアプローチしてきた視座の共有がなされた。以上のことから、昨年度と同様に、他専門領域がともに協働し、学際的に研究を推進する可能性を含むセッションになったと考える。(参加者数 52 名)

<口頭発表②>

口頭発表②では、体育心理学・体育社会学、体育方法・発育発達専門領域からの研究発表が行われた。発表者及び参加者は、いずれも複数の専門領域から構成され、多角的な視点からの質疑応答が行われた。

「絶対的状況下におけるアスリート支援のためのアスリート・ターミナルケアとスポーツチャプレンの機能」(前田先生、競技スポーツ研究部会-A-04、体育心理学)では、コロナ禍におけるトップアスリートへの約1年間のヒアリング調査結果に基づいて、トップアスリートを支える仕組みづくりが提示された。この発表に対して、ヒアリング調査のデータを分析する手法の手続きについて、スポーツチャプレンの機能について等、方法論やトップアスリートの支援策について討論がなされた。

「トップスポーツにおけるスポーツファーマシストのあり方」(大塚先生、競技スポーツ研究部会-A-05、体育社会学)では、アスリートやアンチ・ドーピング (以下、ADと略す) に関わる多様な対象者の観点から、スポーツファーマシスト (以下、SPと略す) のあり方を明らかにすることを目的とし、「トップスポーツに関わる者」で、「SPとしてAD活動に従事する者」(中央競技団体で活動するSP2名)、「SPとAD活動を熟知し、その推進を図る者」(公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構専務理事1名)、そして「SPからADに関するサポートを受けたことがある者」(中央競技団体強化責任者1名、オリンピックメダリスト2名)を対象に半構造化インタビューによって得られたデータを定性的に分析した結果が発表された。この発表に対して、分析方法として採用した修正版グラウンデッド・セオリーアプローチの妥当性について、SPの国際化と国内での広がりについて等、多様な視点からの討論がなされた。

「幼少期における競技経験が大学野球選手の競技レベルに及ぼす影響」(福家先生、競技スポーツ研究部会-A-06、体育社会学)では、日本の大学野球選手を対象に、野球を始めた時期や専門化した年

齡、他種目経験など競技経歴の現状を明らかにし、競技経歴と各年代における競技レベルとの関連性を分析した結果、更に、中学生の時期に使用していたボールと各年代の競技レベルにも関連性があるのかという点について調査した結果が発表された。この発表に対して、各年代で実施していた種目について運動の頻度や強度についても調査項目に入っていたのか、対象者である大学野球選手の競技レベルについて等、方法論を中心とした討論がなされた。

以上のように領域横断型のセッションであったことから、多様な専門領域の観点からの発表と討論がなされたが、特に、各専門領域に共通する方法論についての討論が中心に行われたといえよう。(参加者数 37 名)

○運営について

<口頭発表①>

第7波の最中に、ハイブリッド等で対応し、学会を開催・運営いただいたことに感謝したい。(以下はシンポジウムの運営についての感想です→) ハイブリッドのセッションにおいては、オンライン参加者の質疑等の統制、システム運営のサポートなど、事務局スタッフの方々に迅速かつ臨機応変にご対応いただき、スムーズに進行できたのではないかと感じた。

<口頭発表②>

運営についての課題は特に気になる点はなかった。対面参加者への感染対策やハイブリッド対応等について、運営面での多大なるサポートがなければ今回の研究発表や討論も成功裡に終えることはできなかったといえる。その意味では、大会組織委員会や学会事務局に心より感謝申し上げたい。

文責：内田 若希（口頭発表①）、須甲 理生（口頭発表②）

競技スポーツ研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点Ⅱ —トップアスリートの大学からプロ・実業団への接続に着目して—
------------	---

本シンポジウムでは、谷釜尋徳（東洋大学）と田原陽介氏（青山学院大学）の2名がコーディネーターを担当した。まず、コーディネーターからシンポジウムの趣旨説明と登壇者紹介がなされた後に、3名の先生方から以下のような発表が行われた。

水野洋子氏（日本体育大学）は、パラアスリートの視点から、「人生のキャリア」と「アスリートとしてのキャリア」という二つの軸を持つデュアルキャリア支援の重要性を中心に据えて発表した。海外の事例を参考にしながら、自身の指導現場では、アスリートが大学在学中に引退後の人生をイメージできるようなアプローチを心掛けていることや、そのような取り組みによってコーチとアスリートの間に良好な関係性が生まれ、競技力も上昇していく傾向が見られたことが報告された。大学生活は、「人生の幸福」と「アスリートとしての幸福」の双方を追求してキャリアをデザインする場で、コーチとアスリートがともに未来を描いていくような意識を持つことが大切だと締め括られた。

池田英治氏（筑波大学）は、女子バスケットボールの視点から、近年の研究成果や自身の指導現場の事例を中心に、プロ・実業団への「接続」に関する現状と課題を提示した。競技力の高いアスリートが卒業後にトップレベルのリーグを目指すうえでは、大学在学中は競技に打ち込みながら将来設計にも目を向けるデュアルキャリアの考え方を持つことが重要だと強調された。また、デュアルキャリアへの動機付けは大学入学後では遅く、より早い時点から意識的に取り組む必要があるという課題も提示された。

須佐徹太郎氏（阪南大学）は、男子サッカーの視点から、1990年代より大学サッカー界を挙げて強化策を講じてきたことが実を結び、即戦力としての大学出身者の価値がJリーグにおいて再評価されるに至った経緯を具体的なデータに基づいて発表した。また、近年ではJリーグの新人選手に占める大学出身者の割合は増加傾向にあるが、今後、大学サッカー界のさらなる強化に向けては「資金調達」が重要な課題の一つであることが報告された。

続いて、ディスカッションが行われた。トップアスリートの成長に向けたそれぞれの取り組みや、トップレベルに手が届かない学生への対応など、フロアからの質問も含めて活発な議論が交わされた。最後に、登壇者3名から振り返りのコメントがあり、シンポジウムは盛会のうちに終了した。

今回のシンポジウムは、登壇者の密度の濃い発表およびディスカッションを通して、大学という機関において、トップアスリートの成長を促し、さらに上のステージ（プロ・実業団）に送り出すにあたってどのような課題があるのか、そしてトップアスリートが大学に進学して学ぶ意義はどこにあるのか、等々、シンポジウムのテーマに関わる数多くの示唆が得られる内容であった。

なお、当日は、会場での参加者は約120名で、合わせてオンラインのライブ配信も行われた。

○運営について

組織委員会スタッフの皆様による丁寧なサポートにより、シンポジウムの直前準備・本番中のいずれにおいても、目立った機器トラブル等は発生しなかった。一方、昨年全面オンラインから、今年対面開催に切り替わったことから、シンポジウムの配布資料の印刷部数が予測できず、一部の参加者には資料が行き渡らなかったことを反省点としてあげておきたい（100部印刷／会場参加者約120名）。

文責：谷釜 尋徳

競技スポーツ研究部会 課題 B 研究発表

○研究発表について

口頭発表①では、5 題の競技パフォーマンス、コーチングに関する研究内容の発表が行われた。発表タイトルは、「全国トップレベルの競技性をもつ高等学校運動部指導者に求められる概念 -所属する生徒へのフォーカスグループインタビューを基に」、「継続的に集積可能な心拍数データに関する実践研究 -大学女子テニス選手を対象に-」、「学生アスリートにおける月経の身体・精神症状とパフォーマンスの関連について」、「空手の組手競技における先取点獲得の有効性」、「バスケットボール競技におけるタイムアウトの有用性に関する研究」の各題目であった。討議では、各発表の研究内容への質問に加えて、関連する研究による研究デザインへのアイデアや今後の展開についてフロアの会員先生から発言があった。対面形式での研究発表は会員諸氏の研究活動の促進に大きく寄与するものであったと思われる。(参加者数 約 120 名)

○運営について

新型コロナウイルス感染症の外出制限により発表前日までに 2 名の発表者がオンライン発表に変更された。オンライン発表の運営については、実行委員各氏の準備・運営によって対面・オンラインの区別を感じない運営がなされた。今後の課題としては、会場からのマイク音量が遠隔発表者に適切に伝わらなかったこと、会場、座長、質問者の映像を遠隔発表者に送信することができなかったことがあげられる。

文責：田井 健太郎

競技スポーツ研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	競技スポーツの女性コーチ養成
------------	----------------

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本の女性のスポーツ実施率は、男性よりも低いもののジェンダーバランスが取れていないとまではいえない。一方、コーチに目を向けると、ジェンダーバランスが取れているとは言い難い状況にある。そこで、本シンポジウムでは「競技スポーツの女性コーチ養成」をテーマとして設定し、競技スポーツの女性コーチ養成をいかに行い、コーチにおけるジェンダーバランスをいかに取っていくかを議論した。

最初の登壇者の来田氏からは、女性コーチの割合が増えない国際動向があるために、このテーマに関連する 2021 年の IOC のジェンダー平等政策は 2018 年の政策から後退せざるを得ない状況にあることが指摘された。また、日本スポーツ協会のコーチ登録者の分布を都道府県別に表し、初級、上級レベルの有資格者がいずれも高い京都府のような事例がある一方で、初級のみが多い／上級のみが多い／いずれも少ないなど地域によって偏りが生じているという興味深い結果が紹介された。さらに、女性コーチが増えない背景には、キャリア選択時の構造的偏見・差別の存在、労働環境等をサポートするための社会的ネットワークの欠如が紹介された。最後に、研究分野に期待されるアプローチおよびスポーツ界だけで社会全体で重層的に課題解決に取り組む重要性が訴えられた。

2 人目の三倉氏からは、日本バスケットボール協会の資料を中心に、女性コーチの割合が低く、その傾向は上位ライセンスに上がるほどみられることが課題としてあげられた。この点については、来田氏も JSPO の資料から同様の課題をあげた。また、三倉氏は実質、現場で活動している女性コーチの割合はライセンスの割合よりも低いことが考えられるとの見解が示された。さらに、三倉氏からは女性コーチを取り巻くバリアとサポートのエコロジカルモデルをもとに、組織レベルからのアプローチにより、社会及び対人間、個人レベルに影響を与え、課題解決につなげることが提案された。

最後の登壇者は、元サッカー日本女子代表選手として第 1、2 回女子 W 杯及びアトランタ五輪に出場し、現役引退後、コーチとしてアンダーカテゴリーのワールドカップで優勝し、2016 年から 2021 年までは「なでしこ Japan」のヘッドコーチとして 2019 年のワールドカップ及び東京オリンピックにて指揮をとられた高倉氏であった。高倉氏からは、A 代表のヘッドコーチに至るまでのパスウェイについて紹介された。そもそも女性プレーヤーの活動環境が整っていない状況から、開拓し、A 代表のヘッドコーチに至るまでの現場の生々しい内容にフロアからは、どよめきや笑いが起こっていた。

シンポジウムのまとめは、コーディネーターより来田氏に託され、来田氏より女性コーチに関するエビデンスの蓄積、女性コーチのあり方や地位向上を図ることにより、女性がコーチになりたいと思えるような環境及び仕組みづくりを研究者がアカデミアとして取り組んでいく必要性が訴えられた。

○運営について

今回のシンポジウムの参加者は 150 名程度であり、3 人組を組み、一つの講演後に「講演を聞いて気づいたことや新たに学んだこと」について参加者同士で共有する時間を設けた。フロアでは、参加者同士の活発なディスカッションがなされた。

参加者の意見を全体で共有できたのは 4 名にとどまったが、全ての参加者がシンポジウム内で発言によるアウトプットをすることにより、良質なインプットを図った。また、会場全体で課題解決に向けて一丸となっていこうとする機運が見られたのは、共有の時間を設けたことによるものであろう。今回の方法は、シンポジウムの一実施方法として今後も活用ができるものと考えられる。

文責：小谷 究

競技スポーツ研究部会 課題 C 研究発表

○研究発表について

＜口頭発表①＞

座長に中村泰介先生（大阪大谷大学）をお迎えし、球技（サッカー）・対人競技（バドミントン）におけるプレー分析系の4演題が発表された。サッカー競技における演題は3つで、測定評価系の演題「サッカーのゲームパフォーマンスデータにおける二値測定の妥当性量的データと質的データの因子構造および因果構造の比較」と、プレー分析系の2演題「サッカーゲームにおける速攻プレー特性の測定」「WE リーグと UEFA 女子チャンピオンズリーグにおける速攻プレー特性の比較」であった。バドミントン競技における演題は「東京2020 オリンピックバドミントン競技における得点経過に着目した勝利ゲームの傾向」であり、プレー分析系は実践的な研究であるため関心も高く、いずれもフロアから質疑があり、議論が盛んに行われた。

＜口頭発表②＞

座長に小西康仁先生（東海大学）をお迎えし、体操競技2演題を含む全4演題が発表された。まず、陸上競技における演題「北海道マラソンにおけるレース終盤のペース低下要因の走力別検討」が発表され、パフォーマンス低下の要因を探る探索的な発表があった。続いて、「近年の段違い平行棒の傾向と今後の展望」「平均台の技術開発に関する発生運動学的研究 跳躍技群の始原論的構造分析」と体操競技の演題が2つ続いた。最後に、「1924年パリ五輪に向かう日本選手団一行の船上でのトレーニングに関する一考察 野口源三郎の著作を手掛かりとして」という歴史研究の発表があり、バラエティに富んだジャンルの発表があり、新鮮なセッションとなった。

＜口頭発表③＞

座長に横山克人先生（札幌国際大学）をお迎えし、球技系の4演題が発表された。「ハンドボールにおける非利き腕のプレーに関する個人戦術力の研究」「国際レベルで活躍した女子バスケットボール選手におけるグルーブ戦術の実践知に関する事例研究 ピックプレイに着目して」の2演題は戦術を対象にした研究で、実践的な示唆に富むものであった。「日本代表男子および女子水球選手の最大牽引力およびパワーの比較と特徴について 電磁ブレーキ式エルゴメータの活用」は体力的要素を扱い、「バスケットボールの速攻時の状況認知に関する基礎的知識の因子構造」は認知機能を扱ったものであり、それぞれ球技アスリートのパフォーマンス構造を様々な角度から分析しており、フロアからの意見も多く盛況であった。

○運営について

特に問題はなく、大会スタッフの皆さまのご尽力によって、スムーズに運営された。

文責：熊野 陽人

競技スポーツ研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	ハイパフォーマンススポーツにおける性差に応じたトレーニング
------------	-------------------------------

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）において、アスリートの個々の特性に応じたトレーニングを行うことが求められる。中でも、生物学的な性差に応じたトレーニングが重要であるが、その科学的知見や効果的なトレーニング方法などは、まだまだ競技スポーツ現場に落とし込まれていない。研究者、指導者、研究者と指導者の二足の草鞋を履く方など、様々な立場の方をお招きし、性差に応じたトレーニングあり方について考えることを本シンポジウムの目的とした。

当日は、70~80名の参加者があり、盛況なセッションとなった。コーディネーターとして、越田専太郎先生（了徳寺大学）、東浦拓郎先生（亜細亜大学）のお二方の進行の下、4名のシンポジストにご登壇いただいた。最初に、須永美歌子先生（日本体育大学）に、「月経周期が運動時生理反応に与える影響」というテーマで、数多くの女性アスリートに関するエビデンスを基にお話しいただいた。続いて、牧野講平先生（森永製菓 in トレーニングラボ）に、「トップアスリートにおける性別特性が障害やパフォーマンスに及ぼす影響」というテーマで、女性トップアスリートを数々ご指導された経験から導き出される事実をお話しいただいた。3人目に、川上優子先生（キャノンアスリートクラブ九州）に、「女性アスリートにおけるトレーニングのマネジメントの実際」というテーマで、ご自身のトップアスリートとしての経験、現在の実業団駅伝チーム監督としての経験をお話しいただいた。最後に、熊野陽人先生（関西福祉大学）に、「性差を踏まえたジャンプトレーニング」というテーマで、特に身体的な性差が影響するジャンプパフォーマンスのトレーニングの実際についてお話しいただいた。その後のディスカッションでは、コーディネーターからの指定質問として、「月経周期がコンディションに与える影響とトレーニング計画・マネジメント・コンディショニングの最適化」について、それぞれのシンポジストからお話をいただき、その後、フロアからの質疑応答に移った。

○運営について

特に問題はなく、大会スタッフの皆さまのご尽力によって、スムーズに運営された。

文責：熊野 陽人

生涯スポーツ研究部会 課題 A 研究発表

○研究発表について

生涯スポーツ研究部会、課題 A では「共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか」というテーマの下、合計 7 題の口頭発表が行われた。

口頭発表①では、50 名程度の参加者があった。1 題目の「中学校運動部活動の地域移行における学校及び地域関係者の認識と課題」では、学校の管理職や PTA 役員に対して、インタビュー調査を実施し子どもを主語に据え円滑な意向のあり方について報告があった。質疑応答では、対象者の属性について質問が多くあった。2 題目の「運動部活動における学校と地域スポーツ団体との連携に関する研究」では、学校がどのように運動部活動のパートナーを探すのかという点について、事例分析による調査を実施し報告があった。質疑では、成功事例だけではなく事例の整理について意見交換があった。3 題目の「運動部活動のステークホルダー間の関係構造に関する検討」では、運動部活動に関わるレビュー研究を通してシステムの存在を示す研究の報告があった。質疑応答では、ステークホルダーの分類について質問があった。4 題目の「部活動における教師の成長過程とその影響要因に関する研究」では、部活動が負担ばかりではなく、教師の学びとなっている部分に着目しインタビュー調査の報告があった。質疑応答では、プラス面での成長過程に限定するののかという点について意見交換がなされた。総じて、本会場は、運動部活動に関する発表が多く、生涯スポーツ施策と協働システムという観点から、非常に活発な議論が交わされた。

口頭発表②では、30 名程度の参加者があった。1 題目の「共生社会ホストタウンと公共スポーツ施設管理」では、共生社会ホストタウンに登録されている障害者優先スポーツ施設等へ郵送法による調査を実施し、外部環境と内部特性との関連から、4 類型別の組織有効性についての報告があった。質疑応答では、共生社会ホストタウンの中での課題などについての質問があった。2 題目の「障害者の地域参加と共生的スポーツコミュニティへの参加との関係」では、質問紙法と補足的に実施された面接法の結果より、障害者の共生的スポーツコミュニティの参加状況と個々の参加地域との関連についての報告があった。質疑応答では、本研究における共生的なスポーツコミュニティの定義や調査対象の障害の程度などについての意見交換が行われた。3 題目の「障害者および障害者スポーツに対する意識の変化に関する研究」では、2014 年～2021 年の期間においてインターネットを利用したアンケート調査の結果を基に、障害者や障害者スポーツに対する意識が徐々にポジティブに変化している傾向があることが報告された。質疑応答では、社会状況の変化に伴う質問項目の見直しやこれからの障害者スポーツの展望と期待、理解・推進のためのアプローチなどについての意見交換がなされた。以上 3 題の研究では、調査による研究発表が行われ、共生社会の実現に向けて、スポーツ施策の有効性と今後の展望や課題等について、積極的な議論が交わされた。

文責：内田 匡輔

生涯スポーツ研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	協働システムの現状と課題から今後を考える ー “支えるスポーツ” が果たす役割ー
------------	---

学会大会 1 日目、本シンポジウムは定刻通り開催された。まず、コーディネータである後藤光将氏（明治大学）から、昨年度、パラダイムチェンジの必要性和スポーツの見方を変える、広げる必要が挙げられ、「する」だけでなく「みる」、「支える」という視点から、本年度はスポーツボランティアの役割や現状、課題について協議することが確認された。

この趣旨を踏まえ、まず澁谷茂樹氏（笹川スポーツ財団）から「スポーツボランティアの現場について」講演をいただいた。澁谷氏から、スポーツボランティアはイベントの運営を通して発展し、動員から公募へ変革しつつあり、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会は、コロナ禍による縮小はあったものの障害当事者のボランティア実施など Diversity&Inclusion の促進といった、ソフトレガシーにつながる成果もみられたと報告があった。同時に、新規のボランティアが入りにくい現状や、前例踏襲といった問題点も浮かび上がった。

次に、田引俊和氏（北陸学院大学）から「スペシャルオリンピックス（以降 SO）のスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題」について講演をいただいた。田引氏からは、SO のほとんど全てをボランティアが担っていることや、47 都道府県に整備され、経験と研修を重ねた認定コーチとボランティアの二層で構成され、認定コーチのボランティアは、選手の成長を通して得られる充実感に特徴があることも報告された。しかし、参加者の多様なスポーツ要求や、スポーツ参加以上の負荷を求める知的障害者に応えきれていないという課題を挙げた。

最後に、二宮雅也氏（文教大学）から「共生社会とスポーツボランティア」について講演をいただいた。二宮氏から、スポーツボランティアの最大の面白さは、得られる精神的充足にあることが報告された。中でも活動を行う中で、利己的・利他的であった視点が、社会的な視点へと変化し楽しさと同時に課題に気づくという特徴も報告された。こういった変化が共感を生成し共生社会の入り口に立つことにつながる一方で、共感が生まれにくい場合をどう考えるのかという課題があることが明らかになった。

3 名の講演終了後に、フロアとの質疑応答が行われた。スポーツボランティアは、広義として捉えるべきという意見に対して、イベントを支えるボランティアは性質が違い、出入り自由なボランティアもある一方で抜けにくいボランティアもあるなど、スポーツボランティアをめぐる意見交換がなされた。

本シンポジウムを振り返り、スポーツボランティアが果たす役割から、今後の生涯スポーツのあり方について登壇者に後藤氏が意見を求めた。澁谷氏からは、スポーツボランティアはスポーツにとどまらず活動しているが、支え手となる人たちの交代が進まず高齢化している現実を挙げ、地域社会の担い手発掘のために、スポーツ単体ではないイベントの必要性に言及した。田引氏からは、知的障害のある人のスポーツそのものの特徴に触れ、緩やかなスポーツだけではない幅の広い生涯スポーツを行うことの必要性を挙げた。特別扱いしないスポーツのあり方には、まだまだ時間がかかるとまとめた。二宮氏からは、ボランティアという言葉自体の存在を疑問視し、自由参加にも関わらず強制感が否めない現実を挙げた。これまでとは異なる価値観からボランティアを論じる必要性について触れ、多数派中心の価値からの転換点にあるとまとめた。

最後にコーディネーターの後藤氏は、本テーマを通じ共生社会と協働システムのあり方について、ボランティアの定義は多岐にわたることを挙げ、今後の共生社会、生涯スポーツを考えるにあたり、スポーツボランティアは必要な存在であり、自発的な参加による自己実現の場となれば、より共生社会の実現につながると可能性を示唆した。協働システムの構築に向け必要な課題が見つかったようにも思うと述べ、本シンポジウムを閉会した。

文責：内田 匡輔

生涯スポーツ研究部会 課題 B 研究発表

○研究発表について

生涯スポーツ研究部会課題 B では、「生涯スポーツは・人・地域社会・産業といかに関連するか」というテーマが設定された。口頭発表①では、3 題の発表がなされ、80 名程度の参加者があった。演題 B-01 の「子どもの安全なスポーツ環境構築に向けた地域スポーツの現状と課題ースポーツ少年団指導者の救急対応に関する実態調査からー」では、スポーツ少年団の指導者に対して、救急対応の経験や救急対応に対する考え等についての質問紙調査の結果の報告がなされた。質疑では、指導者の救急対応に対する意識や救急救命士の資格との関係などの質問がなされた。演題 B-02 の「e スポーツオンラインチームプレーが引き出すオキシトシン分泌と友好性」では、e スポーツの行い方によって、オキシトシンの分泌が異なることが明らかになった旨の報告がなされた。質疑では、なぜ、行い方の違いによりオキシトシンの分泌が異なるのか、そのメカニズムに関する質問等がなされた。演題 B-03 の「e スポーツプレー時の異なる座位姿勢がもたらす気分と精神作業特性」では、e スポーツ時の座位姿勢がプレーヤーの気分になどのように影響を及ぼすのかを明らかにした旨の報告がなされた。質疑では、測定の方法に関するものや、座位姿勢が気分の変化を生み出すメカニズムに関する質問等がなされた。3 題ともフロアーからたくさんの質問があり、活発な議論が展開された。多くの示唆に富む研究発表であった。

口頭発表②では演題 B-04 の「身体障害児・者を持つ母親のソーシャルサポート向上を目指した親子運動プログラムが運動継続に対する見込み感に与える効果〜」では、運動プログラムによる違いに関してや年齢による工夫について議論がなされた。演題 B-05 の「地域高齢者のためのスマートシューズによる健康・見守り支援クラウドシステムの検討」では、デバイスによる差や応答の少ない対象者に対する対応が議論された。演題 B-06 の「F リーグ共同開催試合の集客事業に参画した学生の学び」では事業としての成果や学生の自主性の引き出し方などについて議論された。また、3 演題の発表のうち 1 演題が発表者の都合によりオンラインで行われた。演題がアダプテッドスポーツ、介護予防健康づくり・測定評価、体育経営と幅広い分野から構成されていたため、聴講者から一般的な質問が多かったと感じた。これは、領域横断セッションの試みならではの興味深さであったと考えられる。しかし、各演題の専門性が離れていたため専門的なディスカッションに発展しづらい側面もあると感じられた。

○運営について

教室担当のスタッフが質問者へのマイクの引き渡し、発表者のプレゼンテーション補助等、精力的に対応を行ってくれたため、円滑に演題を進めることができた。オンラインの演題に関しては、配信側の環境設定に大きく影響をうけるため、今後の工夫が必要と感じた。

文責：成瀬 和弥（口頭発表①）、館 俊樹（口頭発表②）

生涯スポーツ研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	子どもたちの Well-Being とスポーツ —政策・産業・そして遊び—
------------	--

シンポジウムは予定時刻に開始された。まずコーディネーターの林洋輔氏（大阪教育大学）より開会あいさつならびにフロアへの出席御礼、さらに本シンポジウムの趣旨説明が行われた上でシンポジスト紹介ならびに式次第が説明された。

シンポジスト登壇のうち、まず松田恵示氏（東京学芸大学）より「遊びの精神から見た子どもの Well-Being の実現とスポーツ」と題する講演が行われた。本講演は遊びを語るうえでの語り方から説き起こされるとともに、OECD で現在までに行われた議論にもとづく Well-Being の実質についての現況、さらに遊戯論の古典に位置付けられるホイジンガやカイヨワの業績にも言及がなされた。そして講演タイトル通りに総論の観点から子どもたちの遊びから Well-Being への道のりについて講演が果たされた。

続いて、宮本幸子氏（笹川スポーツ財団）より、「子どものスポーツにおける格差と Well-Being—研究上の課題を中心に—」と題する講演が行なわれた。昨今に社会問題化が指摘されている「スポーツ格差」の議論を念頭に置きつつ、子どもたちにおけるスポーツへの参画がどのように推移し、また現在はどうのような問題を抱えているのかについて直近のデータを駆使しながら問題の所在と現状、そして課題が明らかにされた。

さらに春日晃章氏（岐阜大学）より「幼児期から発現する身体発達の二極化を防ぐ施策の提案—幼少期の Well-Being の保障のために—」と題して講演が行なわれた。春日氏は幼稚園、保育園といった保育の現場にも参加することで数多の成功事例を保持する研究者であるが、今回の講演でも自治体との協働を踏まえた幼児期の運動発達、および身体活動の現状についての事例とデータが示された。また併せて保育の現場から「子どもたちの Well-Being」の実現に資する示唆が示された。

上記の 3 名による講演が終了後、ただちにフロアとの質疑応答が開始された。満席となったフロアからはシンポジストに対して Well-Being の捉え方や向後に向けた方策などの質問、そしてシンポジストからの応答といった意見交換が見られた。時間の関係から質疑応答数は若干を余儀なくされたものの、次年度に向けた弾みとなる討議が行なわれたといえる。

そして質疑応答終了後に総括的コメントとして、シンポジスト 3 名からそれぞれ講演の小括ならびに以後に向けて「子どもたち」「Well-Being」そして「スポーツ」の三者をどのように関連付けて考えていけばよいのかについて示唆と見解が示された。

閉会あいさつとしてコーディネーターの林氏より、Well-Being 研究が深まりを見せるなかでフロアの参加者の研究成果もまた本シンポジウムの問題意識を発展させることに大きな貢献をなすこと、さらに今後も議論を通じて発展的に Well-Being をめぐる議論の進捗が見込まれることへの期待が述べられ、シンポジストへの拍手をもってシンポジウムは成功裡に終幕した。

補遺として、予期された Zoom トラブルが接続時に若干見られたが、サポートスタッフ各位の適切な対応により各シンポジストの講演は無事に最後まで行なわれた。

文責 林 洋輔

生涯スポーツ研究部会 課題 C 研究発表

○研究発表について

口頭発表①には約 40 名の参加者が来場した。演題 C-01 では、中学校・高校における受傷リスクには、全国大会・県大会出場という要因が関連することが示されていた。演題 C-02 では、総合大学などの大規模の大学と比べて学部数が少ない小規模の大学では、サークル活動への援助は少ないことが示されており、これらに属さない一般学生への援助も必要であると提言されていた。演題 C-03 では、ライフステージの変化に伴う運動の離脱から運動実施の欲求が充足されるまでの過程をキャリアトランジション論に基づいて考察されていた。演題 C-04 では、2018 年では 1998 年に比べて、働く女性が増えているものの、運動実施率が増加している傾向が示されていた。演題 C-05 では、フリーダムコラボレーションダンスエクササイズに、ラインを用いた伴走型サポートシステムを導入した運動プログラムを用いることで、高い継続性の意欲が認められることが示されていた。上位課題に向けてのテーマ別研究発表ということで、小学生から大学生までの障害の状況や環境の問題、働き世代・子育て世代における運動実施の行動変容から実施率や実際の現場の話まで、あらゆるライフステージの現況がそれぞれ分野横断的に発表されていたが、やはり専門領域外の内容だと質疑応答や議論がしにくいのではないかと感じた。議論が活発になるような工夫が必要かもしれない。

次に口頭発表②に関して、まず大前提として、本研究部会の課題 C は「人生 100 年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか」であり、この問いに応えた 5 つの口頭発表の特徴をキーワード的にとりあげてみると、高齢者、笑い、実施率、ボランティア、支援、オリパラレガシーということになる。口頭発表②の演題は、いずれも「スポーツ権を保障」するために各々の議論を深めるための重要な視点を提示する研究報告であった。同会場の来場者は 55～60 名であった。演題 C-06 は、高齢者 46 名を対象としたスポーツウェルネス吹矢の教室型の参加実施効果を主観的運動強度、二次元気分尺度、生きがい尺度、自由記述の 4 つの手法を使って、この吹矢運動のポジティブ感情が生まれることを明らかにした報告であった。演題 C-07 では、吉本興業と近畿大学の協働で進められている「笑うスポーツ」プロジェクトの事例を検証し、スポーツの楽しさを生み出す有益な事例であることを報告であった。演題 C-08 は、SSF 笹川スポーツ財団スポーツ・ライフデータの二次分析から「する」スポーツ「する・みる」スポーツ「する・みる・ささえる」スポーツ別の重層的实施率を算出し、スポーツの実施者層の再構造化を試みた報告であった。演題 C-09 は、スポーツボランティア研究の系統的レビューを通じて、ボランティアを「する-受ける」の関係から探究するアプローチ（関係論）の必要性を提言した報告であった。演題 C-10 は、東京 2020+1 オリパラの開催は、運動・スポーツ実践を始めさせることへ寄与したのか、を量的に明らかにしたもので、オリパラ終了 6 ヶ月後の調査から得られた結果の報告であった。質疑応答では、いずれの演題も 2 名から 3 名の質問があった。演者と質問者とのやりとりを通じて、演題 C-06 の高齢者実施層と演題 C-10 の運動・スポーツ実践開始層は、量的データとして貴重なターゲット層であること、と引き続き、このターゲット層に対してインタビュー手法などを用いた質的データを収集できる対象であることを確認することができた。また、演題 C-07 の笑いのスポーツ、演題 C-08 のスポーツ実施者層の再構造化、演題 C-09 のボランティア研究における関係論アプローチは、いずれもこれまでの研究枠組みの固定化に気づかせ、新たな研究アプローチの視点を提示してくれたものであることが確認できた。以上の 5 名の研究発表と質疑応答から得られた気づきは、領域横断型であったことの成果ではないかと考える。

○運営について

ドアマン 1 人、タイムキーパー 1 人、マイク係 1 人と座長のスタッフ構成でセッションが行われた。また、それぞれの発表者は 10 分前までには発表用の PC へのデータセットを完

了できており、余裕を持って発表準備ができたと思う。感染対策に関して、収容人数を定員の半分に制限して、手指消毒、マスク着用条件下での入場であった。席も隣り合わせて座らないように、シールを活用して離れて座るようになっていた。本セッションにおいては、充足率 20%くらいだったので特に密になるようなものではなかった。質問をする人に対しては、マイクを使用することを促していたが、マイクの本数に限りがあり、質問者にマイクを届けるのに時間がかかっていたように思われる。また、ペーパーレベルの配布資料がなかったためスクリーンや天井吊り下げ式ディスプレイを見ながら研究発表を聞くことになったが、中には自前の web サイトへ配布資料をアップロードしたり、スクリーンに提示するスタイルに QR コードを提示し、それをスマホで読み取ってダウンロードできるような配布手続きをとっている発表者がいた。発表前に QR コードを提示し、スマホでダウンロードした資料を PC やタブレット端末で読みながら発表を聞くということも可能であろうと思われる。

○その他

5 つの研究部会のテーマ別研究発表・シンポジウムが同時刻に行われるために、参加したいセッションが重なってしまうとの声もあった。

文責：赤澤 暢彦（口頭発表①）、水上 博司（口頭発表②）

生涯スポーツ研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点（その2） —国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて—
------------	--

生涯スポーツ研究部会課題Cのシンポジウムは、2号館1階11号教室の会場に50名程度の参加者を迎えて行われた。シンポジウムの開始に際し、司会の上野より本シンポジウムの主旨説明が行われた。そこでは、1) 本シンポジウムは国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて、国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点を確認すること、2) 本年のシンポジウムは3年計画の2年目にあたり、障がい者、元アスリート、みんなの運動・スポーツ参加の現状および問題点を確認すること、3) 昨年のシンポジウムでは、若年世代、中年世代、女性の運動・スポーツ参加の現状および問題点を確認したことについて簡単に説明が行われた。その後、シンポジストの紹介が行われ、各シンポジストの発表に移った。

一人目のシンポジストである太田澄人氏（長野県障がい者福祉センタースポーツ課係長）からは、「障がい者のスポーツ参加の現状と問題把握」と題する発表を頂いた。発表では、障がい者のスポーツ実施率が健常者と比較して低い水準にあることを示すデータを用いつつ、障がい者のスポーツ参加の課題には「健常者のスポーツ参加の課題だけでなく、障がいゆえの課題」が積み重なることを説明された。また障がいという言葉が表す領域が広い上に、障がいの状態は個々人で様々であることから対応が難しいこと、さらには地域格差や情報伝達の難しさなどの問題が存在することを指摘しつつ、学校や施設を通じて障がい者との活動の場をつくり、健常者と障がい者の繋がりを大事にする必要があるなどのご意見を頂いた。

二人目のシンポジストである筒井香氏（株式会社 BorderLeSS 代表取締役社長）は、「元アスリートのスポーツ参加（キャリアサポート）の現状と問題把握」と題して発表された。筒井氏はオリンピックを対象とした調査結果をもとに自らが関わった競技を継続している元選手が18%に留まっていることを紹介し、普段勝利やパフォーマンス向上を目指して活動しているアスリートにとって、スポーツと言えば競技スポーツとなってしまうことから、彼らのなかでスポーツを再定義する必要があると指摘した。その上で、元アスリートのキャリア形成に関してはデュアルキャリアという考え方が必要であり、現役時代から他種目のアスリートとのつながりや気晴らしを通じたパフォーマンス向上に繋がる活動として生涯スポーツを位置づけることで、元アスリートのスポーツ参加を促進できる他、彼らの競技引退にも肯定的な影響を認める可能性が示された。

三人目のシンポジストである仲野隆士氏（仙台大学体育学部体育学科教授）からは「みんなのスポーツ参加の現状と問題把握：ニュースポーツ・ユニバーサルスポーツに着目して」と題する発表を頂いた。まず仲野氏はニュースポーツ、ユニバーサルスポーツ、ゆるスポーツはルールの制度化と技術レベルの程度の二軸に基づく分類により、サッカーや野球などのいわゆるフォーマルなスポーツとあそびの間に、セミフォーマルなスポーツとして位置づけられることを説明された。そして運動嫌いなどの問題への対処やオリンピックで高まったスポーツへの関心を行動変容に結びつける上で、能力や性別に関わらず実施しやすいニュースポーツが果たす役割について指摘された。最後に学校体育等を通じてニュースポーツを指導できる指導者の養成、多くの施設に用具を準備できる予算の充実が必要であるとの意見を述べられた。

以上3名のシンポジストの発表に対して、フロアからデータの信頼性や学習指導要領との関係等に関する質問があり、それぞれ各シンポジストが適切に説明された。最後に、国民のスポーツ権を保障する上で、ニュースポーツやユニバーサルスポーツが体力や能力、人数の問題等、スポーツ参加を躊躇させる壁を越える上で大きなヒントになることを全体で確認し、シンポジウムが閉じられた。

○運営について

シンポジウム参加者数に対して教室のサイズは過不足なく適度な広さであった。また音響機器や映写設備についてもスムーズに稼働し参加者が発表内容を聞き漏らす可能性はなかったほか、質疑応答の際にはマイクパーソンが速やかに対応し、時間のロスも認められなかった。天候の急変により、シンポジウムの途中で天井の空調設備から結露した水滴が落ちてくるハプニングがあったが、会の進行には特に影響はなかった。

他方、配付資料に関して、今回は各シンポジストが予め印刷したものを配布するこれまで通りの形で実施した。しかしオンライン化が進む現在にあって、紙ベースの資料配付は見直す時期であると思われる。クラウド上に資料を示し、各参加者が適宜ダウンロードする体制を配布資料についても実施できれば、参加者、発表者共にメリットがあると考えられた。

文責：上野 耕平

健康福祉研究部会 課題 A 研究発表

○研究発表について

口頭発表①では、野村氏ほかによる「新型コロナウイルス感染症流行下における産後女性の身体活動量は健康関連 QOL に影響するか」、松崎氏ほかによる「発散型の運動プログラムがストレスや脳疲労に及ぼす効果」、菊地氏ほかによる「スキップ動作のイメージに伴う気分と身体感覚に関する一考察」の発表が行われた。野村氏の発表では、コロナ過における産後女性の身体活動と QOL の関連性が報告された。コロナ過に伴う移動制限や Stay home 等により、身体活動の低下が生じていることは周知の事実であり、かつ、よりサポートが必要な集団（産後女性など）を対象とした研究が報告されたことにより、当該テーマの重要性や課題が共有された。松崎氏の発表では、これまで取り組まれている運動プログラムの紹介および脳疲労へ及ぼす影響が報告された。特に、対面レッスンと自宅レッスンを組み合わせて提供していることは今後の介入研究への示唆に富む内容であった。菊地氏の発表では、スキップ動作中の心理状態に関する報告がなされた。非常に身近な動作であるスキップに関する研究はこれまで多くなく、気分も高まる動作として、公衆衛生学的な可能性を感じる発表であった。

口頭発表②では、中原氏ほかによる「大学入学時の体力レベル別にみた精神的健康度の変化」、高橋氏ほかによる「産官学民共同の健幸プロジェクト『ジュビロ飯』に関する一考察」、多田氏による「Handbuch Gesundheitssport (2006) に示されたドイツのスポーツ健康科学研究による運動と健康増進・体力向上との関係についての研究的アプローチ」の発表が行われた。中原氏の発表では、コロナ禍の大学生を対象とした縦断的な調査研究を通じて分析が行われた精神的健康度の変化から、大学生が入学時に一定の体力レベルを有していることの重要性が実証的に示された。高橋氏からは、食とスポーツによる地域の健康向上と経済活性化を目指す産官学民の共同プロジェクトのプロセスが詳細に報告され、その成果と課題が、当事者性を有するケーススタディとして示された。多田氏からは、ドイツにおける運動と健康増進・体力向上との関係に対するドイツのスポーツ科学研究のアプローチのあり様が『健康スポーツ第 2 版』（2006 年）というハンドブックの分析から考察され、多くの点で共通の課題を抱える日独の比較研究への展望が示された。いずれの発表も、健康福祉研究部会課題 A のテーマである「健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか」に迫る内容であり、テーマに関する今後の議論の深まりが期待できるものとなった。

○運営について

口頭発表①には約 40 名、口頭発表②には約 20 名が参加し、参加者からも積極的に質問がなされ、領域横断的なディスカッションが行われた。口頭発表②では全体を通じてトラブルはなく、円滑に運営することができたが、口頭発表①ではマイクのハウリングがあったり、教室後方では音声が聞きにくかったりなど、一部、運営上の不具合があることが確認された。事前に、教室の音声チェックなどを入念に実施した方が良いように感じた。

○その他

テーマ別研究発表のため、「健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか」という問いのもと、各発表者と討議を進める必要を感じた。どの程度、各課題のテーマに迫るディスカッションをすべきかどうかは座長として判断の難しいところであったが、少なくともセッション冒頭で部会のテーマについて座長から説明を加えた方が良いと感じた。また、セッション終了後も会場では発表者と参加者の情報交換が行われており、対面による開催の意義を感じた。

文責：城所 哲宏（口頭発表①）、朝倉 雅史（口頭発表②）

健康福祉研究部会 課題 A シンポジウム

シンポジウムのテーマ	ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方 —「女」を生きることと健康・スポーツ—
------------	---

本シンポジウムでは、前年度に引き続き、多様なライフスタイルやライフコースを念頭に、ジェンダー／セックスとしての「女」のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてた。本年度は特に学校教育や部活動の現状とその課題を明確化することに重きを置き、以下、三名のシンポジストとジェンダー研究者である山口理恵子会員（城西大学）を指定討論者に招いた。なお、参加者は 150 名程度であった。

運動生理学を専門とする須永美歌子会員（日本体育大学）からは、性差を考慮したコンディショニング管理というテーマで発表していただき、女性アスリートに多い健康障害、女性ホルモンの変化とコンディショニング、女性のヘルスリテラシー向上の必要性について議論が展開された。ホルモンバランスの周期的変化によって、コンディショニングのあり方をアップデートする必要があるという主張、さらに女性の身体に関する最新の知識と対処法（ヘルスリテラシー）を発信していく上で、講義と実技を併せ持った保健体育という科目が大きな可能性を秘めているという提言もなされた。

続いて中野貴博会員（中京大学）からは、発育発達分野の立場から子どもの運動実施及び体力・運動能力変化の性差というテーマで、量的調査結果の分析を元に発表していただいた。男児と比較すると、女児の場合には汗をかくことやしんどくて疲れること、さらに勝敗にこだわるような運動を女児が忌避しやすいことなどがデータから示された。ここから、女児に対しては高学年で運動への嫌悪感を与えるような活動を避けること、運動有能感を育むこと、目指すべき価値の再考といった課題が提示された。

三人目に、保健体育科教育分野を専門とする高橋修一会員（日本女子体育大学）から、学習指導要領の変遷と、OECD による教育プロジェクト“Education2030”について発表していただいた。近年の学習指導要領では、年齢や性別及び障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方や関わり方を共有すること、さらには共生社会の実現に繋がる学習の機会として体育が捉えられていることなどが示された。また、体育において障害や特別なニーズを持つ学生への対応、そしてジェンダーに関するガイドラインの有無が問われるなど、世界的な潮流についても変化が見て取れるとのことだった。

その後、指定討論者の山口会員から、シンポジストに質問をしていただいた。須永氏には、性の多面性が強調される今日、「女」の生物学的特徴を強調することは性別二元論を強化するのではないかという問いが投げかけられた。須永氏からは、現在、自然科学分野でも性スペクトラムの考え方が出てきており、テストステロン濃度だけでアスリートの性差を区別することへの疑念も浮上するなど、大きな過渡期にあるとの応答があった。中野氏には、政策的な議論の中で「女児が運動しない」という前提が常に置かれる傾向にあることへの意見が求められた。これに対して、男女間でプロスポーツのプレゼンスや賞金の違いといった社会的な影響が存在するため、運動が好き嫌いに問わず、運動を通して人を成長させるという価値に立脚した体育・スポーツ教育のあり方も改めて模索する必要があるとの応答があった。高橋氏には性教育の現状とその問題点、学校教育現場の教員の対応について質問がなされた。高橋氏からは、男女共習といっても地域ごとに相当なバラつきがあり、また男女共習といっても全てを同じ内容で実施するというだけでなく様々な工夫を凝らす必要があるとの応答があった。

フロアからは、今回のシンポジウムでは平均的な「女」、規範的に正しい「女」を健康や体力といった点で実体化しようとしているのではないかという疑問が発せられた。これに対し山口氏から、個の多様性が必要という意見には全く同意するが、実際には性差カテゴリーが社会で強固に共有され、そこに投げ込まれている以上、一足飛びに個の多様性を称揚するのではなく、そうしたカテゴリーをめぐる言説に潜む権力や価値観の問題を、丁寧に解き

ほぐしていくことが必要ではないかとの応答があった。

前年度に引き続き、学際的な雰囲気の中で議論を展開することができた。明確な着地点へと収斂するシンポジウムにはならなかったが、多様な学問的背景を持つ論者から「女」をめぐって複数の論点が示され、実践的な課題についても提言がなされたという意味で、意義深いものになった。

○運営について

同時時間帯に多数のシンポジウムが開催されるため、選択せざるを得ない状態にある。その一方でオンデマンド配信のコンテンツは限られている。

文責：高尾 将幸

健康福祉研究部会 課題 B 研究発表

○研究発表について

大会 2 日目 9 月 1 日の朝 9 時より開始され、3 演題の発表があった。発表タイトルは、それぞれ「段差跨ぎ動作時における保守的な衝突回避戦略と動作の多様性の関係」、「高齢者のダンス活動がもたらす心理・社会的フレイルの予防効果と活動継続動機との関連」、「高齢者を対象とした移動物体との衝突予測評価」であった。3 名の発表者の所属専門領域は、介護予防・健康づくりが 2 名、体育心理が 1 名であった。座長は樋口貴広（東京都立大学）が担当した。発表者やスタッフを除く参加者数は、約 30 名であった。

○運営について

定刻通りに開始・終了することができ、大きな問題を生じることなく運営することができた。3 演題ともに、発表時間 10 分、質疑応答 5 分として発表を行った。各発表に対する質疑も多く出たため、充実した質疑応答の時間となった。

○その他

今年度の研究発表数 3 演題は、昨年度の研究発表数 9 演題と比べて少なかった。昨年度は、「体力・身体活動と認知機能」に関する発表 3、「心理・社会的要因からみた運動・認知」に関する発表 2、「認知症予防」に関する発表 1、「運動・認知機能の測定評価」に関する発表 4 という構成だった。これに対して本年度は「心理・社会的要因からみた運動・認知」に関する発表 1、「運動・認知機能の測定評価」に関する発表 2 という構成だった。この結果から、「体力・身体活動と認知機能」や「心理・社会的要因からみた運動・認知」に関する研究発表の場として、本課題のセクションが必ずしもフィットしないと判断された可能性がある。こうした点を次年度に向けた課題として、発表数の増加に努めたい。

文責：樋口 貴広

健康福祉研究部会 課題 B シンポジウム

シンポジウムのテーマ	運動から認知へ、認知から運動へ
------------	-----------------

本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がいかに関与すべきなのかを考える機会として企画され、大会 2 日目午前（10:30～12:20）に開催された。本年度は、運動機能と認知機能の相互関係性にまつわる様々な体育領域での話題提供を通して、運動と認知の双方向性への理解を深めることを目指した。

話題提供では、3 名の先生方にご発表いただいた。辻大士先生（筑波大学）からは「運動・スポーツが盛んな地域に暮らすだけで認知機能が維持される！？」という演題で、運動・身体活動の認知症予防効果や、地域づくりとして運動実施の環境・機会を整備する重要性についてご発表いただいた。古和久朋先生（神戸大学）からは「認知症予防を目指した多因子介入の現状と課題」という演題で、認知症治療薬や予防研究の動向、運動を含めた多因子介入の取り組みを紹介いただき、多因子介入の課題としてプログラムの持続性が挙げられた。田中美吏先生（武庫川女子大学）からは「心理的ストレス状況下での認知と運動」という演題で、注意・思考に関する諸理論や、ストレス下での注意・思考が運動に及ぼす影響について研究紹介があり、運動時の注意・思考に関する提案をいただいた。

指定討論では、岩沼聡一郎先生（帝京科学大学）からご自身のアダプテッド・スポーツに関する研究を紹介いただいた後、3 名の先生方に対し、運動・スポーツの内容をどのように工夫しているか、心理的ストレスの良い側面、心理的ストレスを減らす関わり方等についてご質問いただいた。シンポジウムの最後に 10 分程度の総合討議を設けた。

コーディネーターは細谷洋子先生（東洋大学）と木伏紅緒（神戸大学）が担当した。発表者やスタッフを除いた参加者数は約 100 名と予想より多くの方にご参加いただき、補助席を追加していただく状況であった。

○運営について

シンポジウム当日は定刻通りに開始・終了することができ、大きな問題も生じることなく運営できた。若干の時間の誤差はあったものの、趣旨説明（5 分）、話題提供（25 分×3）、指定討論（15 分）、総合討議（10 分）として運営した。話題提供用の発表スライドと指定討論の質問を事前に共有していたことが、円滑な運営につながったのかもしれない。

○その他

昨年のシンポジウム「認知機能改善のための身体活動の在り方」の平均参加者数は 110 名程度であったため、今年度の参加人数は現地開催でありながら昨年度とほぼ同等であったといえる。認知機能の改善というテーマは依然として多くの先生方にとって関心の高いテーマであることがうかがえた。ただし、総合討議では、質問が少々出にくい状況であり、コーディネーターから質問する場面があったため、質問しやすい環境づくりが今後の課題である。

文責：木伏 紅緒

健康福祉研究部会 課題 C 研究発表

○研究発表について

口頭発表①では、子どもの発育、発達の視点から4題の発表があった。いずれも、オンライン化やコロナ禍の不活動およびその影響について調査・評価する発表であった。「生活環境下における受光と主観的睡眠状況との関係」では、受光と睡眠状況との関係について、実験室環境下ではなく、生活環境下で調査がなされ、睡眠問題あり群となし群とで高照度受光時間の比較検討がなされた。「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴う臨時休校・外出自粛要請期間中に体調不良を訴えた児童の生活習慣は著しく乱れていた」では、臨時休校・外出自粛要請期間中に体調不良を訴えた児童の生活習慣特性を明らかにする調査がなされ、5033名の小学生保護者に対してアンケート調査が実施された。「コロナ禍における児童の生活習慣が心理・社会的側面に与える影響」では、児童の生活習慣と心理・社会的側面との関係について、朝食摂取やスクリーンタイムについての調査結果をもとにした検討がなされた。「コロナ禍における児童の運動頻度および運動時間が心理・社会的側面に及ぼす影響」では、児童の運動頻度及び運動時間に着目した調査がなされていた。

口頭発表②では、介護予防の視点から4題の発表があった。「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下における生活習慣及び健康状態に関する研究」では、コロナ禍になり、特に対象女性において活動量や筋量が顕著に低下したことが報告された。また、コロナ禍では対面活動実施に難しさがあることが指摘された。「遠隔健康支援のためのダンスプログラムの開発と効果測定」では、映像コンテンツ（運動プログラム）を作成し、それが心身へ与える効果について発表された。対面活動に制限のあるコロナ禍でも実施できるプログラムの開発を目指していた。「吉中式マルチ音楽体操の実践」では、音楽に合わせて行う運動プログラムの紹介がなされた。実施者を増やすためには、指導するスタッフの養成がカギとなることが報告された。「精神科リハビリテーションにおける歩行動作改善のための運動プログラムの検討」では、2種類のダンス（運動プログラム）を精神疾患患者がそれぞれ行ったところ、スクワッド系の運動プログラムでは歩行動作改善に影響を与えたことが示された。

○運営について

対面での開催となった今年度は、昨年以上に活発な議論がなされた。大規模教室での開催であったため、質疑応答の際にマイクを運ぶ補助者に苦勞させてしまった。スタンドマイクを利用し、そこに質問者が並ぶことを強調する必要があった点が反省点である。

○その他

今後の課題として次の3点を挙げておきたい。（1）領域横断での発表が、専門領域での研究方法を身につける段階にある大学院生にとってふさわしい発表の場であるのかどうか、議論の必要性を感じた。そして、もしもそのような機能を領域横断で担っていくべきであるなら、発表時間やディスカッションの方法を改良していく必要があるように思われた。（2）口頭発表①では「測定評価」および「発育発達」、口頭発表②ではすべて「介護予防」からの発表ということで、発表領域が限定されていた。そのため、質問も、同領域あるいは運動生理学、バイオメカニクスの各領域の方々からのものであり、領域横断というより専門領域での発表という印象が強かった。発表領域を広げる工夫が必要かもしれない。（3）コロナ禍も含む不活動やオンライン化を主題とした本グループであったが、発表の傾向として、「不活動状況の調査・分析・検討」に重きが置かれていた。コロナ禍に入り2年超という短い期間であるため、このことはある意味では仕方のないことだと言えよう。ただし、本グループが、「いかに予防すべきか」の議論を目指していたことを考えれば、「いかに」についての議論が少なかった点は、テーマ設定、テーマの周知、議論の進め方を含め、次年度への大きな課題となった。今後の議論に期待したい。

文責：田中 愛

健康福祉研究部会 課題 C シンポジウム

シンポジウムのテーマ	オンライン化で得られる健康、失う健康
------------	--------------------

昨年度のシンポジウムでは、コロナ禍における新しい生活様式と健康の保持・促進について、研究者や職能団体の有識者から健康づくり運動の現状や課題、個々の実践事例等を紹介いただいた。今年度は引き続き、オンライン化をはじめとする新しい生活様式が心身の健康にどのような影響を及ぼしているのかについて、異なる専門領域の研究者を三名お招きし、議論をすることとした。

まず、コーディネーターの大槻毅氏より、本シンポジウムの趣旨について説明がなされた。コロナ禍において人々の生活様式は刻一刻と変化し、一年前とは状況が異なる中で、改めて新しい生活様式における健康問題について再考することの重要性が説かれた。

次に一人目のシンポジストである甲斐裕子氏（公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所）から、コロナ禍における我が国の勤労者と高齢者の身体活動の変化に関するデータが提示され、とりわけ孤立した高齢者は身体活動量が著しく低下している現状が示された。そして、本シンポジウムの核心である「オンライン化」については、「仕事におけるオンライン化」と「プライベートでのオンライン化」に分けて考え、前者に関しては、テレワークと健康に関する研究が不十分であることを指摘されたのち、企業の様々な取り組み事例が紹介された。後者に関しては、ご自身の研究所で実施した高齢者対象のオンライン運動教室の事例が紹介され、オンライン運動教室の有効性と課題について説明がなされた。

続いて二人目のシンポジストである竹島伸生氏（朝日大学）から、長年に渡り高齢者の運動指導の現場に携わった経験を元に、コロナ禍において高齢者が運動を継続できる環境をいかに提供したらよいか、その根本的な考え方を含め様々な提案がなされた。高齢者は地域によって状況が大きく違い、その地域生活の実情に応じた運動の場の設定やコミュニティベースの考え方が重要であることが説かれた。また、運動を継続させるためには内発的動機づけの工夫が必要であり、コロナ禍においても高齢者には集団での運動方法を実施することが極めて重要であるとの考えが示された。

続いて三人目のシンポジストである久保正秋氏（スポーツ＆レジャー研究所）は、体育哲学の立場で「体験」と「健康」をどう捉えるべきか、身体図式の同調や溶解体験といった概念を交えて「体験」と「健康」の概念整理について論じられた。「体験」の始まりは身体感覚で感知できる「＜身体＞体験」であり、溶解体験を経て感性的快を生成していくものであり、一方で「健康」が指すところの **well-being** とは実は「身（み）」の **well-being** であってそれは感性的によい存在を指す。従って、＜身体＞体験によって感性的快が生成されることはすなわち「健康」＝身の **well-being** をもたらすということであると論じられた。さらに、オンライン化は物事を功利的に行うことができる一方で主観的・感情的に感じる機会が失われ、ひいては身の **Well-being** の機会を失うことになるかと警笛を鳴らされた。

総合討論では、地域間格差や経済格差を埋めてテクノロジーを使うためにはどのような工夫が出来るかについて、三名のシンポジストからそれぞれ提案がなされた。また参加者より、オンラインと対面のノウハウや真の部分をつなぐ若手学生達にどう教授していけばいいのか、オンライン化によって新たな **Well-being** の生成につながるような可能性は考えられるのか等、質問が挙がった。

○運営について

本シンポジウムは会場での参加者こそ少なかったが、当日オンラインで **LIVE** 配信され、学会終了後オンデマンド配信もなされたため、より多くの学会員に視聴していただく機会を設定できた。

文責：菅谷 美沙都

体育哲学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

口頭発表総数は3題であり、予定された行程は滞りなく遂行された。口頭発表は大会三日目（9月2日）に口頭発表①～③：14時40分～16時14分）が行われた。発表タイトルは、「競技スポーツにおける「定言命法」の現れに関する一考察」、「VR (virtual reality) の身体感覚に関する一考察 -「自己感」を中心に-」、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開催にみる国際オリンピック委員会の権力行使に対する批判的検討 -東京2020大会開催とオリンピズム推進のかかわりから-」である。質疑応答では、概念の規定や研究成果の適用範囲、今後の発展可能性について質問、意見が出された。発表者は、新たな着想や視点を得ることができたように思われる。会場には、およそ30名を超える会員が聴講し、活発で多角的な議論がなされた。

○企画について

浅田学術奨励賞受賞記念講演は、大会3日目（9月2日）の12時00分～13時00分に第11会場（2号館4階46教室）にて開催され、約90名が参加した。2021年度浅田学術奨励賞受賞者の高尾尚平会員（日本体育大学）による「スポーツ指導と暴力をめぐる思考：スポーツ科学は暴力の克服に資するのか」をテーマとした講演を実施した。司会は関根正美会員（日本体育大学）が務め、約45分の講演後、質疑応答の時間が設けられた。講演はパワーポイントのスライドを使用する形式で実施され、オンライン共有による配布用資料も準備された。演者は受賞論文の研究背景を説明したのち、スポーツ科学の活用が暴力克服のための術としていかなる意義と限界を有するかについて先行研究との関連性を具体的に示しながら、本研究の成果を披露した。また、演者の現在の問題意識と活動についても言及があり、本研究の今後の課題についても参加者との共有が図られた。

○運営について

大会実行委員会スタッフのご尽力で円滑に専門領域企画、口頭発表が進められた。今後の課題としては、参加人数が予定したよりも超過したため、会場はかなり密状態となった。感染症対策、会場環境などの観点から、次年度以降は余裕をもった会場設定申告の必要がある。また、ペーパーレス化に伴い、紙媒体の発表資料配布に代えて大会HPのコメント欄を通じて資料共有を行った会員がみられた。このような大会HPの活用ができることを参加者に周知してもよかったのではないかと感じた。

文責：田井 健太郎

体育史

研究発表及びキーノートレクチャーは、大会3日目の9月2日（金）に対面形式で実施され、オンラインによる配信等はなかった。

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

体育史専門領域の研究発表は、口頭発表が4題のみと少なかった。一方で1題35分（発表25分、質疑応答10分）の時間を確保することができ、各報告の内容を十分に共有した上で、質疑応答に入ることができた。いずれの演題についても活発な議論が交わされ、より多くの時間が配当されることが望ましい演題も見受けられた。このように発表者とフロア参加者双方にとって有意義な時間となった要因のひとつは、発表者の研究年数が比較的長く、体育史専門領域での発表にも経験を重ねていることであると考えられた。体育史、あるいは歴史研究に精通した専門領域での発表は、大学院生を含む若手研究者にとって、研究方法、研究成果の提示・発表方法等を学ぶ絶好の機会である。しかし、今大会では、大学院生などの若手研究者の発表はなく、またフロア参加者にもその姿があまりみられなかった。専門領域での演題数が少なくなり、学会大会内での専門領域の活動の規模が小さくなることは、若手研究者が専門性を勉強する機会が1つ失われるようにも感じられた。

フロア参加者は30～40名程度であった。学会大会本部のスタッフのご尽力により、各発表間の休憩時間に、パソコンの繋ぎ直しなども滞りなく行われた。会場については、感染対策のため窓が開いており、トラックの通る音などで発表者の声が聞き取りにくい部分もあったが、特段大きな問題はなかった。

○企画について

体育史専門領域では、キーノートレクチャー「比較文学で明治期日本の陸上競技を読む」を開催した。会に先立ち、体育史専門領域（独立学会としては体育史学会）の新井会長の挨拶のあと、司会の佐々木浩雄氏（龍谷大学）から、講師の牛村圭氏（国際日本文化研究センター兼総合研究大学院大学）が紹介され、10時10分より講演が始まった。

講演内容は、明治期の日本で陸上競技選手が実践したとされる「油抜き練習法」と、日本に伝わったばかりの「クラウチングスタート」について、比較文学の研究手法を用いて検討したものであった。「油抜き練習法」は、同時期の陸上競技選手である武田千代三郎の『理論実験 競技運動』（1904年）で紹介されていた。他方、「クラウチングスタート」は、競技経験のない大森兵蔵が執筆した『オリンピック式陸上運動競技法』（1912年）によって紹介されていた。講演では、これらの文献に記述された2つの練習法を丁寧に読み解くとともに、各著者の競技経験の有無などを考慮しながら、練習法の記述が海外の文献から転用され、独自の解釈も加えられたものであったと考察した。また、1896年開催の第1回オリンピック大会の100m決勝であるとの通説がある写真について、競技会の記録や当時の社会状況等から、実際には予選のものである可能性が示された。

講演は時間通り11時20分に終了した。全体での質疑応答はなかったが、講師の牛村氏には会終了後に、個別の質疑に丁寧に応えて頂いた。会全体を通してフロア参加者は40名程度であった。

○運営について

研究発表及びキーノートレクチャーのプレゼンファイルの投影、資料配付、タイムキーパー、質疑応答時のマイク対応等は、学会大会本部の学生スタッフ2名を中心に行われ、いずれも滞りなく進められた。2年ぶりの対面実施を経て、研究発表に関する議論の深まりや会員同士の情報交換が促進されることの意義を改めて実感した。その一方で、新型コロナウイルスの感染が収束しない状況や応用領域での発表が推奨されている影響もあり、専門領域での発表演題数及び参加者が少なくなっていることは課題である。研究発表の充実と参加者の安全・安心を守るという両面から、今後の開催方式については学会本部と専門領域がともに議論を重ねていく必要があるだろう。

文責：岩佐 直樹、木村 華織、小谷 究

体育社会学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

久しぶりの対面開催で行われた第72回大会の専門領域研究発表では8編の口頭発表がなされた。

溝口紀子先生（日本女子体育大学）が座長を務めた口頭発表①では高平健司先生と束原文郎先生（京都先端科学大学）が発表を行い、続く口頭発表②においては、高橋豪仁先生（奈良教育大学）の座長の下、吉田明子先生（日本大学）、宮崎亜美先生（立教大学大学院）が発表を行った。最後の口頭発表③では笹生心太先生（東京女子体育大学）の座長の下で、鳥巢明亜先生（東海大学大学院）、中山健二郎先生（沖縄大学）、下窪拓也先生（新潟医療福祉大学）の3題の発表がなされた。

○キーノートレクチャー

今回はキーノートレクチャーを実施した。演者は海老原修先生（尚美学園大学）にご登壇いただき、「体育社会学の専門性を俯瞰する」とのタイトルでお話をいただいた。なお、司会は原祐一先生（岡山大学）と工藤保子先生（大東文化大学）が務めた。

○運営について

今回、専門領域としては、前述した口頭発表とキーノートレクチャーに加え、評議員会と総会も実施した。専門領域に割り当てられた部屋のサイズは適正であったが、評議員会で使用する部屋に関しては別室を準備していただきたかった。評議員会と口頭発表が同じ部屋であったために、評議員会中に、次の口頭発表を聴きに来た会員が入室してくると行った事象が発生した。

次回、願わくば口頭発表・キーノートなどのための大・中教室と、会議用の小教室をご準備いただきたい。

あと、結果的に評議員会と総会はハイブリッド形式で実施をしたが、学会側でオンライン対応のサポートをもっとするべきだと考える。基本、領域事務局でオンラインのためのカメラや音響機器を持参するのは限界があると思われるからである。今回は当領域に所属する実行委員の先生方のご厚意でオンラインを実施することができた。お忙しい業務の傍らで私物のカメラや音響機器をご貸与いただいた先生方には感謝の念に堪えない。

文責：石澤 伸弘

体育心理学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

口頭発表は、9月2日の午後に3セッション×各3演題の構成で行われた。各セッションの座長は、口頭発表①（15時から16時02分）が長谷川弓子先生（岩手大学）、口頭発表②（16時03分から17時05分）が田中輝海先生（駿河台大学）、口頭発表③（17時06分から18時08分）が高井秀明先生（日本体育大学）であった。各セッションの発表後に、活発な質疑応答が行われた。セッション全体を通して、60～70名程度の参加があった。ポスター発表は、9月2日の午前に、第1体育館バレーボール館において、責任着座制（演題末尾・奇数：10時から11時、演題末尾・偶数：11時から12時）で行われた。1演題が、「新型コロナウイルス感染症の外出制限により来場できない発表者への対応」に基づき、大会WEBサイトのみでの発表となったが、体育心理学専門領域では全43演題の発表があった。久しぶりの対面発表であり、多くの方に参加いただいた。

○キーノートレクチャーについて

9月2日の13時から、2つのキーノートレクチャーが企画された。13時から13時50分までのキーノートレクチャー1における演者は、小野誠司先生（筑波大学）で、テーマは「運動学習メカニズムから読み解く実践的学習への示唆」であった。司会の樋口貴広先生（東京都立大学）から、演者の紹介がなされた後、約35分間の話題提供では、顕在学習と潜在学習のメカニズムの違いが解説され、それに基づく実践的な学習への示唆がなされた。話題提供後の10分間の質疑時間に、4名の先生への応答がなされ、司会の樋口先生から研究展望が述べられた。参加者は、約150名であった。次に、14時から14時50分までのキーノートレクチャー2における演者は、田中ウルヴェ京先生（慶應義塾大学）で、テーマは「トップアスリートへの心理支援の実例と提言ー東京2020大会での心理支援事例と引退後の心理的キャリア支援研究成果ー」であった。35分間にわたる話題提供では、自己紹介に続き、心理支援の実例、引退後の心理的キャリア支援が解説され、トップアスリートの心理課題の解決に向けての提言がなされた。司会は土屋裕睦先生（大阪体育大学）であり、10分間の質疑時間では、司会の土屋先生のコメントを含め5名の先生への応答がなされた。キーノートレクチャー2では、約100名の参加があった。

○運営について

口頭発表の座長については、体育心理学専門領域の学会大会委員が、人選と業務の事前説明を行った。人選は、応用研究部会での担当と重複しないように確認をしながら行われた。当日の運営も、当専門領域の学会大会委員が中心になって行い、予定された時間通りに進行され、大きな問題はなかった。対面形式で行われたキーノートレクチャー及び口頭発表の実施にかかる事前打合わせは、従来通り、開始時間の前に現地で行われた。その他、大会実行委員会運営委員のさまざまな支援により、滞りなく運営されていた。

○その他

総会は、9月2日の9時から9時35分まで行われた。参加者は約30名であった。開会の辞（杉山佳生先生、九州大学）、会長挨拶（山本裕二先生、名古屋大学）、議長選出（川田裕次郎先生、順天堂大学）が行われた後、2022年度事業など6つの事項について報告された。その後、2021年度決算報告、2022年度補正予算案などの審議事項6つが審議され、承認された。

文責：兄井 彰

運動生理学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

本専門領域では、今年度は口頭発表を行わず、ポスター発表のみ行った。登録された演題数は4件であり、大会3日目（9月2日）の11:00～12:00に責任着座制、時間内フリーディスカッションの形式で行われた。それぞれ「骨格筋由来 miRNA の網羅的解析」（膳法浩史）、「大学生における就寝前の電子機器使用制限が起床時睡眠感および自律神経系活動に及ぼす影響」（内田英二）、「グレープフルーツ精油吸引およびダイナミックストレッチングが短時間高強度運動のパフォーマンスに及ぼす影響」（宮原祐徹）、「栃木県女性アスリートのヘモグロビン正常者におけるフェリチン低値者の割合」（亀岡舞）であった。

登録演題数が少なかったのは、1週間前に日本運動生理学会大会（北海道教育大学岩見沢キャンパス）が開催された影響も考えられる。

○運営について

運動生理学領域の研究発表数は少なかったために運営上の問題はなかった。例年セッションの発表順番、座長、セッション割り振りは専門領域で行なっているが、今回はポスター発表の座長の設定が不要だった。発表演題数が少なく、領域の関係者の参加も少ない中で、座長を設定することは困難な場合もあるため、大会事務局でポスター発表を進行していただき大変助かった。

文責：運動生理学領域事務局

バイオメカニクス

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

バイオメカニクス専門領域では、両発表形式ともに受け入れを行ったが、口頭発表が4演題、ポスター発表が10演題の合計14演題と、いささか寂しい登録演題数であった。日本体育・スポーツ・健康学会では、専門領域の枠に依らない領域横断セッションでの発表が推進されていることも、少なからず影響していた可能性は考えられる。しかし同様の方式、かつオンライン開催であった昨年度の発表演題数は30演題であり、今年度は半数以下に落ち込んでいることから、その他の要因による影響は小さくないだろう。極めて主観的な話ではあるが、発表演題数の減少に伴い、バイオメカニクス専門領域の学会員、とくに若手研究者や学生の学会参加者数も減少している印象がある。実際のところ、学会期間中、学会会場で見かける同世代や近い世代の知り合いは、過去の対面開催での同学会大会と比較しても、非常に少なかったように思う。一方で、限られた参加者数であっても、活発な質疑応答が行われており、発表者、参加者ともに有意義な時間を過ごすことが出来ていたのではないだろうか。発表者、参加者はもちろんのこと、座長として取りまとめた柳谷登志雄氏(順天堂大学)に、この場を借りて感謝申し上げたい。

○企画について

バイオメカニクス専門領域では、専門領域企画として、深野真子氏(芝浦工業大学)によるキーノートレクチャー「医用画像を利用した関節のバイオメカニクス分析」を実施した。本講演は、深野氏が昨年度の日本バイオメカニクス学会学会賞を受賞されたため、受賞者講演として企画されたものである。バイオメカニクスの領域において、様々な身体運動における関節運動の計測・分析は、主要な関心事のひとつである。関節運動の計測・分析で広く用いられている光学式モーションキャプチャでは、骨の標識点を覆う皮膚の上へ反射マーカを貼付し、その反射マーカの位置情報を計測することで、関節運動の分析を行う。そのため複数の関節が密集する部位を対象とした場合、それらの関節の複合的な運動の結果を、ひとつの結果として分析せざるを得ない。そこで深野氏は、透視または *fluoroscopy* と呼ばれるシステムを用い、所謂“足関節”を構成する距腿関節と距骨下関節の運動を分離した計測・分析されている。その成果は、「In vivo talocrural and subtalar kinematics during the stance phase of walking in individuals with repetitive ankle sprains」というタイトルで、2020年に *Journal of Biomechanics* へ掲載されている。計測・分析技術という観点のみならず、その技術によって得られた臨床的な知見についても記載されているため、バイオメカニクスのみならず、様々な専門領域の方々にも是非一読いただきたい。

○運営について

バイオメカニクス専門領域としては、昨年度の日本バイオメカニクス学会の学会大会に続き、順天堂大学さくらキャンパスでの学会大会となった。学会の規模としては、日本バイオメカニクス学会と比較して、日本体育・スポーツ・健康学会が遥かに大きいものの、昨年度と同等、またはそれ以上に、細かなところに配慮されており、バイオメカニクス専門領域としては、大きなトラブル等なく、学会大会を終えることが出来た。運営に関わられた先生方やスタッフの方々、取り分けバイオメカニクス専門領域の会場をご担当いただいた町田修一氏、ならびに学生スタッフの方々へ、厚く御礼申し上げたい。

文責：橋詰 賢

体育経営管理

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

今大会においては、大会 3 日目（2 日）に口頭発表およびポスター発表が行われた。口頭発表では、阪西ララ氏（立命館大学）、永田秀隆氏（仙台大学）、荻間英樹氏（早稲田大学大学院）、による計 3 題の発表が行われた。対面での開催となり、最大 30 名程度が参加し、質疑応答では活発な議論が展開された。また、ポスター発表では、河野隆志氏（東都リハビリテーション学院）、阿部征大氏（神戸医療未来大学）、笠原春香氏（筑波大学大学院）、稲葉健太郎氏（石巻専修大学）による計 4 題の発表が行われた。口頭発表、ポスター発表いずれも対面による開催であり、昨年度は実施が困難であったフロアでのディスカッションなど発表時間外での交流機会を設けることができた。

○運営について

今大会は 2 大会ぶりの対面開催（一部オンライン）となったが、担当校（順天堂大学）の手厚いサポートもあり大きなトラブルもなく終えることができた。対面開催本来のディスカッションが展開され、その熱量を肌で感じることもできた。また、発表者にとっても、セッション後のフロアでのコミュニケーションが活発に行われ大変有意義であったという声もいくつか聞くことができた。近年の学会運営において、オンライン開催やハイブリット開催も実施され、各々の開催方法の利点欠点について実感することができた。これらの知見を基に今後の学会運営において会員全体で共有できるように検討していく絶好の機会であると感じた。当領域においても積極的に検討していきたいと考えている。

○その他

昨年度から研究発表のスタイルが、領域横断研究部会が企画する「テーマ別シンポジウム」と「テーマ別研究発表」に大きく変更となり、これまで専門領域で実施されていた口頭発表・ポスター発表が昨年同様に減少した。以前の専門領域別での発表者も自分の研究発表が「テーマ別の研究発表」に相当するのか、「専門領域別の研究発表」がよいのか迷ってしまうとの声が聞かれた。

文責：小山 さなえ、望月 拓実、阿部 拓真

発育発達

○研究発表（ポスター発表）について

研究発表はポスター発表のみで行い、16 演題の発表があった。発表時間は奇数演題が 9 時から 10 時、偶数演題が 10 時から 11 時であった。発表に関する質疑応答は、現地会場のみでの対応であった。また、Confit のコメント機能を用いても可能であった。

○企画について

キーノートレクチャーとして「短時間のコーディネーションプログラム導入における子どもへの効果—ドラウタビリティに着目して—」をテーマに安光 達雄氏（PCY, Ltd. 代表取締役）に講演をお願いした。ドラウタビリティは、自分自身が本来持っている身体能力を引き出すプログラムで Draw out ability からきた造語である。短時間のコーディネーションプログラムとしてドラウタビリティに着目し、その運動プログラムの効果を検証してきた。業間中休みを使用して 8～9 歳の児童を対象に 10 分間のプログラム介入をしてプログラムの前後に反復横とびを計測し介入・非介入群を比較検証した結果、介入群は得点が有意に上昇した。同様に追試研究した結果、介入群は有意な差を示した。このほか、これまで検証してきた研究データとその内容を説明し、短時間運動プログラムの効果について解説いただいた。

本キーノートレクチャーへの参加は約 60 名であった。

（2022 年 9 月 2 日（金）10：50～11：50 第 5 会場 2 号館 4 階 4E 教室）

文責：中西 純

測定評価

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

測定評価専門領域では、口頭発表 12 演題を 4 つのセッション（各 3 題）に振り分け、1 演題あたり発表 8 分と質疑応答 4 分の計 12 分で実施した。当日は、これらの発表に 40～60 人程度の入室があり、質疑応答の時間が短く感じるような活発な議論も行われていた。ポスター発表は、口頭発表の 2 セッション終了後にバスケ館で 13 演題のフリーディスカッションによる発表と質疑応答が行われた。それぞれのポスター前で質疑応答が行われたものの、発表者と質問者で質疑応答の時間（40 分）は短く感じた。

○企画について

今大会では、「マルチレベル分析」と題してキーノートレクチャーを開催した。100 人を超える参加者があり、本企画のような統計解析に興味を持つ学会員のためには貴重な発表であった。また、一昨年まで開催していた「統計相談コーナー」は、専門領域企画が 1 日であるため開催できないでいる。学会員にとっては統計処理や解析について測定評価の専門家に直接質問やアドバイスを受けられる機会であることから残念に思う。

○運営について

専門領域企画は 1 日開催であるため、理事会、口頭発表、ポスター発表、キーノートレクチャーをプログラムにはめ込むと他の企画を開催することができない。理事会を前日の夕方に開催できれば、もう少し柔軟にプログラムを企画することができるため、次大会では検討していただきたい。

口頭発表では、会場前のスペース確保のために最前列の机を撤去していたが、机を固定するためのネジが複数出しており、多くの参加者が躓いていた。

○その他

1. 一昨年までは、測定評価専門領域で口頭発表及びポスター発表の演題数の 1 割程度を優秀発表として選考を行っていた。今大会においてもテーマ別研究発表と専門領域別研究発表に分かれたことから、選考は行わないことにした。
2. 専門領域企画では、各プログラムが非常にタイトな時間で設定するしかなく、研究発表やキーノートレクチャーにおける質疑応答の時間が少なく、残念に感じた。
3. 学会員へのサービスとして、本研究領域では統計相談コーナーを実施していたが、最終日の専門領域企画で実施できないため、1 日目あるいは 2 日目に開催できるように配慮していただきたい。
4. タイトなスケジュールで専門領域企画を実施していることから、テーマ別研究発表から専門領域別研究発表へのカテゴリ変更はなくしてほしい。

文責：中谷 敏昭

体育方法

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

体育方法では、本年度はポスター発表のみ募集したところ、36 演題のエントリーがあった。当日、コロナ感染等の関係で共同研究者が代理発表を行うなどのケースも散見されたが、常時発表者と閲覧者で 50 名程度が会場にいたようであった。

密集を避けるために、会場では前半 18 演題、後半 18 演題に分けての発表となったが、演題数を分けたことで、かえって見るポスターがある程度絞れ、様々な研究発表をじっくりと見る事が可能となった。

口頭発表の方は行わなかったものの、テーマ別研究発表などで口頭発表を行う会員もいたり、シンポジウム、ランチョンセミナーなどで積極的に情報収集を行う会員がいたりしたため、従前の対面形式の大会より、様々な研究発表へのアクセスがスムーズになった印象を受けた。

○企画について

体育方法では、「コーチング学研究の現在」と題し、青木和浩氏（順天堂大学）の司会進行のもとで、青山清英氏（日本大学）がキーノートレクチャーを行なった。体育方法・日本スポーツ方法学会創設時から、組織統合を経て現在の体育方法・日本コーチング学会に至るまでの、研究領域分類の変化のプロセスについて、明瞭な解説がなされ、今後の本領域のビジョンが紹介された。

対面での学会大会が久しぶりであったこと。また、オンデマンドの聴講が可能だったため、会場来場者自体は多くはなかったが、質疑応答では、特に若手の研究者からの質問が多く挙がり、活発な論議が繰り広げられた。改めて対面での大会の貴重さを肌で感じる事ができた。

○運営について

前述した通り、3 年ぶりの対面開催であったが、大きな混乱もなくスムーズに進行したような印象を受けた。参加者は以前の対面開催よりも少し少ないかな？と思えたが、ランチョンセミナーの会場は比較的大勢の来場者がおり、ポスター会場も密にならず、尚且つ閑散とした感じもなく、ほどよい混み具合の中で、活発な論議ができていたように感じた。

このようなコロナ禍の状況下でありながらも、構内入校について寛大なるご配慮をいただき、入念な準備と感染対策等の微細な配慮も行き届き、円滑な会の進行に当たられた順天堂大学の関係者の実行委員の皆様に、改めて深く感謝申し上げたい。

○その他

次年度以降は、まだこの状況がどの程度変化するかが読みづらい点があるものの、今年度のように体育方法ではポスター発表を中心に検討したく考えている。口頭発表については追って検討したい。

また、企画については、2023 年 2 月末に実施予定の「日本コーチング学会大会」以降に、新たな企画案が上がる可能性があるため、現時点で詳細は検討中とさせていただきたい。しかし、この日本体育・スポーツ・健康学会大会以降に、専門学会等で対面形式が復活しており、それぞれ盛会のうちに終了していることを勘案すると、次年度は対面とオンライン（オンデマンド）を共存した形の大会になることを想定し、準備したいと考えている。

文責：野口 智博

保健

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

保健専門領域では、口頭 2 演題、ポスター 4 演題の発表が行われ、活発な質疑応答が交わされた。

・口頭発表

山田浩平氏は、愛知県内の中学生を対象とした質問紙調査から、平日よりも休日の方が Screen Time が長い傾向にあること、また、男子では Screen Time が短い方が健康度・生活習慣の得点が高く、女子では Screen Time が短い方が自己肯定感の得点が高かったこと、男女とも平日・休日における Screen Time が長い方が反動的攻撃性の得点が高い傾向が見られたことなどを報告した。

木塚宙敬氏は、Teacher Development 理論を枠組みとした質的研究として、公立中学校の保健体育科教師における性に関する指導の課題を半構造化面接と継続的比較分析法により検討した結果、「保健授業における性に関する指導へのジレンマ」「専門家を交えた協働的指導の重要性」「学習教材の参考になるデジタルリソースへの期待」の 3 つの主要なテーマが導き出されたこと等を報告した。

・ポスター発表

加藤渡氏は、愛知県下の短期大学的女子学生を対象とした調査から、体温が 35.0～35.9℃の学生が 20.6%、36.0～36.9℃が 78.7%、35.0℃未満と 37.0℃以上が各 0.4%であったこと、また、COVID-19 の蔓延によって、自分自身の体温に対して「興味が高くなった」学生が 32.8%、「少し高くなった」が 43.5%であり、体温に関する興味関心の高まりがうかがわれたこと等を報告した。

柴田景子氏は、オンデマンド型の体育授業を受講した大学 1 年生を対象とした調査から、1 人でできるウォーキング、ヨガ、体幹トレーニング等の動画や内容の総合的な評価は高かったこと、また、受講理由は「通学をしなくて良い、有効に時間を使える」が多く、曜日を決めて実施した者が約 80%であったことから、時間の有効活用や運動の習慣化の面で効果がうかがわれたこと等を報告した。

山下直之氏は、暑熱環境下での授業見学者を想定した若年男性対象の実験として、日射条件の有無で 1 時間の椅座位安静中の体温調節反応を測定した結果、日射有の方が直腸温の変化、体重減少量や心拍数や局所発汗量、皮膚血流量の変化率が高かったことから、日射有の暑熱環境では安静であっても積極的に飲水するなどの脱水予防対策を講じる必要性が示唆されたこと等を報告した。

高橋珠実氏は、20～60 代の男女における「山サウナ」の効果について、コントロール群、サウナ浴のロウリュなし群、サウナ浴のロウリュあり（ロウリュ＋アウフグース）群の比較により検討した結果、両サウナ群はコントロール群に比べて睡眠効率の平均値、主観的睡眠評価の「寝つきの良さ」「目覚めの感覚」「起床時眠気」「疲労回復」が高値となり、睡眠感が良好となったこと等を報告した。

○企画について

キーノート・レクチャーが企画された。テーマは「保健教育における技能の体系化構想に向けて」であり、演者は岩田英樹氏（金沢大学）、司会は野津有司氏（筑波大学名誉教授）であった。講演では、保健で「技能」が問われる背景、他教科における「技能」の捉え方とその系統性、家庭科教育研究にみる「技能」の特徴、教科・保健における技能の体系化（試案）の提案、学校での保健教育の機会での「技能」の扱い、「技能」に関わる他教科での主な研究成果などの話題が提供された。講演後にはフロアからの質問も出され、「技能」における小中高の系統性や評価などについての視点が共有された。

○運営について

第 70 回大会以来の対面開催となったが支障なく進められた。研究発表、企画には予想以上の多くの来場者があり、会場内外において活発な議論が交わされた。また、総会では本専門領域の 50 周年（2025 年）に向けた取組についても積極的な意見交換がなされるなど、貴重な機会となった。

文責：久保 元芳

体育科教育学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

本大会における一般研究発表は 21 題であり、発表形式別にみると、口頭発表 7 題、ポスター発表 14 題であったが、大会初日に「11 教・ポ・11」の発表の取り下げにより、ポスター発表 13 題となり、計 20 題の研究発表となった。発表内容は、カリキュラム論に関する発表が 4 題、教授・学習指導論に関する発表が 12 題、体育教師教育論に関する発表が 3 題、科学論、研究方法論に関する研究が 1 題であった。

口頭発表は、大会 3 日目（9 月 2 日）において 3 号館 4 階 401 教室を使用し、口頭発表①（10：20～11：23）、口頭発表②（14：40～15：43）の 2 つのセッションに分かれて実施された。参加者は、演題によって異なるが、口頭発表①では 30 名程度、口頭発表②では 70 名程度の参加者がみられた。5 分間の質疑応答では、フロアからの質疑が多数あり、活発な質疑応答がみられた。

ポスター発表も同じく大会 3 日目において、第 1 体育館バレーボール館を会場に 11：30～13：00 の間で責任着座制にて行われた。会場には多数の参加者が訪れ、発表者と参加者との間で活発なディスカッションが行われている様子であった。

○運営について

口頭発表の運営では、口頭発表①では、本多壮太郎先生（福岡教育大学）、口頭発表②では、大後戸一樹先生（広島大学）に座長を担当いただき、円滑に各セッションの進行をしていただいた。また、体育科教育学専門領域で使用した 401 教室の会場設営や質疑応答では大会実行委員会のスタッフにご尽力をいただき、スムーズに機器や質疑への対応をいただいた。運営上の問題点や改善点は特に見受けられなかった。ご協力いただいた座長の先生方並びに大会実行委員会に厚く御礼申し上げたい。

○その他

- ・大会 WEB サイトのみでの発表（ポスター発表）が 1 件あった（「新型コロナウイルス感染症の外出制限により来場できない発表者への対応」に該当。大会開催一週間前に日本体育・スポーツ・健康学会事務局にて対応）。
- ・第 71 回大会での一般研究発表は 28 題（口頭発表 14 題、ポスター発表 14 題）に比して、今大会ではさらに発表数の減少がみられた。本件については、専門領域での研究発表を運営する上で、今後の課題としたい。

文責：陳 洋明

スポーツ人類学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

今回は、3題の口頭発表が行われ、座長と発表者に加え、およそ20名程度の参加者がいた。「野球マンガからみる現代の高校野球選手の野球観について」に始まり、「近現代における沖縄闘牛の歴史－農村娯楽から土着文化へ」、「明治のおもちゃ絵・絵双六に描かれた「スポーツ」と、本専門領域に相応しい多様なテーマを題材とする刺激的な発表が行われ、フロアとの質疑応答、ディスカッションも大いに盛り上がった。

○企画について

今回は2つのキーノートレクチャーを企画した。一つは「ナショナリズムを組織する－植民地期インドネシアの「原住民」はサッカーから何を学んだのか－」と題して、東洋大学アジア文化研究所の加藤剛先生に講演いただいた。もう一つは「身体文化への学際的アプローチ－牧畜民マサイを対象にした研究から学んだこと－」と題して、筑波大学/日本学術振興会の田暁潔先生に講演いただいた。どちらも、スポーツ研究に必要な学際的な視点の重要性を示す内容であり、今後のスポーツ人類学の発展に寄与する重要な知見を共有していただいた。

○運営について

専門領域の活動を1日でまとめなくてはならず、運営上の時間的な厳しさを感じる。せめて2日間程度の時間的余裕の中で、研究発表と企画を実施できるように配慮をしてもらいたい。

○その他

上記の「運営について」とも関連するが、専門領域の独自性、独立性を維持できるような大会のあり方を検討してほしい。研究部会を中心としたテーマ別の発表・シンポジウムの魅力はもちろん理解しているが、同時に各々の専門領域だからこそ扱える研究テーマもあるはずで、そうした可能性を狭めない大会になってほしい。

文責：小木曾 航平

アダプテッド・スポーツ科学

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

大会3日目の専門領域のプログラムでは、午前中にキーノートレクチャーと総会、午後にポスター発表が行われた。午後のポスター発表では、7題の研究発表が行われた。昨年に引き続きテーマ別研究発表が中心となったことから、多くの発表者が自分の研究内容と関わりのあるテーマ別研究発表にエントリーするようになった。一方で、3日目に専門領域のプログラムとしてポスター発表の機会を設けることで、テーマ別研究発表の内容とは合致しない内容などが報告され、アダプテッド・スポーツに関連する最新の研究を知る貴重な機会となった。また、ポスターの前で発表者や参加者同士が様々な議論を行う場面も見られ、対面実施ならではの有意義な機会となった。

○企画について

本専門領域では、3日目の午前中（10:00～11:30）にキーノートレクチャーを実施した。従来の学会の運営方式では専門領域でのシンポジウムが実施されてきたが、テーマ別を中心とした運営に変わったことを受け、今回はキーノートレクチャーを実施することとなった。具体的には、国内のアダプテッド・スポーツ分野を牽引されてきた安井友康先生（北海道教育大学）を招聘し、『「アダプテッド」の系譜 ―用語のもつ意味を解き明かす―』と題するレクチャーが実施された。障害者スポーツ／パラスポーツと呼ばれる取り組みが進む中、大学や指導者養成などでも、アダプテッド・スポーツについて学ぶ機会が増えてきた。しかし、アダプテッド・スポーツの「アダプテッド」とは何か。その概念はどのようなものなのか。これらの問いを紐解いていくために、今回のキーノートレクチャーが企画された。その内容の報告は別の機会に委ねるが（本専門領域発行のニューズレターに掲載予定）、本専門領域のこれまでの取り組みを振り返り、そして今後の発展を目指していく上で、大変貴重な話ばかりであった。

昨年も述べたが、本専門領域は独立学会を持っていないことから、会員が一同に集まることができるのは日本体育・健康・スポーツ学会の学会大会のみである。3日目の専門領域の日にキーノートレクチャーを行ったことは、会員が一同に集まるきっかけとなり、大変よい機会となった。

文責：村上 祐介

介護予防・健康づくり

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

口頭発表では、静岡産業大学の館俊樹が座長をつとめ、2 演題が発表されました。14 介 01 の「An Attempt to Manage Frailty and Ensuring Healthy Aging of Indian Women through Multicomponent Progressive Exercise Intervention」では、BANDYOPADHYAY NITA 先生がインドにおけるエクササイズプログラムの効果が紹介されました。このプログラムでは、中流階級の恒例女性 105 人を対象に 10 週間の「multicomponent progressive exercise programme」前後の筋力、動的バランス、体幹柔軟性、歩行速度を計測され、エクササイズの有効性が報告されました。フロアからは英語での発表であるにも関わらず、複数の質問がありました。14 介 02 の「高強度運動における異なる香りの呈示が運動パフォーマンスおよび身体に与える影響」では、遠藤慎也先生が香りの強さや好みと血中乳酸濃度の関連について報告されました。フロアからは、検証の方法や測定環境などについての意見があり、活発な議論が行われました。

○企画について

介護予防・健康づくりではキーノートレクチャーとして「メディカルフィットネス vs EIM (Exercise Is Medicine)」を田中喜代次先生にお話しいただき、司会は久野 譜也先生担当しました。健康診断における指標が必ずしも健康を示すものではないことや運動が必ずしも薬と同等の効果をもたらさないことなどに触れ、Exercise for Life Enjoyment という視点で運動の重要性を解説されました。

○運営について

教室担当のスタッフが質問者へのマイクの引き渡し、発表者のプレゼンテーション補助等、精力的に対応を行ってくれたため、円滑に演題を進めることができました。

文責：館 俊樹

体育・スポーツ政策

○研究発表（口頭発表・ポスター発表）について

体育・スポーツ政策専門領域の研究発表（口頭発表）は、2022年9月2日（金）14:40～17:41で行われた。第1セッションは、中西純司会員（立命館大学）による座長の下、沖村多賀典会員（名古屋学院大学）「スポーツ政策の中央地方関係を位置づける財政支出の分析を通して」、齋藤健司会員（筑波大学）「フランスにおけるスポーツ団体保険制度の課題」、江原昭博会員（関西学院大学）「課外活動の積極的な内部化」の3つの発表があった。第2セッションでは、五賀友継会員（国際武道大学）を座長とし、BENU GUPTA（KMC, University of Delhi, India）National Education Policy 2020 INDIA – ‘Play for All’、Meyer Martin（University of Vechta）‘Competence Goals in Martial Arts Education – A Comparison of German - Japanese PE Curriculums’と海外協定学会から2本の発表が行われた。第3セッションでは、沖村多賀典会員（名古屋学院大学）を座長に、楊紅梅（筑波大学大学院）・齋藤健司（筑波大学）「日本における相撲協会の財団法人化に関する研究」、李伊凡（早稲田大学大学院）・堀野博幸（早稲田大学）「中国におけるサッカーに関する普及策と実施効果の研究」の2つの発表があった。

参加者に関して、発表ごとに出入りがみられたが、常時40～50名が参加していた。

○企画について（キーノートレクチャー、総会）

キーノートレクチャーを、9月2日（金）の12:15～13:10に、松畑尚子会員（龍谷大学）を司会とし、真山達志会員（同志社大学）による「スポーツ政策と公共政策における」をテーマに実施した。終了時の参加者は45名であった。

その後専門領域総会を開催し、2022年度事業計画案及び予算案の承認、各種規約（改正含む）の審議等を行った。

○運営について

2021年4月発足の本専門領域としては、昨年が設立総会だけの企画であったことから、今回が実質的に初めての学会参加であった。したがって、準備段階から手探り状態であったが、学会事務局のサポートを受けながら、無事終了することができた。

今後は、会員の拡大を図るとともに、隣接他領域と連携しながら、研究活動を活発化させていくことが期待される。

○その他

研究発表（口頭発表）の第2セッションでは、英語による発表のため質疑応答等が懸念されたが、五賀友継（国際武道大学）座長をはじめ、フロアと発表者の間で活発な意見交換が行われた。

文責：森 浩寿